ISSN 1348-3080

Number 15-16

Bulletin of the Kyushu University Museum

旧工学部本館４階会議室の歴史的家具と蓄音機

March 2018

The Kyushu University Museum

Bulletin of the Kyushu University Museum

March 2018
Number 15-16

Contents

Yusuke HIBINO and Noritaka MOCHIOKA — 1
Fish Collection of Nanyo Islands Found from the Specimen Building of Fisheries and 3rd Building of Faculty of Agriculture, Kyushu University, Collected by Dr. Teiso Esaki

Keiko KAWAHARA, Katsuya KIDO, Munetoshi MARUYAMA — 17
Rove Beetles Collected in Genkai-nada Coast, Fukuoka Prefecture

Misako MISHIMA — 31
The Acceptance History and Overview of Tamura Satoshi Collection

Mariko OKUBO — 35
SP Record Database Produced by Satoshi Tamura
—Features and Challenges for Publication—

Hisao OSHIMA — 45
Koume Akasaka and the Culture of the Coal Mining Area of Chikuho – the Locality of New Balladry

Yoshinori KYOTANI — 57
The Iconography of SP Sleeves: Notes on the Designs of SP Records

Misako MISHIMA — 65
Towards a New Way of Preservation and Utilization of the Historical Wooden Furniture of Kyushu University

Ryuji ARAI, Misako MISHIMA — 69
Value and Challenges of Historical Wooden Furniture Collections of the Kyushu University Museum

Akiko SHIMBO — 87
The Reuse of Second-Hand Furniture: A Case Study of the SOFA Project in Bristol, UK

The Kyushu University Museum

Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.1-15

九州大学水産学標本室および農学部３号館より発見された江崎悌三博士による南洋諸島の魚類コレクション

日比野友亮・望岡　典隆

九州大学大学院農学研究院水産増殖学研究室：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：南洋諸島で採集されたガラス標本瓶62点119個体の魚類標本が、九州大学箱崎キャンパスの水産学標本室と農学部３号館から発見された。このコレクションは、Natural History Museum of Stanford の動物部門のキュレーターである Albert William Christian Theodore Herre 博士の求めに応じて江崎悌三博士によって1937年から1938年にかけて収集されたもので、そのほとんどが Herre（1939）によって報告された標本の一部であった。一連のコレクションからは32種57種が確認され、13種が再同定された。

キーワード：博物標本、九州帝国大学、江崎悌三、Stanford University、Albert Herre

はじめに

九州大学農学部水産学第二講座（現大学院農学研究院水産増殖学研究室）では初代教官内田恵太郎博士以来の国内外の多数の魚類標本が収集、保管されている（九州大学総合研究資料館設置準備委員会，1985；望岡，2011）。なかでも戦前から戦後にかけて内田が朝鮮半島、中国、そして九州を中心とする日本各地から収集した魚類生活史研究の標本、いわゆる内田コレクションは歴史的価値が高いことはもちろん、その多くが実際の研究に用いられており（内田ほか，1958；内田，1964）、我が国における魚類生活史研究の黎明期の熱意を垣間見ることのできる学術的価値の高い標本群である。内田コレクションは九州大学総合研究博物館海洋生物標本データベースに登録され（現在は非公開）、そのすべてが適切な保存処置を施され、九州大学総合研究博物館（旧工学部本館）に保管されている（望岡，2011）。

九州大学箱崎キャンパスの移転事業に伴う標本整理の過程で、戦前にミクロネシア連邦とパラオ（いわゆる南洋諸島の一部）で採集された魚類標本が多数確認され、そのほとんどが農学部動物学第二講座（現昆虫学研究室）の教官江崎悌三博士によって採集されたものであった（Fig. 1）。本稿ではこれらの標本の再同定を行うとともに、所蔵の経緯について論じた。標本の再同定にあたっては Carpenter（1988）、Myers（1999）および中坊（2013）を参照した。発見された標本はすべて九州大学総合研究博物館魚類標本（KYUM-PI）として登録した。

Fig. 1. Dr. Teiso Esaki (provided by T. Hirowatari and T. Mita).

標本の発見状況

戦前に南洋諸島で採集された一連の魚類標本（江崎コレクション）は2017年５月に相次いで発見された（Fig. 2）。発見された標本は瓶数にして62点、個体数にして119点で、そのほとんどが水産学標本室前室奥の木棚に無造

Fig. 2. Esaki's collection bottles in the Specimen Building of Fisheries when we found (arrows).

作に並べられていた。わずかに各１点が同標本室後室の棚（オオウナギ *Anguilla marmorata*）と、農学部３号館６階の学生実験室の教壇下の戸棚（クモウツボ *Echidna nebulosa*）から発見された。

水産学標本室の標本は2005年の福岡県西方沖地震（玄海地震）の甚大な被害を受けており、多数の標本瓶が落下、破損していたが、発見された標本瓶の大半は全く割れていないか、またはごく一部の破損がみられる程度であった。62点の標本瓶のうち、19点は完全に瓶内部の液が蒸発しており、一部に虫食いが発生しているものもあっ

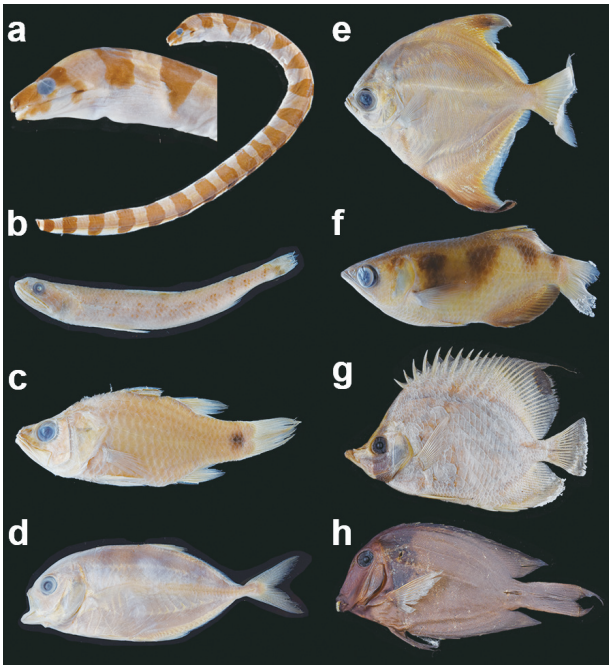


Fig. 3. Part of Esaki's collection. (a) *Gymnothorax ruppellinae*, KYUM-PI 4930; (b) *Saurida nebulosa*, KYUM-PI 4947; (c) *Yarica hyalosoma*, KYUM-PI 4927; (d) *Caranx papuensis*, KYUM-PI 4924; (e) *Monodactylus argenteus*, KYUM-PI 4940; (f) *Toxotes jaculatrix*, KYUM-PI 4897; (g) *Chaetodon auriga*, KYUM-PI 4906; (h) *Ctenochaetus striatus*, KYUM-PI 4902.

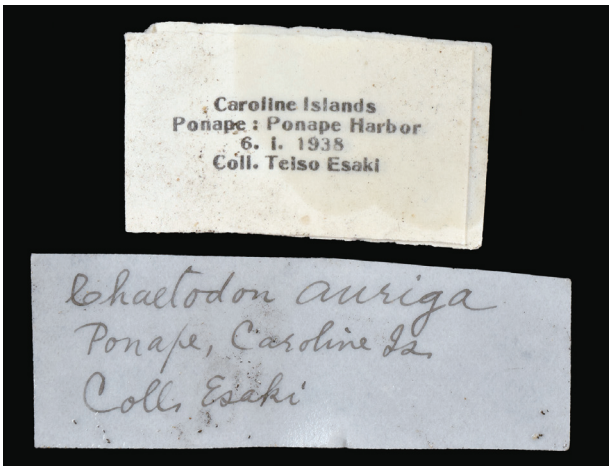


Fig. 4. Typing specimen label (upper) and handwriting label with identification (lower).

たが、多くは保存液の多寡はともかくとして、辛くも液浸の状態を保っていた。発見された標本の一部にはヤスで突いた跡があるが、標本の固定状態は腐敗の痕跡がみられず極めて良好であり、採集地での適切な標本作製作業が行われたと推測されるものであった（Fig. 3）。

標本瓶には基本的に２種類の紙ラベルが同封されていた。一方はタイピングによって印字された詳細なロカリティ情報（採集地、採集日および採集者）であり、他方は種名と最低限の採集地（例えば Ponape のみ）、稀に採集者や採集日などの書かれた手書きのものであった（Fig. 4）。瓶の中に複数個体の標本が含まれる場合には、タイピングのラベルも複数枚、通常標本の個体数に応じて同封されていた。標本瓶の外側には朱色の縁取りのあるシールが貼られており、１ないし２桁の数字が視認できた（ただし、相当数が脱落していた）。

標本の再同定

標本の再同定を行った結果、32科57種が確認された。標本瓶に同封されていた種名の手書きラベルは非常に同定精度が高いもので、現在は他の有効種の新参シノニムとされるものを除くと、同定結果が完全に誤りであったものはわずかに13種であった（巻末の checklist を参照）。

標本収集の経緯

ここで、標本収集の経緯を論じておきたい。当時九州帝国大学助教授であった江崎悌三博士は、昆虫学分野の専門家として1936年から1939年にかけて南洋庁の委嘱により南洋諸島（現在の北マリアナ諸島、パラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦に相当する地域）各地を訪問した（江崎，1984；長谷川，1984）。江崎は膨大な昆虫標本のコレクションを残しているが、なかでも27000点に及ぶミクロネシア産昆虫標本は他に類を見ないもので、国内外の研究者に多数利用されている（九州大学総合研究博物館，2005）。江崎は昆虫学を専門としながら、生物学全般に関しての興味が旺盛であった。南洋諸島の探検に際しても、昆虫以外にもさまざまな生物、たとえば菌類や藻類の標本資料を持ち帰り、各分野の専門家へ提供している（山口，1939；今關，1941）。江崎の南洋探検資料に基づいて行われた研究成果には、必ず Results of Professor Teiso Esaki's Micronesia Expedition 1936, No. 14. あるいは江崎教授1936－1939年ミクロネシア探検報告、No.51といった形でその成果物である旨が明記された（長谷川，1984）。九州大学農学部昆虫学教室で保管されているミクロネシア探検報告の抜き刷り集には、これらの研究論文が網羅的に含まれており（全81件）、その中に１件の魚類に関する論文［Herre（1939）On a collection of fishes from Nanyo, the Japanese mandated islands］が確認された。

抜き刷り集との対応関係の確認と合わせて、標本瓶内の手書きラベルに残された文言を元に検討した結果、今回発見された標本群は、Herre（1939）によって報告された魚類標本の片割れであることが判明した。手書きラベルのうちの１枚には、「for Stanford」との１文がかき添えられていた。Stanford とは江崎が標本蒐集を行った当時、Albert William Christian Theodore Herre 博士が在任していた Stanford University のことである。Herre はアメリカ合衆国の植物学者・魚類学者で、Philippine Bureau of Science の魚類担当を1920年から1928年まで務め、その後1928年から1946年まで Stanford University の Natural History Museum of Stanford の動物部門のキュレーターとして、主に魚類分野で活躍した。Herre は魚類に関する多数の著作を残しているが、この中にパラオの魚類を扱ったものが数報確認され、Herre（1939）のみに江崎に関する記述が確認された。Herre（1939）では序章の中で標本収集の経緯について詳述され、Herre 自身が数年前にパラオでの魚類採集中に江崎と会ったこと、江崎が1937年10月から1938年３月にかけ、昆虫採集の傍ら魚類採集を行ったこと、江崎が Herre の元へ一連の魚類標本を丁重に送ったことが記述されている。江崎の南洋諸島滞在は1936年２月から３月、1937年10月から1938年３月、1939年６月から９月の計３回である（江崎，1984）。このことから、江崎は第１回ないし第２回の南洋調査時に Herre と会い、魚類標本収集の要請を受けたものと推測される。

今回発見された標本群は江崎自身の採集による1937年から1938年にかけてのものについて、その体長と種名ラベルからほぼすべてが Herre（1939）で報告された標本であると判断された。Herre はフィリピン赴任時代からいくつかの魚類相あるいは魚類分類に関する研究論文を出版していることから、手書きの標本ラベルに記された高い種同定の精度にも首肯できる。実際に、このラベルは Herre 自身によって書かれたものであることが判明した（David Catania 氏，私信）。Herre（1939）で用いられた標本のうち、47ロット80個体については Natural History Museum of Stanford の標本として登録され、その後 California Academy of Sciences（機関略号 CAS-SU）に移管されている。Herre（1939）と実際の２機関に所蔵されている標本を照合した結果、少なくとも41種71個体［ハゼ科標本の発見（後述）により38種67個体となった］の標本が行方不明であることが判明した（Table 1）。特にベラ科とハゼ科についてはほとんどの標本が行方不明であ

Table 1. List of Esaki's collection reported by Herre (1939), Kyushu University (KYUM) and California Academy of Sciences (CAS-SU).

Scientific name in Herre (1939)	Number of specimens			
	Herre (1939)	KYUM	CAS-SU	Unknown
Spratelloides delicatulus	10	-	3	7
Anguilla mauritiana	2	-	1	1
Anguilla mauritiana	2	1	1	0
Muraenichthys macropterus	1	1	-	0

Ophichthus cephalozona	1	1	-	0
Echidna nebulosa	1	1	-	0
Gymnothorax boschi	1	1	-	0
Gymnothorax petelli	1	1	-	0
Gymnothorax undulatus	2	1	1	0
Plotosus anguillaris	6	4	2	0
Saurida gracilis	2	2	-	0
Tylosurus giganteus	1	-	-	1
Hemiramphus dussumieri	3	-	1	2
Zenarchopterus brevirostris	12	3	4	5
Myripristis adustus	1	-	-	1
Holocentrus sammara	1	1	-	0
Aulostomus valentini	1	-	-	1
Atherina forskali	7	-	2	5
Liza macrolepis	2	-	-	2
Mugil engeli	2	1	1	0
Sphyraena barracuda	2	1	1	0
Caranx ignobilis	6	4	2	0
Caranx sexfasciatus	1	1	-	0
Caranx sexfasciatus	5	4	2	0
Leiognathus equulus	1	1	-	0
Leiognathus fasciatus	5	3	2	0
Gerres abbreviatus	5	-	2	3
Apogon hyalosoma	2	1	1	0
Apogon lateralis	9	5	4	0
Apogon lateralis	1	1	-	0
Apogon orbicularis	1	1	-	0
Apogonichthys auritus	1	-	-	1
Kuhlia rupestris	2	-	1	1
Kuhlia rupestris	2	1	1	0
Cephalopholis urodelus	1	-	-	1
Epinephelus merra	2	1	1	0
Plesiops nigricans	4	3	1	0
Lutianus russelli	1	1	-	0
Lutianus vaigiensis	3	2	1	0
Lutianus vaigiensis	1	-	-	1
Caesio caerulaureus	14	5	6	3
Caesio pisang	8	5	3	0
Scolopsis cancellatus	3	2	1	0
Scolopsis ciliatus	8	5	3	0
Lethrinus harak	1	1	-	0
Lethrinus harak	1	-	1	0
Pentapus caninus	5	4	1	0
Kyphosus cinerascens	2	1	1	0
Mulloidichthys samoensis	9	6	3	0
Parupeneus barberinus	2	-	-	2
Parupeneus trifasciatus	2	1	-	1
Monodactylus argenteus	2	1	1	0
Monodactylus argenteus	1	1	-	0
Toxotes jaculator	5	3	2	0
Chaetodon auriga	3	2	1	0
Chaetodon ephippium	1	-	1	0
Chaetodon trifasciatus	2	1	1	0
Zanclus cornutus	2	1	1	0
Acanthurus triostegus	2	1	1	0
Ctenochaetus strigosus	1	1	-	0
Zebrasoma flavescens	1	1	-	0
Lo vulpinus	1	-	-	1
Teuthis concatenata	5	3	2	0
Teuthis fuscescens	3	2	1	0
Teuthis javus	1	1	-	0

Chromis ternatensis	17	11	6	0
Pomacentrus amboinensis	3	2	1	0
Pomacentrus tripunctatus	2	1	1	0
Abudefduf cyaneus	2	-	-	2
Abudefduf glaucus	1	1	-	0
Abudefduf sordidus	1	1	-	0
Abudefduf septemfasciatus	1	-	-	1
Abudefduf septemfasciatus	1	-	-	1
Choerodon anchorago	4	3	1	0
Halichoeres margaritaceus	1	-	-	1
Labriodes xanthurus	1	-	-	1
Stethojulis axillaris	2	-	-	2
Stethojulis phekadopleura	1	-	-	1
Stethojulis strigiventer	6	-	2	4
Scarus erythrodon	1	-	-	1
Scarus harid	3	3	-	0
Bunaka pinguis	1	1	-	0
Eviota viridis	2	-	-	2
Valenciennea muralis	1	1	-	0
Amblygobius esakiae	2	-	1	1
Amblygobius perpusillus buanensis	2	-	1	1
Chonophorus genivittatus	2	-	1	1
Ctenogobius caninus	1	1	-	0
Gnatholepis punctangoides	2	1	-	1
Glossogobius biocellatus	1	-	-	1
Periophthalmus barbarus	2	-	-	2
Vaimosa horiae	1	-	-	1
Tripterygion minutum	1	-	-	1
Balistes chrysopterus	1	1	-	0
Tetraodon hispidus	2	-	-	2
Tetraodon immaculatus	2	-	1	1

る。行方不明の標本については他の研究機関の研究者に貸与あるいは譲渡されているか、あるいは水産学標本室への移動の際に失われたものと推測される。

九州大学と Stanford University の標本の内訳を見ると、基本的に１個体しか採集されていない種の標本はすべて前者に所蔵され、複数個体が得られているもののみが後者に所蔵されていることが興味深い。江崎は1935年から1936年に行われた、Bernice Pauahi Bishop Museum の出資によって行なわれた Micronesia Expedition の採集物が、その調査の大半が日本人によって行われながら、ほとんどハワイに発送されたまま返送されていないことを嘆いている（江崎，1984）。江崎はこの前例を踏まえて、Herre に対し標本の返送を細かな注文を付けて依頼したのかもしれない。なお、魚類学分野では異例とも思える上記のような採集物の分譲は、昆虫学分野では現在でも普通に行われている（丸山氏，私信）。

九州大学における標本の所蔵

九州大学では1941年に水産学科が新設されるまで水産学を扱う講座はなく、魚類を専門とする教官は皆無であった。1941年12月には太平洋戦争が開戦したことを踏まえると、一連の魚類標本はそれ以前に返却されたと考えるのが妥当である。すなわち、江崎が Herre に標本の返却を要求した時点では九州大学には水産学科はなかったと思われる。それまでの江崎の経歴や、彼自身の随筆から、彼が博物学的視点から九州大学の自然史コレクションを充実させることを重視していたことは想像に難くないが、一連のコレクションがこれまで破棄されることなく所蔵されてきたことには驚きを禁じ得ない。

江崎コレクションの水産学標本室への受け入れの経緯については全く不明であり、その存在については近年の水産増殖学研究室では認識されてこなかった（本田，松井，中園，多部田氏，私信）。このことから、江崎コレクションは相当古い段階、すなわち、内田が退官する以前に受け入れられたものと推察される。内田は江崎や、動

物学第一講座の三宅貞祥博士と懇意で、水産学第二教室の設置当初には農学部旧２号館の動物学教室に間借りし第一講座の教官と同居していた（九州大学農学部創立50周年記念会，1971）。内田は赴任初期に江崎からコレクションの存在を知らされており、内田が江崎から直接譲り受けたものと考えるのが妥当であろう。このことは、先述した江崎コレクションの標本瓶外側に貼られた朱色の縁取りのあるナンバーラベルが、江崎コレクションをのぞく内田の国内外標本のそれにも貼られていることからも支持できる。

水産学標本室は1959年に水産学第二講座の塚原博博士の尽力によって設置されたもので、それまで貝塚門にほど近い位置にあった水産学科校舎で保管されていた魚類標本が収蔵されたのち、塚原や道津喜衛博士、多部田修博士らによって収集された標本が次々に収蔵された。設置当初から塚原の退官前後までに蓄積された標本群は、ほとんど手付かずのまま現在まで保管されてきた。

我が国における戦前から戦後にかけて採集された魚類標本は、戦時下の空襲によって焼失、あるいは大学キャンパスの移転や建て替えに伴って廃棄されてきた。今回の標本群は、九州大学が戦時の大規模な空襲被害を免れたことに加えて、水産学科創立以来70余年の長きにわたり箱崎キャンパスを利用してきたこと、水産学標本室を別棟で建設し、建て替えを行わなかったこと、内田とその弟子たちによって、標本を残す重要性が黎明期から認識されていたことがこれまで現存し得た要因であると考えられる。魚類学分野においては、これまでに存在が知られていた内田コレクションとともに、江崎コレクションについても九州大学の誇るべき歴史的資産とみなすべきであろう。

追記：生物学研究所からの標本発見

九州大学における江崎コレクションの発見の顛末をまとめた本稿投稿後に、新たに行方不明であったハゼ亜目標本４点が皇居内の生物学研究所で保管されていることが宮内庁侍従職の藍澤正宏氏からの情報提供によって判明した。生物学研究所にはハゼ亜目の系統分類学的研究を行った高木和徳博士のコレクションが移管されている（藍澤氏，私信）。本４標本はこのコレクションの中に含まれていた。高木は九州大学でハゼ科魚類の生活史研究を行っていた道津喜衛博士から多数のハゼ科魚類の寄贈、貸与を受けており、本４標本についても他の標本と同様、内田から道津に与えられたのちに、高木に寄贈あるいは貸与されたものと考えられる。なおこれらの標本については、すでに九州大学に返送されたため、九州大学総合研究博物館魚類標本として登録を行った。この点を踏まえてchecklistおよびTable 1については適宜修正を行った。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、九州大学総合研究博物館の丸山宗利氏と九州大学農学部昆虫学研究室の三田敏治氏には貴重な文献の数々を閲覧させていただくともに、昆虫標本に関する情報提供をいただいた。元九州大学の本田輝雄氏、松井誠一氏、中園明信氏ならびに多部田修氏には九州大学所蔵の魚類標本に関する貴重な情報をご教示いただき、鹿児島大学総合研究博物館の吉田朋弘氏および鹿児島水圏生物博物館の岩坪洸樹氏には標本の同定にご協力いただいた。カリフォルニア科学アカデミーのDavid Catania氏にはAlbert William Christian Theodore Herre氏の筆跡について資料とともにご鑑定、ご教示をいただいた。宮内庁侍従職の藍澤正宏氏には生物学研究所の標本についての情報を提供いただくともに、標本返送にご尽力いただいた。九州大学農学部昆虫学研究室の広渡俊哉氏には江崎悌三氏の肖像写真の利用をご快諾いただいた。九州大学総合研究博物館の三島美佐子氏には原稿執筆を勧めていただいた。この場をお借りして深く御礼申し上げる。

参考文献

Carpenter, K. 1988. FAO SPECIES CATALOGUE. Vol.8. Fusilier fishes of the world. An annotated and illustrated catalogue of Caesionid species known to date. FAO, Rome. 75 pp., 5 pls.

江崎悌三．1984．南洋群島の動物学探検小史．pp. 71－110．上野益三・長谷川仁・小西正泰（編）江崎悌三著作集．第一巻．思索社，東京．

長谷川仁．1984．解題．pp. 329－346. 上野益三・長谷川仁・小西正泰（編）江崎悌三著作集．第一巻．思索社，東京．

Herre, A. W. C. T. 1939. On a collection of fishes from Nanyo, the Japanese mandated islands. Annot. Zool. Japon., 18 (4): 298－307.

今關六也．1941．南洋群島産高等菌類資料．植物研究雑誌，17 (3): 175－184.

九州大学農学部創立50周年記念会（編）．1971．九州大学農学部五十年史．九州大学農学部，福岡．272 pp.

九州大学総合研究博物館．2005．九州大学所蔵標本・資料 2005．43 pp.

九州大学総合研究資料館設置準備委員会（編）．1985．九州大学

所蔵標本・資料．九州大学，福岡．26 pp.
望岡典隆．2011．魚類生活史標本 ── 内田コレクション ──．pp. 34－35. 九州大学百年の宝物刊行委員会（編）九州大学百年の宝物．丸善プラネット，東京．
Myers, R. F. 1999. Micronesian reef fishes. A comprehensive guide to the coral reef fishes of Micronesia. 3rd revised ed. Coral Graphics, Guam. 330 pp., 192 pls.
中坊徹次（編）．2013．日本産魚類検索全種の同定．第 3 版．東海大学出版会，秦野．2530 pp.
内田恵太郎．1964．稚魚を求めて ある研究自叙伝．岩波書店，東京．
内田恵太郎・今井貞彦・水戸敏・藤田矢郎・上野雅正・庄島洋一・千田哲資・田福正治・道津喜衛．1958．日本産魚類の稚魚期の研究．第 1 集．九州大学農学部水産学第二教室，福岡．89 pp., 86 pls.
山口久直．1939．ミクロネシア産チリモ．陸水学雑誌，9 (2): 98－106.

Checklist of the Esaki's collection of KYUM

ウナギ科 Family Anguillidae

Anguilla marmorata

オオウナギ

KYUM-PI 4891, 350.0 mm total length（TL）, Malem Stream, Kusaie, Caroline Islands, 6 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Anguilla mauritiana*, currently treated as a junior synonym of *A. marmorata*.

ウツボ科 Family Muraenidae

Echidna nebulosa

クモウツボ

KYUM-PI 4943, 368.0 mm TL, tide pool on reef flat, Malem, Kusaie, Caroline Islands, 21 Dec. 1937, coll. T. E.

Gymnothorax buroensis

サンゴウツボ

KYUM-PI 4905, 76.0 mm TL, tide pool on reef flat, Malem, Kusaie, Caroline Islands, 21 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Gymnothorax boschi*, currently treated a junior synonym of *E. nebulosa*.

Gymnothorax ruppellinae

クラカケウツボ（Fig. 3a）

KYUM-PI 4930, 170.6 mm TL, tide pool on reef flat, Malem, Kusaie, Caroline Islands, 21 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Gymnothorax petelli*, currently treated as a junior synonym of *G. ruppellinae*.

Uropterygius micropterus

アミキカイウツボ

KYUM-PI 4931, 163.4 mm TL, tide pool on reef flat, Malem, Kusaie, Caroline Islands, 21 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Gymnothorax undulatus*.

ウミヘビ科 Family Ophichthidae

Scolecenchelys macroptera

クリミミズアナゴ

KYUM-PI 4932, 210.0 mm TL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Muraenichthys macropterus*.

Ophichthus cephalozona

KYUM-PI 4904, 356.0 mm TL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

ゴンズイ科 Family Plotosidae

Plotosus lineatus

ミナミゴンズイ

KYUM-PI 4955, four specimens, 119.3－183.1 mm standard length（SL）, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Plotosus anguillaris*, currently treated as a junior synonym of *P. lineatus*.

エソ科 Family Synodontidae

Saurida nebulosa

ウチウミマダラエソ（Fig. 3b）

KYUM-PI 4947, 106.2 mm SL, KYUM-PI 4948, 77.4 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Saurida gracilis*.

イットウダイ科 Family Holocentridae

Neoniphon sammara

ウケグチイットウダイ

KYUM-PI 4911, 144.8 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Holocentris sammara*.

ボラ科 Family Mugilidae

Moolgarda engeli

モンナシボラ

KYUM-PI 4949, 140.4 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Mugil engeli*.

サヨリ科 Family Hemiramphidae

Zenarchopterus buffonis

KYUM-PI 4953, two specimens, 95.8－108.7 mm SL, Ponape, date unknown, coll. T. E.

Remarks: it was not included in Herre（1939）.

Zenarchopterus gilli

KYUM-PI 4952, three specimens, 67.0－89.0 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Zenarchopterus brevirostris*, currently treated as a junior synonym of *Z. gilli*.

ハタ科 Family Serranidae

Epinephelus merra

カンモンハタ

KYUM-PI 4926, 144.7 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

メギス科 Family Pseudochromidae

Plesiops corallicola

ドンコタナバタウオ

KYUM-PI 4954, three specimens, 48.7－65.0 mm SL, Malem Stream, Kusaie, Caroline Islands, 16 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Plesiops nigricans*, known as an endemic species of the Red Sea. The Stanford specimen（CAS-SU 37345）was also reidentified as *P. corallicola* by Randall D. Mooi.

テンジクダイ科 Family Apogonidae

Fibramia amboinensis

アマミイシモチ

KYUM-PI 4916, 42.1 mm SL, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Apogon lateralis* within the same bottle of KYUM-PI 4915.

Fibramia lateralis

ワキイシモチ

KYUM-PI 4915, four specimens, 52.0－64.1 mm SL, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.; KYUM-PI 4928, 54.5 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Sphaeramia orbicularis

ホソスジマンジュウイシモチ

KYUM-PI 4944, 60.6 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Apogon orbicularis*.

Yarica hyalosoma

カガミテンジクダイ（Fig. 3c）

KYUM-PI 4927, 113.0 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Apogon hyalosoma*.

アジ科 Family Carangidae

Caranx melampygus

カスミアジ

KYUM-PI 4907, four specimens, 66.8－87.8 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Caranx ignobilis*.

Caranx papuensis

オニヒラアジ（Fig. 3d）

KYUM-PI 4924, 62.1 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Caranx sexfasciatus* within the same bottle of KYUM-PI 4923.

Caranx sexfasciatus

ギンガメアジ

KYUM-PI 4922, 180.1 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.; KYUM-PI 4923, three specimens, 73.7－95.4 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

ヒイラギ科 Family Leiognathidae

Aurigequula fasciata

シマヒイラギ

KYUM-PI 4919, three specimens, 78.2－86.0 mm SL, KYUM-PI 4933, 43.0 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Leiognathus fasciatus*; KYUM-PI 4933 was formerly misidentified as *Leiognathus equulus*.

フエダイ科 Family Lutjanidae

Lutjanus fulvus

オキフエダイ

KYUM-PI 4896, two specimens, 73.4－115.1 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Lutjanus vaigiensis*, currently treated as a junior synonym of *L. fulvus*.

Lutjanus russelli

クロホシフエダイ

KYUM-PI 4929, 78.4 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

タカサゴ科 Family Caesionidae

Caesio caerulaurea

ササムロ

KYUM-PI 4888, 106.3 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Pterocaesio diagramma

タカサゴ

KYUM-PI 4889, 4890, four specimens, 62.7－82.4 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Caesio caerulaurea* within the same bottle of KYUM-PI 4888.

Pterocaesio pisang

KYUM-PI 4950, five specimens, 59.0－99.7 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

イトヨリダイ科 Family Nemipteridae

Pentapodus trivittatus

KYUM-PI 4914, four specimens, 42.7－70.5 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Pentapus caninus*.

Scolopsis affinis

ヒメタマガシラ

KYUM-PI 4892, two specimens, 128.3－142.8 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Scolopsis cancellatus*.

Scolopsis ciliatus

ハクセンタマガシラ

KYUM-PI 4951, five specimens, 60.0－84.6 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

フエフキダイ科 Family Lethrinidae

Lethrinus harak

マトフエフキ

KYUM-PI 4942, 153.0 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

ヒメジ科 Family Mullidae

Mulloidichthys flavolineatus

モンツキアカヒメジ

KYUM-PI 4917, six specimens, 66.3－11.7 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Mulloidichthys samoensis*, currently treated as a junior synonym of *M. flavolineatus*.

Parupeneus multifasciatus

オジサン

KYUM-PI 4918, 102.7 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Parupeneus trifasciatus*, currently treated as a junior synonym of *P. multifasciatus*.

ヒメツバメウオ科 Family Monodactylidae

Monodactylus argenteus

ヒメツバメウオ（Fig. 3e）

KYUM-PI 4920, 67.1 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.; KYUM-PI 4940, 96.8 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

テッポウウオ科 Family Toxotidae

Toxotes jaculatrix

テッポウウオ（Fig. 3f）

KYUM-PI 4897, three specimens, 71.6－131.6 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

チョウチョウウオ科 Family Chaetodontidae

Chaetodon auriga

トゲチョウチョウウオ（Fig. 3g）

KYUM-PI 4906, two specimens, 55.8－89.6 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Chaetodon ephippium

セグロチョウチョウウオ

KYUM-PI 4941, 113.4 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Chaetodon lunulatus

ミスジチョウチョウウオ

KYUM-PI 4913, 69.6 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Chaetodon trifasciatus*, currently treated as a junior synonym of *C. lunulatus*.

スズメダイ科 Family Pomacentridae

Abudefduf sordidus

シマスズメダイ

KYUM-PI 4938, 46.4 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Chromis ternatensis

カブラヤスズメダイ

KYUM-PI 4946, 11 specimens, 39.3－65.5 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Chrysiptera glauca

ネズスズメダイ

KYUM-PI 4936, very poor specimen, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Abudefduf glaucus*, very poor condition.

Pomacentrus amboinensis

ニセネッタイスズメダイ

KYUM-PI 4945, two specimens, 59.4－72.7 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Pomacentrus taeniometopon

スミゾメスズメダイ

KYUM-PI 4935, 71.1 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Pomacentrus tripunctatus*.

ユゴイ科 Family Kuhliidae

Kuhlia rupestris

オオクチユゴイ

KYUM-PI 4882, 143.6 mm SL, Malem Stream, Kusaie, Caroline Islands, 16 Dec. 1937, coll. T. E.

イスズミ科 Family Kyphosidae

Kyphosus cinerascens

テンジクイサキ

KYUM-PI 4883, 137.8 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

ベラ科 Family Labridae

Choerodon anchorago

クサビベラ

KYUM-PI 4894, 152.2 mm SL, KYUM-PI 4937, two specimens, 58.2－84.3 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

ブダイ科 Family Scaridae

Hipposcarus longiceps

キツネブダイ

KYUM-PI 4939, three specimens, 56.2－70.5 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Scarus harid*, currently treated as a junior synonym of *H. longiceps*.

ハゼ科 Family Gobiidae

Acentrogobius caninus

ホクロハゼ

KYUM-PI 5287, 69.4 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: it was kept at the Biological Laboratory of the Imperial Household; formerly identified as *Ctenogobius caninus*, currently treated as *A. caninus*.

Acentrogobius multifasciatus

セイタカスジハゼ

KYUM-PI 4925, 30.1 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: it was not included in Herre（1939）because it is an inner mouth content of KYUM-PI 4923.

Bunaka gyrinoides

オウギハゼ

KYUM-PI 5288, 148.6 mm SL, Malem Stream, Kusaie, Caroline Islands, 16 Dec. 1937, coll. T. E.

Remarks: it was kept at the Biological Laboratory of the Imperial Household; formerly identified as *Bunaka pinguis*, currently treated as a junior synonym of *B. gyrinoides*.

Exyrias puntang

インコハゼ

KYUM-PI 5289, 57.7 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: it was kept at the Biological Laboratory of the Imperial Household; formerly identified as *Gnatholepis punctangoides*, currently treated as a junior synonym of *E. puntang*.

Valenciennea muralis

KYUM-PI 5290, 67.8 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: it was kept at the Biological Laboratory of the Imperial Household.

アイゴ科 Family Siganidae

Siganus argenteus

ハナアイゴ

KYUM-PI 4910, two specimens, 55.0－86.3 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Teuthis fuscescens*.

Siganus guttatus

ゴマアイゴ

KYUM-PI 4887, three specimens, 82.3－114.8 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Teuthis concatenata*, currently treated as a junior synonym of *S. guttatus*.

Siganus javus

KYUM-PI 4893, 127.2 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

ツノダシ科 Family Zanclidae

Zanclus cornutus

ツノダシ

KYUM-PI 4912, 79.2 mm SL, Wotje Atoll, Marshall Islands, 24 Apr. 1937, coll. T. E.

ニザダイ科 Family Acanthuridae

Acanthurus triostegus

シマハギ

KYUM-PI 4898, 116.5 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Ctenochaetus striatus

サザナミハギ（Fig. 3h）

KYUM-PI 4902, 86.9 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly misidentified as *Ctenochaetus strigosus*.

Zebrasoma flavescens

キイロハギ

KYUM-PI 4903, 80.1 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

カマス科 Sphyraenidae

Sphyraena barracuda

オニカマス

KYUM-PI 4934, 233.6 mm SL, tide pool along mangrove swamp, Korror, Palau Islands, 2 Feb. 1938, coll. T. E.

モンガラカワハギ科 Balistidae

Sufflamen chrysopterum

ツマジロモンガラ

KYUM-PI 4909, 67.5 mm SL, Ponape Harbor, Ponape, Caroline Islands, 6 Jan. 1938, coll. T. E.

Remarks: formerly identified as *Balistes chrysopterus*.

Received October 10, 2017; accepted December 1, 2017

Fish Collection of Nanyo Islands Found from the Specimen Building of Fisheries and 3rd Building of Faculty of Agriculture, Kyushu University, Collected by Dr. Teiso Esaki

Yusuke HIBINO* and Noritaka MOCHIOKA

Laboratory of Fisheries Biology, Faculty of Agriculture, Kyushu University: 6-10-1 Hakozaki, Higashi-Ku, Fukuoka City, 812-8581, Japan

119 fish specimens within 62 bottles collected in Nanyo Islands (Palau and Caroline islands) were found from the Specimen Building of Fisheries and 3rd building of Faculty of Agriculture, Hakozaki Campus, Kyushu University. The collections were collected by Dr. Teiso Esaki from 1937 to 1938, according to request by Dr. Albert William Christian Theodore Herre which is a curator of animal in the Natural History Museum of Stanford. Most of these were a part of specimens reported by Herre (1939). 57 species of 32 families were confirmed from the series of collections found from Kyushu University, 13 species were reidentified.

Key words: Museum specimen, Kyushu Imperial University, Teiso Esaki, Stanford University, Albert Herre

*Corresponding author: yusukeelology@gmail.com

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.17-30

福岡県玄界灘海岸で採集されたハネカクシ科甲虫

川原　恵子[1), 2)]・城戸　克弥[2)]・丸山　宗利[2)]

[1)] 福岡県立須恵高等学校：〒811-2221 糟屋郡須恵町旅石72-3
[2)] 九州大学総合研究博物館：〒815-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：ハネカクシは、福岡県の海岸からの記録は非常に少なく、ほとんど未解明の状態であり、特に潮上帯の専門的な調査は全く行われていない状況である。今回、福岡県玄界灘海岸の潮上帯に生息するハネカクシについての野外調査を2017年４月から９月まで行った。その結果、福岡県新記録の４種を含む13種が確認された。ハネカクシは適度に湿気がある海藻類の下で個体数が多かった。

キーワード：甲虫、ハネカクシ科、潮上帯、玄界灘海岸

Ⅰ．はじめに

福岡県の甲虫相については、高倉康男（1989）をはじめ多くの研究者によって、かなりの部分が明らかにされてきた。一方、海岸部については、海岸植物の繁茂する砂丘部の調査が主で、潮上帯付近の甲虫相については、ほとんど手つかずのままである。とくにハネカクシ科甲虫については、大きな科でありながら、海岸からの記録は非常に少なく、ほとんど未解明の状態であり、特に潮上帯の専門的な調査は全く行われていない状況であった。

海岸を含む水辺の生物は、埋め立てや護岸工事等による砂浜の消失や潮流変化など環境変化の影響を受けやすく、それ故、ニセセマルケシマグソコガネやアカオオハナコメツキなど絶滅危惧種に指定されているものも多い。福岡県宗像市、福津市及び糸島市は、自然豊かな都市を謳う三市であり、今後の調査で多様な種の生息の確認が期待される。しかし、海岸部の観光資源としての利用や宅地開発はこれからさらに進んでいくものと容易に想像できる。今の状態が持続可能な社会の中で保持されていくことを願い、筆者らは、福岡県宗像市、福津市及び糸島市海岸のハネカクシ類の調査を行ったので、ここに報告する。また、同時に採集されたその他の甲虫についても報告する。

Ⅱ．調査地

調査地は、福岡県宗像市、福津市、糸島市の玄界灘（図1A）に面した海岸である。各調査地の概要について述べる。

（1）宗像市付近（図1B）

① 宗像市神湊海岸（図2A）
幅30m、海岸線270m 程度。春頃、ワカメなどの海藻類が多く打上げられている。

（2）福津市付近（図1C）

① 福津市恋の浦海岸（図2B）
美しい自然海岸で、河川の流入はない。ウミガメの産卵場としても知られている。砂丘もよく発達している。幅50m、海岸線900m 程度。

（3）糸島市（図1D）

① 糸島市二丈桜井　二見ヶ浦海岸（図2C）
海水浴のオフシーズンであっても、多くの観光客で賑わう海岸。海藻が打上がっていないことが多い。また、休日前には、清掃されることもあった。砂浜は人の出入りが多いが、今回調査したのは砂浜西側の幅30m、海岸線120m 程度の礫浜。ハマヒルガオやツルナ、ハマゴウなどの海浜植物がみられる。

② 糸島市二丈桜井　大口海岸（図2D）

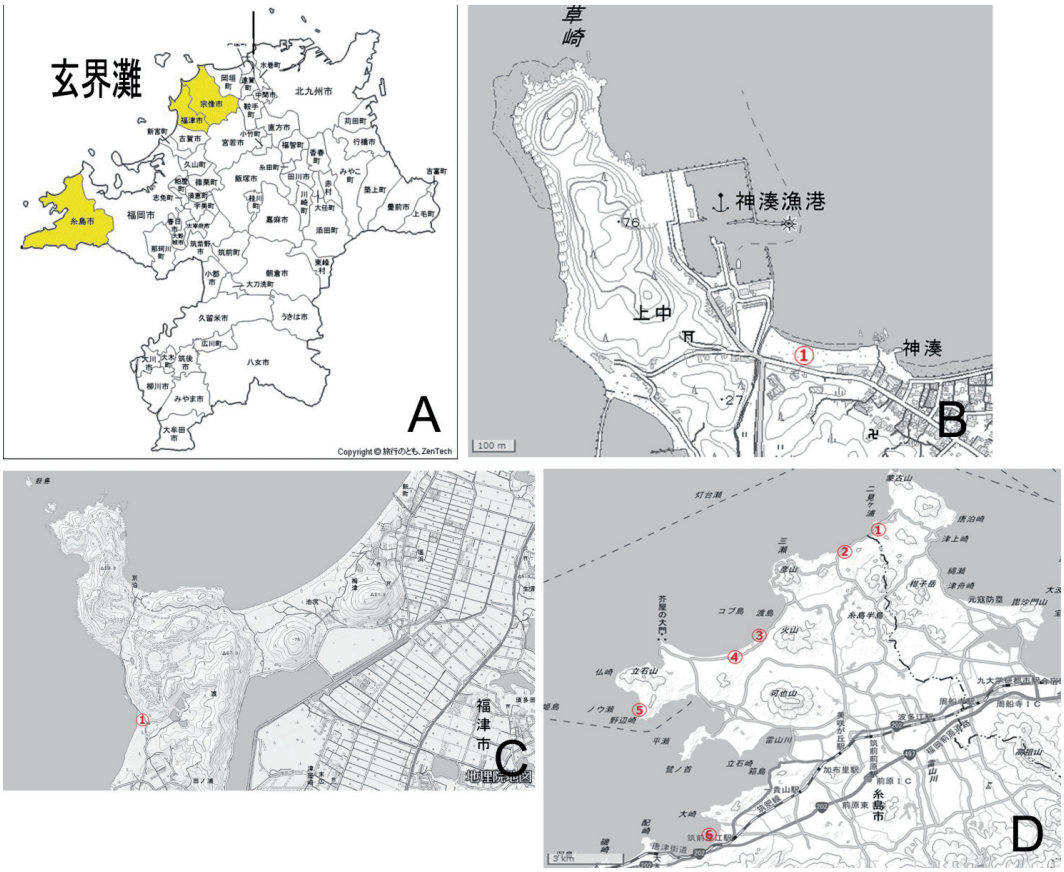


図1．A.: 玄界灘の位置　B: 宗像市神湊付近　C: 福津市恋の浦海岸　D: 糸島市付近
出典　A: 旅行のとも ZenTech
B～D: 国土地理院（地理院タイル）http://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html

近くに飲食店があり、人の出入りが多い。幅20m、海岸線600m 程度で全体的に石英に不純物が付着した黄色の砂粒が多い砂浜。

③　糸島市志摩野北　野北海岸（海水浴場の東側、野北漁港付近）（図2E）
海浜植生が良く発達している。人の出入りは少ない。幅30m、海岸線700m 程度の灰白色の砂浜。

④　糸島市志摩芥屋　幣（にぎ）の浜（図2F）
クロマツ林があり、社団法人・日本の松の緑を守る会が選定した白砂青松100選のひとつ（林野庁HP）。幅30m 程度、海岸線 6 km の砂浜が続く。砂粒は極めて細かく、さらさらとしている。コウボウムギ・ハマオモトなどの海浜植物がある。サーフィンスポットで、常に人の往来がある。クロマツ林は、定期的にマツクイムシ対策の防除剤が散布されている。

⑤　糸島市志摩芥屋　福の浦海岸（図2G）
人の出入りは少なく、静かな海岸。幅30m、海岸線800m 程度。砂浜の砂粒は、今回の調査地の中で最も細かい砂浜。

⑥　糸島市二丈深江　深江海岸（図2H）
海浜植物は少ない海岸。幅30m、海岸線700m 程度で雲母や磁鉄鉱の粒が多い砂浜。

Ⅲ．調査方法

調査は、各調査地の潮上帯付近の砂地で行った。潮上帯にあるワカメ等の海藻のうち特に湿気のあるものを選び、シャベルで砂ごとすくい上げた（図2I）。その後、すくい上げた海藻を砂ごとステンレス製網かごに入れ（図2J）、下のバットに落下した甲虫を採集した。また、周辺環境の調査のため、潮上帯より上部の砂地で、植生の根際周辺の砂をシャベルですくい、ステンレス製網かごに入れ、下のバットに落下した甲虫を採集した。採集は目視の上、吸虫管などを使った。個体密度の参考にするた

図2．調査地の景観
A: 神湊海岸　B: 恋の浦海岸　C: 二見ヶ浦海岸　D: 大口海岸　E: 野北海岸　F: 幣（にぎ）の浜海岸
G: 福の浦海岸　H: 深江海岸　I: 海藻をシャベルで砂ごとすくいあげる様子
J：すくい上げた海藻と砂をステンレス製網かごに入れる様子
K：使用した吸虫管、ステンレス製網かご、バット
L：福の浦海岸で見られた、砂に半ば埋まった状態の海藻

め、各地点の調査時間を記録した（表１）。

・ステンレス製網かご（外寸（mm）：サイズ298×235×50，底255×190，メッシュ6.5）

・バット（外寸（mm）：324×234×52，白）（図2K）

アバタウミベハネカクシ属に関しては、京都市の伊藤建夫氏に同定依頼し、その他のハネカクシについては川原が同定を行った。*Emplenota* 亜属の種同定にあたっては、解剖と封入作業により、雄交尾器と受精嚢を確認した。標本は、九州大学総合研究博物館に保管する。

表１　調査地、調査日および各調査地で得られた種、個体数

種名＼調査地	二見ヶ浦	大口	幣の浜	福の浦	深江	神湊	恋の浦	個体数
１．フトツヤケシヒゲブトハネカクシ		4	6	61	10	20	25	126
２．ツヤケシヒゲブトハネカクシ	7		7	2	4			20
３．ニセツヤケシヒゲブトハネカクシ	16	1	7	3	18			45
４．ホソセスジヒゲブトハネカクシ	1	7	4	3	16	9		40
５．ニセセスジヒゲブトハネカクシ		3				1		4
６．ウシオヒメハネカクシ	2	22	14	1	1	2		42
７．ヒメアバタウミベハネカクシ	1		4	1		1		7
８．ホソアバタウミベハネカクシ	1			1				2
９．アカバアバタウミベハネカクシ	2	23	108	72	12	113	16	346
10．オオアバタウミベハネカクシ		1		41	19	12	4	77
11．ミゾナシチビコガシラハネカクシ		1	1					2
12．ツヤウミベコガシラハネカクシ			5	3		14	2	24
13．ツヤケシアカバウミベハネカクシ			2	32		4	6	44
種数	7	8	10	11	7	9	5	
総個体数	30	62	158	220	80	176	53	
調査日　2017年　月／日	5/3.11.16.22.30,6/15	5/16.26.30,6/15	5/3.11.16.26.30,6/15	5/22.26.30,6/15	5/30,6/15	4/21,6/9	4/21,6/9	
調査に要したのべ時間数（分）	190	100	250	200	60	100	70	
調査60分あたりの個体数	9.5	37.2	38.0	66.0	80.0	105.6	45.4	

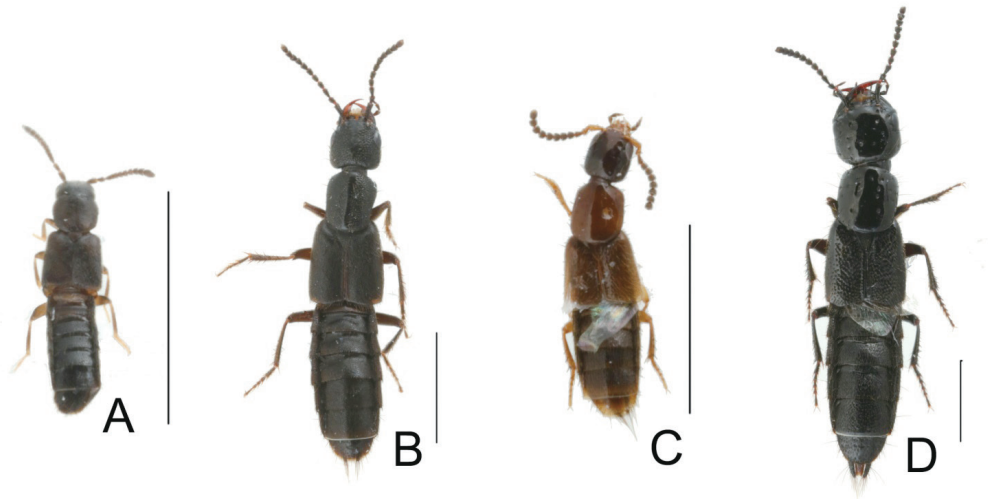


図３．福岡県新記録のハネカクシ．A, ウシオヒメハネカクシ *Adota magnipennis* (Bernhauer, 1943); B, ホソアバタウミベハネカクシ *Cafius* (*Pseudoremus*) *histrio* Sharp, 1874; C, ミゾナシチビコガシラハネカクシ *Gabronthus maritimus* (Motschulsky, 1858); D, ツヤウミベコガシラハネカクシ *Philonthus* (*Philonthus*) *nudus* Sharp, 1874　スケールはすべて、2mm。

Ⅳ．調査で得られたハネカクシ

（表１．調査地、調査日及び各調査地で得られた種、個体数）

ヒゲブトハネカクシ亜科 Subfamily Aleocharinae Fleming, 1821

1. フトツヤケシヒゲブトハネカクシ *Aleochara*（*Coprochara*）*squalithorax* Sharp, 1888

糸島市志摩桜井大口海岸：4 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 3.V.2017; 5 exs., 26.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 22.V.2017; 10 exs., 30.V.2017; 50 exs., 15.VI.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：10 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：20 exs., 21.IV.2017.

宗像市恋の浦海岸：25 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　福津市渡・福岡市東区三苫・福岡市東区勝馬（Yamamoto & Maruyama, 2013）

2. ツヤケシヒゲブトハネカクシ *Aleochara*（*Emplenota*）*fucicola* Sharp, 1874

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：7 exs.（4♂3♀）, 3.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：7 exs.（5♂2♀）, 26.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex.（♀）, 22.V.2017; 1 ex.（♂）, 30.V.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：4 exs.（4♀）, 30.V.2017.

（既産地）　行橋市沓尾・稲童，岡垣町新松原海岸，津屋崎町恋の浦海岸（高倉，1974）

次種が記載されたことにより、過去に本種として記録されたものには２種が混同していることになる。そのため、上記既産地の記録は見直す必要がある。真の *A. fucicola* としては、福岡県新記録。

3. ニセツヤケシヒゲブトハネカクシ *Aleochara*（*Emplenota*）*segregata* Yamamoto & Maruyama, 2012

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：13 exs.（8♂5♀）, 3.V.2017; 3 exs.（3♂）, 16.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex.（♂）, 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：3 exs.（1♂2♀）, 26.V.2017; 2 exs.（1♂1♀）, 11.V.2017; 1 ex.（♀）, 3.V.2017;
1 ex.（♀）, 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：2 exs.（2♂）, 30.V.2017; 1 ex,（♀）, 15.VI.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：18 exs.（8♂10♀）, 30.V.2017.

（既産地）　福岡市西区生の松原１丁目・福津市渡・福岡市東区三苫・福岡市東区志賀島・福岡市東区勝馬・下馬ヶ浜・福岡市西区小戸２丁目小戸公園・福岡市西区生の松原１丁目・福岡市西区能古島（Yamamoto & Maruyama, 2012）

4. ホソセスジヒゲブトハネカクシ *Aleochara*（*Triochara*）*trisulcata* Weise,1877

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：1 ex., 3.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：7 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：3 exs., 3.V.2017; 1 ex., 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：3 exs., 15.VI.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：16 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：9 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　福津市渡・福岡市東区三苫・福岡市東区勝馬下馬ヶ浜・福岡市西区能古島（Yamamoto & Maruyama, 2012）

5. ニセセスジヒゲブトハネカクシ *Aleochara*（*Triochara*）*zerchei*（Assing, 1995）

糸島市志摩桜井大口海岸：3 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地）　福岡市西区能古島（Yamamoto & Maruyama, 2012）

6. ウシオヒメハネカクシ *Adota magnipennis*（Bernhauer, 1943）

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：2 exs., 3.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：22 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 3.V.2017; 13 exs., 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 22.V.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：1 ex., 30.V.2017.

宗像市神湊：2 exs., 21.IV.2017.

福岡県新記録（図3A）

ハネカクシ亜科 Subfamily Staphylininae Latreille, 1802

7. ヒメアバタウミベハネカクシ *Cafius*（*Pseudoremus*）*algarum*（Sharp, 1874）

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：1 exs., 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：2 exs., 3.V.2017; 1 ex., 26.V.2017; 1 ex., 15 .VI.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 15.VI.2017.

宗像市神湊：1 ex., 9.VI.2017.

（既産地）　福岡市西区今宿青木（山本，2009）

8. ホソアバタウミベハネカクシ *Cafius*（*Pseudoremus*）*histrio*（Sharp, 1874）

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：1 ex., 3.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 15.VI.2017.

福岡県新記録（図3B）

9. アカバアバタウミベハネカクシ *Cafius*（*Pseudoremus*）*rufescens*（Sharp, 1889）

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：2 exs., 3.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：23 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：74 exs., 3.V.2017; 1 ex., 11.V.2017; 11 exs., 16.V.2017; 14 exs., 26.V.2017; 8 exs., 15 VI.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：6 exs., 22.V.2017; 9 exs., 30.V.2017; 57 exs., 15.VI.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：12 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：99 exs., 21.IV.2017; 14 exs., 9.VI.2017.

宗像市恋の浦海岸：16 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　福岡市西区今宿青木・能古島（山本，2009）

今回の調査で最も広く見られ、また、個体数も極めて多い。

10. オオアバタウミベハネカクシ *Cafius*（*Pseudoremus*）*vestitus*（Sharp, 1874）

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：32 exs., 22.V.2017; 1 ex., 30.V.2017; 8 exs., 15.VI.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：19 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：12 exs., 21.IV.2017.

宗像市恋の浦海岸：4 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　行橋市沓尾・稲童，津屋崎町恋の浦海岸（高倉，1974），能古島（藤本，1999），福岡市西区生の松原（山本，2009）

11. ミゾナシチビコガシラハネカクシ *Gabronthus maritimus*（Motschulsky, 1858）

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 30.V.2017.

福岡県新記録（図3C）

純粋な海岸性種ではなく、ときに内陸部からも得られるが、種名が示す通り、海岸に多い種である。

12. ツヤウミベコガシラハネカクシ *Philonthus*（*Philonthus*）*nudus* Sharp, 1874

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 11.V.2017; 1 ex., 16.V.2017; 3 exs., 26.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017; 2 exs., 15.VI.2017.

宗像市神湊：1 ex., 21.IV.2017; 13 exs., 9.VI.2017.

宗像市恋の浦海岸：2 exs., 21.IV.2017.

福岡県新記録（図3D）

13. ツヤケシアカバウミベハネカクシ *Phucobius simulator* Sharp, 1874

糸島市志摩芥屋幣の浜：2 exs., 15.VI.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：6 exs., 22.V.2017; 15 exs., 30.V.2017; 11 exs., 15.VI.2017.

宗像市神湊：3 exs., 21.IV.2017; 1 ex., 9.VI.2017.

宗像市恋の浦海岸：6 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　行橋市沓尾・稲童（高倉，1974），津屋崎町恋の浦海岸（高倉，1989）
福岡市西区今宿青木・能古島（山本，2009）

Ⅴ．結果と考察

今回の調査地の漂着物には、ワカメやホンダワラ等の海藻類、流木、枯れ枝などがあった。ハネカクシの生息は、海藻類（特にワカメ）の下から多く確認できた。流木や枯れ枝の下からは、ほとんど確認できなかった。また、波際にあるワカメ等の海藻類より、潮上帯にある海藻類のほうが、ハネカクシがよく採集できた。しかし、潮上帯でも、海藻類や海藻類の下の砂から水がしたたるような状態や逆に乾燥しすぎた海藻類やその下では、ハネカクシの生息をほとんど確認できなかった。海藻類の表面は少し乾燥しているが、内部に水分を含んでいるような適度に湿っている海藻類の下から、多くの種数と個体数が確認された。福の浦海岸では、砂に半ば埋もれたような状態の海藻（図2L）が多く見られた。このような海藻を砂から引き抜いた後にできた穴から、多数のハネカクシが出てくる様子が観察された。

今回、調査期間としては、４月～９月まで行った。７，８月は海水浴シーズンであり、海藻類が清掃されていたため、ハネカクシの生息がほとんど確認できなかった。また、９月は海藻類の漂着が少なく、生息がほとんど確認できなかった。

調査に要したのべ時間を記録し、糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸は、時間に対して採集した個体数が少ないことがわかった（表１）。この理由として考えられる１点目は、海藻類などの漂着物が他の調査地点より少ないことである。５月３日に調査に行った際は、海藻類が多く打ち上がっており、多くの個体数を確認することができた。しかし、波の流れや地形的なことも影響するのか、５月後半からは、砂浜に打ち上がった海藻類を見ることが非常に少なくなった。加えて、この海岸は観光地として特に人の出入りが多い場所で、清掃活動により漂着物をすべて除去されることもあった。２点目は、二見ヶ浦海岸のみ礫浜で、乾燥しやすいことが考えられる。６月11日に降雨があり（合計降水量４mm 程度）、その後曇天が続き、６月15日に晴天が見られた。この日の調査で、礫浜の二見ヶ浦海岸では、ハネカクシの生息を確認できていない

が、砂浜である福の浦海岸では、134個体確認できている。

今回の調査地の中では二見ヶ浦海岸のみ礫浜であるが、河上・林（2007）らの調査で礫浜に生息すると報告されたホソアバタウミベハネカクシは1個体のみであった。一方で、礫浜ではない福の浦海岸からも１個体確認された。二見ヶ浦海岸以外の調査地の砂の粒径を調査したが、調査地間での砂粒の大きさにはほとんど差がなかった。ただし、フトツヤケシヒゲブトハネカクシ、オオアバタウミベハネカクシ、ツヤウミベコガシラハネカクシ、ツヤケシアカバウミベハネカクシは礫浜では採集されておらず、この４種は礫浜よりも砂浜を好む可能性が考えられ、砂浜と礫浜では種構成に違いが見られるといえる。

また、幣の浜海岸で、マツクイムシの防除剤散布が定期的に行われていたが、散布後は、ゴミムシダマシ類やダンゴムシ類の死骸が砂丘上に多く見られたので、防除剤の影響が考えられる。

Ⅵ．その他の甲虫

今回の調査は主として潮上帯付近のハネカクシ相の解明を目的としたが、同時に周辺の海浜性甲虫類の採集も行った。資料として、併せて報告する。

1. ヒョウタンゴミムシ *Scarites aterrimus* Morawitz, 1863

糸島市志摩芥屋幣の浜：3 exs., 16.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：2 exs., 15.VI.2017.

宗像市神湊：1 ex., 9.VI.2017.

（既産地）　行橋市沓尾・蓑島，宗像市鐘崎（高倉，1989），北九州市若松区岩屋海岸（城戸，2004），福岡市東区三苫，西区今津（山本，2009），能古島（藤本，1995），藍島（城戸，1999），地島（城戸，1997），糸島市幣の浜，志賀島（城戸，2004），姫島（城戸，1992）

海岸砂丘の植物の下や漂着物の下などに普通に見られる。

2. コケシガムシ *Cercyon aptus* Sharp, 1873

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：8 exs., 3.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：8 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：13 exs., 3.V.2017; 6 exs., 11.V.2017; 25 exs., 16.V.2017; 2 exs., 26.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：2 exs., 22.V.2017; 7 exs., 30.V.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：4 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：133 exs., 21.IV.2017.

宗像市恋の浦海岸：39 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　岡垣町新松原海岸（高倉，1974），宗像市鐘ノ岬，神湊（高倉，1989），福岡市西区今宿青木（山本，2009）

この調査で最も多く得られたガムシで、次種と共に打ち上げられた海藻の中に多い。

3. フチトリケシガムシ *Cercyon dux* Sharp, 1873

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：9 exs., 3.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 26.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：1 ex., 30.V.2017.

宗像市神湊：1 ex., 21.IV.2017.

宗像市恋の浦海岸：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地） 行橋市稲童（高倉，1974），宗像市鐘ノ岬，神湊（高倉，1989），福岡市西区今宿青木（山本，2009）

4. ハマベエンマムシ *Hypocaccus varians varians*（Schmidt, 1890）

糸島市志摩桜井大口海岸：4 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：4 exs., 30.V.2017.

糸島市二丈深江深江海岸：2 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：30 exs., 21.IV.2017.

宗像市恋の浦海岸：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地） 行橋市稲童・沓尾，岡垣町，宗像市神湊（高倉，1974），福津町恋の浦（高倉，1989），福岡市東区三苫（平野，1990），芦屋海岸，岡垣町新松原海岸，宗像市鐘崎，新宮浜，志賀島，福岡市海の中道，糸島市幣の浜・福吉海岸（城戸，2004），白島（西，1959），藍島（城戸，1999），地島（城戸，1997），大島（城戸，1997）

この調査では、水分を多く含んだ打ち上げられた海藻の中から多数得られた。海岸砂丘で最も普通に見られるエンマムシ。

5. ヒメハマベエンマムシ *Hypocacculus asticus*（Lewis, 1911）

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 16.V.2017.

宗像市神湊：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地） 岡垣町新松原海岸・波津海岸，宗像市鐘崎・さつき松原，地島，新宮浜，志賀島，糸島市幣の浜（城戸，2004）

ハマヒルガオの根際やその下の砂の中に見られることが知られている。

6. ニセマグソコガネ *Aegialia nitida* Waterhouse, 1875

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：3 exs., 30.V.2017.

宗像市神湊：1 ex., 9.VI.2017.

（既産地） 北九州市戸畑（野村，1943），北九州市若松区沖（城戸，2004），宗像市神湊（高倉，1974），宗像市さつき松原（城戸，2004；城戸・小田，2008），福津町恋の浦（森本他，2001；城戸，2004），福津市勝浦（城戸，2004），福岡市海の中道（島村・藤本，2001；森本他，2001），糸島市志摩幣の浜，二丈深江海岸（城戸，2004）

福岡県レッドデータブック2014絶滅危惧 II 類

7. ニセセマルケシマグソコガネ *Psammodius maruyamai* Ochi, Kawahara, Inagaki, 2011

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017.

（既産地） 北九州市若松区岩屋（Ochi T., Kawahara M. & Inagaki M. 2011），北九州市若松区沖（城戸，2004），田川市夏吉（高倉，1955），芦屋町芦屋海岸・岡垣町新松原・新宮町新宮浜・糸島市幣の浜（城戸，2004），宗像市神湊（森本他，2001），宗像市鐘崎・草崎半島（城戸，2017），宗像市さつき松原（城戸，2004，2017；城戸・小田，2008），福岡市海の中道（島村・藤本，2001），大刀洗町西原（今坂，2011）

上記既産地の記録には、*Psammodius convexus* Waterhouse セマルケシマグソコガネとして記録されたものを含む。

福岡県レッドデータブック2014準絶滅危惧。

海岸砂丘のコウボウムギなどの根際や砂の中に見られる。

8. ヤマトケシマグソコガネ207 *Leiopsammodius japonicus*（Harold, 1878）

宗像市恋の浦海岸：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地） 宗像市神湊（高倉，1979，1985a；城戸，1982），福岡市東区西戸崎（福岡市，2011※），福岡市東区和白（林・高倉，1986），糸島市志摩野北幸田浜（城戸，2004）

あまり多い種ではないが、夕方、沢山の個体が砂浜を飛び交うことがある。

9. スナサビキコリ *Meristhus niponensis*（Lewis, 1894）

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 26.V.2017; 6 exs., 30.V.2017; 4exs., 15.VI.2017.

（既産地）　宗像市神湊（高倉，1974），福岡市東区和白（林・高倉，1986），能古島（安陪，1995），北九州市若松区沖，宗像市さつき松原，糸島市幣の浜（城戸，2004）

海岸の砂丘上に見られる。産地は局地的。

10. アカオオハナコメツキ *Platynychus ferrugineus*（Lewis, 1894）

宗像市神湊：1 ex., 9.VI.2017.

（既産地）　福津市恋の浦（城戸，2002b；大平・城戸，2002），岡垣町波津（大平・城戸，2002），北九州市若松区岩屋海岸，新宮浜，糸島市幣の浜（城戸，2004），宗像市さつき松原・草崎半島（城戸・小田，2008），糸島市芥屋海岸（城戸，2009）

福岡県レッドデータブック2014絶滅危惧Ⅱ類

海岸の砂丘上で見られることもよくあるが、海岸より少し内陸の植物上で見られることが多い。生態はほとんど分かっていない。原記載以降、100年を経て福岡県で発見された種で、現在でも分布が確認されているのは福岡県だけである。タイプ産地は鹿児島県で、同時期に熊本県でも得られている。

11. アカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus sequens sequens*（Candèze, 1873）

糸島市志摩桜井大口海岸：3 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩野北野北海岸：5 exs., 15.VI.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 26.V.2017; 6exs.,30.V.2017.

宗像市恋の浦海岸：3 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　行橋市沓尾・稲童，宗像市さつき松原・神湊（高倉，1974），福津市恋の浦（高倉，1977），福岡市東区三苫（山本，2009），香春町金辺川，赤村鶴今川，築上町伝法寺（高倉，1989），行橋市蓑島，芦屋海岸，新宮浜，志賀島，能古島，糸島市幣の浜・深江海岸・福吉海岸（城戸，2004）

海岸砂丘のハマヒルガオ、ハマボウフウなどの根際を歩行しているものを見ることが多い。内陸部でも河川砂地で得られている。

12. クロキオビジョウカイモドキ *Intybia niponicus*（Lewis, 1895）

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

（既産地）　福岡市東区海の中道（城戸，1999），行橋市蓑島海岸（城戸，2003）

福岡県レッドデータブック2014絶滅危惧Ⅱ類

13. ハマヒョウタンゴミムシダマシ *Idisia ornata* Pascoe, 1866

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：1 ex., 16.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：4 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 26.V.2017; 2 exs., 30.V.2017; 3 exs., 15.VI.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 11.V.2017; 1 ex ., 16.V.2017.

宗像市恋の浦海岸：4 exs., 21.IV.2017.

（既産地）　岡垣町新松原海岸（高倉，1974，城戸，2004），宗像市鐘崎（城戸，1981，2004），福岡市西戸崎（福岡市，2011），行橋市長井海岸，北九州市若松区岩屋海岸，芦屋海岸，福津市恋の浦，新宮海岸，福岡市三苫・海の中道，糸島市志摩幣の浜・深江海岸・二丈姉子浜（城戸，2004），福岡市今津（山本，2009），立石山波止海岸（城戸，2002），藍島（城戸，1999），大島（城戸，1997），能古島（吉原他，1997，福岡市，2011※），姫島（城戸，1993）

この科の中では最も波打ち際に近いところに生息する種で、この調査でも打ち上げられた海藻の中から多数得られた。玄界灘、響灘に面する砂浜に多く見られる。

14. オオマルチビゴミムシダマシ *Caedius maderi maderi* Kaszab, 1942

糸島市志摩桜井二見ヶ浦海岸：9 exs., 11.V.2017.

（既産地） 行橋市沓尾・稲童（高倉，1974），宗像市鐘崎（城戸，1981），能古島（細石，2001），行橋市蓑島海岸，宗像市鐘崎京泊（城戸，2004）

マルチビゴミムシダマシと同じような場所にいるが少ない。目の粗い砂地に見られる。

15. オオマルスナゴミムシダマシ *Phelopatrum scaphoides*（Marseul, 1876）

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：8 exs., 16.V.2017; 1 ex., 30.V.2017.

（既産地） 福津市恋の浦海岸（高倉，1974，1977），宗像市神湊（高倉，1974），宗像市さつき松原・鐘崎（高倉，1974），福岡市雁ノ巣（林・高倉，1986），福岡市西戸崎（福岡市，2011※），行橋市長井海岸，芦屋海岸，宗像市鐘崎京泊，福岡市三苫，糸島市志摩幣の浜・深江海岸・二丈姉子浜（城戸，2004），志賀島（城戸，2004），姫島（城戸，1993）

次種よりも自然状態の良い海岸砂丘に見られる。玄界灘、響灘に面する砂浜に多く見られる。

16. オオスナゴミムシダマシ *Gonocephalum pubens*（Marseul, 1876）

糸島市志摩野北野北海岸：2 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 26.V.2017; 2 exs., 15.VI.2017.

（既産地） 行橋市沓尾・稲童（高倉，1974），宗像市神湊（高倉，1974），福津市恋の浦海岸（高倉，1977），岡垣町三里松原（高倉，1985），福岡市雁ノ巣（高倉，1991），福岡市西戸崎（福岡市，2011※），福岡市東区三苫（山本，2009，2012），立石山波止海岸（城戸，2002），行橋市簑島海岸・長井海岸，北九州市若松区岩屋海岸，芦屋海岸，岡垣町波津海岸，宗像市鐘崎京泊，糸島市志摩幣の浜・深江海岸・二丈姉子浜（城戸，2004），藍島（城戸，1999），地島（城戸，1998），大島（城戸，1995），志賀島（城戸，2004），能古島（安部他，1995，吉原他，1997，細石，2001，福岡市，2011※，城戸，2004，山本，2009，2012），玄界島（城戸，1993），姫島（城戸，1993）

多少、漂着物やごみなどの多い海岸にも見られ、個体数も多い。

17. ヒメホソハマベゴミムシダマシ *Micropedinus pallidipennis* Lewis

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：5 exs., 11.V.2017; 21 exs., 16.V.2017; 2 exs., 26.V.2017; 2 exs., 15.VI.2017.

（既産地） 行橋市沓尾・稲童（高倉，1974b），岡垣町新松原海岸（高倉，1974b，城戸，2004a），宗像市玄海・神湊（高倉，1985），宗像市鐘崎（城戸，1983b，2004a），行橋市簑島海岸，宗像市鐘崎京泊，福岡市海の中道，糸島市志摩幣の浜（城戸，2004a），藍島（城戸，1999c），志賀島（城戸，2004a）

打ち上げられた海水を含んだ海藻中に多くみられた。

18. スナムグリヒョウタンゾウムシ *Scepticus tigrinus*（Roelofs, 1873）

糸島市志摩芥屋幣の浜：2 exs., 11.V.2017; 1 ex., 16.V.2017: 1 ex., 30.V.2017.

（既産地） 芦屋町狩尾岬，岡垣町浜の根，新宮海岸，糸島市前原（中村，1992），北九州市若松区岩屋海岸・芦屋海岸・岡垣町新松原海岸・宗像市さつき松原・福津市勝浦・新宮海岸・福岡市海の中道・志賀島勝浦海岸・糸島市幣の浜（城戸，2004）

福岡県レッドデータブック2014準絶滅危惧

福岡県は九州唯一の産地であり、分布の南限にあたる。海岸砂地では次種と混成する。

19. トビイロヒヨウタンゾウムシ *Scepticus griseus*（Roelofs, 1873）

糸島市志摩野北野北海岸：8 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩桜井大口海岸：4 exs., 30.V.2017.

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017; 3 exs., 15.VI. 2017.

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 3.V.2017; 1 ex., 11.V.2017.

宗像市神湊：1 ex., 9.VI.2017.

宗像市恋の浦海岸：1 ex., 21.IV.2017.

（既産地）　芦屋町，岡垣町，福岡市東区海の中道・箱崎・中央区平尾（Morimoto et. 2015），福岡市雁ノ巣（林・高倉 1986），行橋市沓尾，津屋崎町恋の浦，宗像市神湊・鐘ノ岬（高倉，1989），行橋市蓑島，北九州市若松区岩屋海岸，岡垣市新松原海岸，宗像市鐘崎，志賀島，糸島市深江海岸・姉子浜（城戸，2004）

海岸砂地のハマヒルガオの根際などに多い。河口に沿ってかなり内陸部にも見られる。

※福岡市（2011）…平成21年度（梅雨・盛夏・秋期）及び平成22年度（初夏）に福岡市で採集された昆虫類

以下の種については内陸部でも見られる種であり、本来の生息場所というより偶然得られたものと考える。

1. アトモンミズギワゴミムシ *Bembidion niloticum batesi* Putzeys, 1875

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：1 ex., 30.V.2017.

2. キベリヒラタガムシ *Enochrus*（*Methydrus*）*japonicus*（Sharp, 1873）

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 26.V.2017.

3. アオバアリガタハネカクシ *Paederus fuscipes*（Curtis, 1826）

糸島市志摩野北野北海岸：1 ex., 15.VI.2017

4. ホソサビキコリ *Agrypnus fuliginosus*（Candèze, 1865）

糸島市志摩野北野北海岸：1 ex., 30.V.2017

5. ホンドコハナコメツキ *Paracardiophorus nakanei hondoensis* Ôhira, 1997

糸島市志摩芥屋福の浦海岸：4 exs., 30.V.2017

6. ウスキケシマキムシ *Corticaria japonica* Reitter, 1877

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

7. フタイロカミキリモドキ *Oedemera sexualis sexualis* Marseul, 1877

糸島市志摩芥屋幣の浜：1 ex., 16.V.2017.

8. ヨモギハムシ *Chrysolina aurichalcea*（Mannerheim, 1825）

糸島市志摩桜井大口海岸：1 ex., 30.V.2017.

謝辞

本研究報告にあたり、アバタウミベハネカクシ属の同定をいただいた伊藤建夫氏、本稿にご意見いただいた河上康子氏に厚く御礼申し上げる。

参考文献

今坂正一（2011）久留米市高良山とその周辺の甲虫1. KORASANA, (79): 31-48.

河上康子・林成多（2007）日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究（2）島根半島．ホシザキグリーン財団研究報告，(10): 37-76

城戸克弥（1999）福岡市で採集した珍しい海浜性甲虫．北九州の昆虫，46（1): 50.

城戸克弥（2002）*Platynychusferrugineus* と呼ばれるコメツキムシの再発見．月刊むし，(377): 46-47.

城戸克弥（2004）福岡県の海岸砂丘の甲虫類．KORASANA, 71: 7-14.

城戸克弥（2016）福岡県のゴミムシダマシ上科．KORASANA, (84): 85-154.

城戸克弥（2017）福岡県のヒラタムシ上科．KORASANA, (85): 41-126.

城戸克弥・小田正明（2008）福岡県宗像市で採集した甲虫類について．KORASANA, 76: 7-16, 1pl.

柴田泰利・丸山宗利・保科英人・岸本年郎・直海俊一郎・野村周平・Volker Puthz・島田孝・渡辺泰明・山本周平（2013）日本産ハネカクシ科総目録（昆虫綱：甲虫目），九州大学総

合研究博物館研究報告，(11): 69～218.
多比良嘉晃・松本雅道（2000）静岡県における海岸性甲虫相．環境システム研究，(7): 39～71.
高倉康男（1974）北部九州海岸の甲虫類．北九州の昆虫，20 (1): 10-12.
高倉康男（1977）宗像郡津屋崎恋の浦海岸付近の甲虫類．生物福岡，17: 13-17.
高倉康男（1989）福岡県の甲虫相．葦書房，1-521, 5pl.
高倉康男（1991）博多湾沿岸の甲虫類．北九州の昆虫，38 (1): 17-20.
中村剛之（1992）スナムグリヒョウタンゾウムシ北部九州に産す．PULEX, 80: 12.
林宏・高倉康男（1986）博多湾東部沿岸地域の昆虫類．北九州の昆虫，33 (1): 3-1.
林成多（2013）島根県の海岸性甲虫．ホシザキグリーン財団研究報告特別号，(9): 1～98.
福岡市（2011）ふくおかの環境，232-253.
藤本博文（1999）能古島で採集された甲虫類．新筑紫の昆虫，(6): 17-38.
松本雅道・多比良嘉晃・小林芽里（1999）遠州灘海岸における海浜性甲虫群集と海浜植生．環境システム研究，(6): 41～50.
丸山宗利(2004)海に棲む昆虫たち．昆虫と自然，39 (12): 4～7.
丸山宗利（2012）アリの巣をめぐる冒険．東海大学出版部
森本桂・城戸克弥・松井英司・藤本博文・紙谷聡志 (2001)「福岡県の希少野生生物」掲載の甲虫等昆虫の採集記録と出典．北九州の昆虫，48 (2): 77-94.
山本周平・丸山宗利（2013）日本産ヒゲブトハネカクシ属 *Aleochara* の種同定の手引きⅠ海浜性 *Emplenota* 亜属，さやばね (9): 1～5.
山本周平・丸山宗利（2013）日本産ヒゲブトハネカクシ属 *Aleochara* の種同定の手引きⅡ海浜性 *Triochara* 亜属，さやばね (10): 1～4.
山本周平（2009）福岡県福岡市における海岸で採集した甲虫類の記録．二豊のむし，47: 111-117.
Yamamoto, S. & Maruyama, M. (2012) Revision of the Seashore-dwelling Subgenera *Emplenota* Casey and *Triochara* Bernhauer (Coleoptera: Staphylinidae: genus *Aleochara*) from Japan. *Zootaxa*, 3517: 1-52.
Yamamoto, S. & Maruyama, M. (2013) Revision of the Subgenus *Coprochara* Mulsant & Rey of the Genus *Aleochara* Gravenhorst from Japan (Coleoptera: Staphylinidae: Aleocharinae). *Zootaxa*, 3641 (3): 201-222.

Received October 10, 2017; accepted December 1. 2017

Rove Beetles Collected in Genkai-nada Coast, Fukuoka Prefecture

Keiko KAWAHARA[1), 2)], Katsuya KIDO[2)], Munetoshi MARUYAMA[2), 3)]

[1)] Fukuoka Prefectual Sue High School: 72-3 Tabiishi, Sue-machi, Kasuya, 811-2221, Japan
[2)] The Kyushu University Museum: 6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan
[3)] Corresponding author: dendrolasius@gmail.com

Very few species of Staphylinidae (rove beetles) have been recorded from coastal areas, especially of high tidal zones, of Fukuoka Prefecture. We investigated a fauna of rove beetles inhabiting high tidal zones of Genkai-nada coast in April - September of 2017. As a result 13 species including 4 new record from Fukuoka Prefecture were confirmed. These beetles were mainly found under dead seaweeds with moistures.

Key Word: Coleoptera, Genkai-nada, high tidal zones, Staphylinidae

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.31-34

田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要

三　島　美佐子

九州大学総合研究博物館・開示研究系：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館は、2014年にSPレコードと蓄音機を含む記録資料の寄贈を受け、「田村コレクション」と称することとした。本報ではその受け入れに関する経緯と、コレクションの内容についての概要を報告する。

キーワード：地域資料、SPレコード、78s、蓄音機、宝珠山、寄贈

1．資料受け入れの背景

1-1. 田村悟史氏と手仕事舎

故・田村悟史（本名・中村孝一、1940－2009）氏は、1990年に東京から現在の福岡県朝倉郡東峰村宝珠山に移住した記録映像作家である。「記録制作・手仕事舎」として活動し、宝珠山村[1]や小鹿田焼の里である皿山（日田市源栄町）[2]の記録映像制作に携わった。1992年より旧宝珠山中学校校舎を「宝珠山小劇場」と名付け、「SPレコード研究会」と称した上演会や文化人の談話会などを開催した。

2009年に田村氏が死去した後、「手仕事舎」はスタッフらに引き継がれ、引き続き「SPレコード研究会」やカフェが営まれていた。しかしながら、スタッフの高齢化や活動拠点としていた旧宝珠山中学校校舎の老朽化に伴い、2013年3月末をもって「宝珠山小劇場」は活動を停止し、2014年3月に完全閉館した。

1-2. 閉館に伴う手仕事舎の物品処分

「宝珠山小劇場」の活動停止とその後の閉館に伴い、田村氏らが東京時代から収集してきた約4万枚のSPレコードと蓄音機、田村氏が東京在住時に調査・記録していた芸能・文化関連の記録資料、移住後に作成された記録映像の関連資料、「手仕事舎」で使用されていた映像制作関係の機器類、「宝珠山小劇場」に常設されていた書籍等の物品が処分されることとなった。

御遺族の中村美恵子氏は、知人や古書店、公共博物館等に、物品の譲渡や寄贈を計画された。中村氏によれば、SPレコードや蓄音機については、単体または小規模での引き取りの申し出はあったが、全てのレコードと蓄音機を包括的に引きとれる主体がなかったという。また特に、記録資料にあたる、田村氏による芸能・文化関連の調査記録や、映像制作に伴う初期映像や関連資料については引き取り手がなく、廃棄するほかない状況になりつつあった。

2．当館への受け入れの経緯

2-1. 九大博物館への打診と館内での検討

2013年末ごろ、本学大学文書館の折田悦郎教授より、SPレコードと蓄音機の包括的な受け入れ依頼が来ているという情報が当館にもたらされた。翌2014年2月、文書館より、「宝珠山小劇場」がいよいよ3月で閉館となるが、博物館での資料の包括的受け入れができないだろうかという打診メールが内々に送られて来た。すでに福岡県立図書館、福岡市立図書館、福岡市博物館等にも打診がなされていたが、資料の分量が各館の許容範囲を超え、また資料内容が各館の趣旨にそぐわないなどの理由により受入不能となっていた。そこで九州大学付属図書館および大学文書館を含め、九大に受け入れの打診がなされ

たものであった。

2014年２月中旬に開催された当館教員会議[3]にて、資料受け入れの打診に関する報告が三島よりなされたさい、将来的な一般向けの活用が期待できる[4]ことなどから、文書館・図書館・芸術工学研究院との協議を含め、前向きに検討することとなった。

2-2. 受け入れに先立つ事前調査および評価

2014年２月中旬の教員会議後、受け入れに先立つ現地視察を実施し、それに基づき受け入れの可否を検討することを、文書館経由で寄贈者（中村氏）に伝えた。同時に、筆者が主担当となり、現地での資料評価のための人選と日程調整をすすめた。

2-2-1. 現地視察

実施日　2014年３月７日（金）
現地視察時間　10～12時
視察者による協議　12～13時
視察者（所属は当時）
九州大学総合研究博物館　岩永省三・三島美佐子
九州大学大学文書館　折田悦郎・藤岡健太郎
九州大学芸術工学部　津田三郎
九州大学高等研究院　松本隆史
福岡市博物館　有馬学
長崎科学技術大学　竹田仰

2-2-2. 現地で確認された資料類

現地にて確認した資料は、SP レコードおよび蓄音機、書籍、美術館・博物館ポスター、音楽関連資料、機材（再生装置、録画装置等）類、小鹿田焼関連記録資料、記録動画、映像録画、写真類、スクラップブックなど。

2-2-3. 評価

視察者らによる協議において、全体として文化史・昭和史資料としての価値がある、SP レコード・蓄音機共に質が高い、美術館・博物館ポスターも資料的価値がある、スクラップブックのうち特に小鹿田焼調査資料（インタビュー記録等）は重要である、などの意見が出た。また、書籍については、一部を省き一般的な書物であるため、古書店による引き取りが望ましいこと、機材一式は復元資料として全体を引き取ることが望ましく、また、撮影機器類には希少性・貴重性があり系統だった教育や展示等への活用が可能、などの意見が出された。いずれもこれまで九大博物館では取り扱ってこなかった内容の資料であるが、全学的にみれば取り扱い可能であり、新たな研究プロジェクトの素地となることが指摘された。一方で、教育・研究利用のみならず、一般向けの催事や展示等に利活用できる点も評価された。

2-2-4. 受け入れの決定

上記事前調査と協議・評価については、2014年４月下旬に開催された当館内教員会議において報告・審議され、上記資料・機器等について当館に包括的に受け入れることが承認された。また、受け入れに伴い、関連する研究分野の資料部を新たに加えることが申し合わされた[5]。当初「宝珠山コレクション」と仮称したが、地名では誤解が生じる可能性があるとして、主たる収集者の氏名を冠し「田村悟史コレクション」と称することとなった。

2-3. 資料移設

2014年４月下旬、旧宝珠山中学校現地にて運送業者による見積もりを実施したが、経費が高額となったため、当面は館員およびボランティアにて自力で運搬した。搬出は、2014年９月から翌2015年３月にかけて、計７回実施した。うち３月の運搬については、搬出期限に間に合わせるため、また、大型機器の搬出が必要であったことから、業者委託とした。

３．移設後の状況

3-1. 資料の保管状況

運び入れた資料は、旧工学部本館地階の２室および４階の１室に設置したアングル棚に仮配置し（図１）、大型蓄音機については、４階会議室に配置（図２）した。地階は高湿度など環境が悪いが、収蔵スペースの都合上止むを得ない状況となっている（2018年３月現在）。

図1．資料の収蔵状況の一部。ここで見えている箱には SP レコードが入っている。

図2．蓄音機の配置状況。

3-2. 資料の一次資料化の状況

2015年４月以降、当館にて雇用された技術職員らにより、移設資料の一次資料化が進められている。まずは機器類について、ナンバリング、リスト化、初期的な写真撮影を行い、それらをデジタル的に統合し、暫定的な「宝珠山資料カタログ」を作成した。

最も分量のある SP レコードについては、手仕事舎による簡易なデータベースが、エクセルファイルとして存在した。このリストの詳細については、大久保(2018)[6]による報告を参照されたい。当館としての SP レコード自体のデータベース化は、SP レコードの専門家である大久保真利子氏による助言をいただくようになった2017年から開始した。盤面をスキャンし、そのレーベル情報を元に手仕事舎によるエクセルファイルを書き換える形で、現在もデータ化をすすめている。

4．コレクション概要

機器類と SP レコード以外の資料の一次資料化は進んでいないものの、以下コレクションの規模を、物品や媒体の種類を元におおまかに記す：

(1) SP レコード・蓄音機関連

SP レコードは、現在は収蔵スペースの都合で段ボール１箱あたり約20-50枚を詰めた状態で、約2400箱分（図１）。ほか、レコードケース14箱分、ジャケット62箱分。蓄音機は、大型３台（図２）、ポータブルタイプ６台、針・部品など約１箱分。

(2) 記録媒体

録音カセットテープが靴箱サイズの箱に28箱分、ケース入りのポジフィルムが段ボール27箱分、8mmフィルム226本、VHS28本、BCM12本、ドキュメンタリー制作に伴い収集・保管されたと思われる旧宝珠山村関連の資料段ボール５箱分。なおカセットテープには、(3) の宝珠山村関係の音声・映像、(4) の島田敬一へのインタビュー録音が含まれる（図３、図４）。

図3.「宝珠山日記」録音テープ。

(3)「宝珠山村日記」関連

ドキュメンタリー「宝珠山村日記」作成のために収集・保管されたと思われる資料が、段ボール５箱分。

図4．俳優・島田敬一へのインタビュー録音テープ。

(4) 文化活動記録・構想関連

田村が制作構想のために収集していた切り抜きや関連情報等が段ボール51箱分、宝珠山劇場関連の実践記録等が段ボール７箱分、新派俳優の井上正夫関連が段ボール２箱分、俳優の島田敬一関連が８箱分（図４）。

(5) 映像制作 に関わる機材（図５）

手仕事舎で用いられた撮影装置、編集機器・装置、録画再生装置、リールなど。

図5．機器の一部。梱包したまま保管している。

(6) その他

SP・音楽関連書籍約600冊、美術館・博物館ポスター14束。

5．おわりに

本報では、2014年に寄贈された、田村悟史コレクションの受け入れ経緯と、おおまかな概要を記した。コレクションのうち特に、1990年代の宝珠山村の音声・動画記録や晩年の俳優の音声記録は興味深い。また、研究対象として未開発でもある在野の活動実践記録やスクラップなど、今後のさらなる調査・分析が待たれる。なお九大博物館では、2017年以降、本コレクションの SP レコードと蓄音機を用いた演奏会などの活用を開始しており、「死蔵させないこと」という寄贈者の要望に、今後も引き続き応えていく必要がある。

謝辞

当該コレクションを御寄贈下さり、その後継続的なご協力をいただいている中村美恵子氏に深く感謝いたします。また、資料運搬においては、ボランティアのみなさまのご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

脚注

1　短編記録映画「宝珠山村日記」、記録制作手仕事舎、1996年制作。

2　長編記録映画「日田の皿山」、記録制作手仕事舎、未完。これに関連する資料および元映像は、すべて日田市役所に移管されたという。

3　正式には「総合研究博物館教員会議」。館の専任教員による当館の公式の意思決定の場であり、議題の審議・承認と各種報告がなされる。

4　当館所蔵品は従来、学術研究の過程で収集された研究資料であったため、催事等で来場者に気軽に楽しんでもらえるような文化芸術的なものが当時はほとんどなかった。

5　「資料部」は、当館資料に関わる研究・協力を担う兼任教員で構成されている。田村コレクションに関わる兼任教員が所属する「記録資料部門」が設置されたのは、実質的な活用が始まった2017年度からである。

6　大久保真利子　2018「田村悟史作成の SP レコードデータベース ── その特徴と公開に向けての課題 ──」九州大学総合研究博物館研究報告15-16：35-43.

（査読なし）

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.35-43

田村悟史作成のSPレコードデータベース
── その特徴と公開に向けての課題 ──

大久保　真利子

九州大学総合研究博物館・専門研究員：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館は2014年に田村悟史氏の遺品の寄贈を受け、そのなかには約４万枚のSPレコードが含まれている。本稿は、旧蔵者の田村が作成したレコードデータベースを分析の対象とし、データベースの構造や公開に向けての課題、データベースの分析からわかる田村コレクションの特徴を明らかにするものである。

キーワード：田村悟史、SPレコード、データベース、「宝珠山小劇場」

はじめに

九州大学総合研究博物館は、2014年に田村悟史氏の遺品の寄贈を受けた[1]。その中核を成すのは約４万枚のSPレコードである。田村は所有するSPレコードについて、エクセルを用いてデータベースを作成していた。データベースとレコード現物との照合はまだはじまったばかりだが、所有するすべてのレコードをリスト化している可能性が高く、重複した盤についてもすべてに整理番号が与えられ、データが入力されている。データベースは基本的にレーベル（レコード中心付近の紙部分）の情報を抜き出したもので、入力はほぼ正確である。レーベル面に書かれた情報に関する調査結果の追記はほとんど見当たらない。

田村作成のデータベースの作成プロセスについては、まだ不明な点が多く残されている。たとえば、データ入力の際の凡例のようなものは現在のところ見つかっていない。作成された時期も不明である。また田村は、自身が代表をつとめる「有限会社 手仕事舎」を立ち上げており、田村の活動はすべて手仕事舎の社員や関係者抜きでは語ることはできない。実際データベースをみてみると、ファイルごとにデータの取り方や入力の特徴が異なっており、複数人の手によって仕上げられたであろうと推察される。将来的には関係者などに話を聞くことによって明確にしていく必要があるが、本稿においては便宜上、田村が作成したデータベースということで話をすすめていきたい。

以上のような特徴をもつ田村が作成したデータベースを分析の対象として、本稿ではまず、データベースそのもののしくみを紹介する。また、将来的なデータベースの公開を見据え、いくつかの改訂を提案する。そして最後に田村コレクションの特徴を述べる。

1　データベースの分析

1－1　ファイルの構成

データベースは音楽のジャンル別に、16のファイルに分けられている（表１、ファイル名参照）。ファイル内はすべて一つのシートしか設けられていないが、整理番号によって下位分類がなされている場合もある。下位分類があるのは、邦楽（18分類）、落語・漫才（２分類）、クラシック（２分類）である。なおファイル名は田村が記したもの、下位分類の各名称は筆者によるものである。

1－2　項目について

表１は、各ファイルの項目名を抜き出したものである。項目名が異なっていても（たとえばSP11クラシックでは

Original Title、SP12シャンソンでは題名)、横断的にみれば同じ要素が記されているものについては同じ列に並べた。そうすると田村が設定した項目名はのべ29項目あることがわかったが、本稿では便宜上【共通】【作品名】【演奏家】【レコード情報】【作家など】【その他】の六つに区分し、本稿の以下の説明において用いることとする。

表１の記載順については一部入れ替えをおこなっている。ほぼすべてのジャンルにおいて網羅的に記されている【共通】については記載順も表１のとおりである。しかしとくに【作品名】と【演奏家】については、ファイルごとに記載順が異なっている。これは各ジャンルの整理順と関係があると考えられ、各ジャンルで整理軸になっている項目が【共通】のすぐ右側に配されている（１－４にて詳述)。以下では、項目ごとに説明を加えるが、田村によるデータベースのしくみを理解するうえで重要な要素を含む【共通】については、そこに属する５項目すべてについて触れる。そして【作品名】【演奏家】【レコード情報】【作家など】【その他】については、適宜述べることとする。

１－３　項目ごとの記載事項

(1)【共通】

【共通】のうち［整理番号］［箱番号］［在庫］については、今後おこなわれる所蔵数の確定に必要な項目であるため、データベース上での統計を取り、その結果を表２に示した。なお［　］は田村が設定した項目名である。

［整理番号］

田村コレクション独自の番号であり、レコードのレーベル面に記されたレコード番号ではない。

整理番号はすべて SP からはじまりそのあとに８桁の数字が与えられている（SP ○○××△△△△)。それらは三つの意味をもつ（図１参照)。

整理番号は面ごとに付されている。両面盤の場合は、レコード１枚に対し二つの整理番号をもつ。ただし片面盤については統一されておらず、整理番号が一つの場合と二つの場合とがある。また片面盤についてはほとんどの場合、［在庫］、［種別］、［備考］などに「片面盤」と記されているが、今後記入箇所を統一する必要があるだろう。

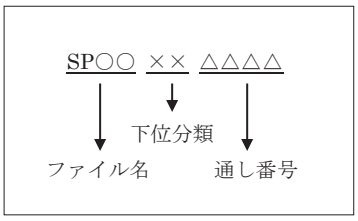


図１　整理番号の詳細

また、整理番号には欠番がみられた。筆者は欠番の意味を、もともと所蔵していたものの売却もしくは譲渡したためだと考えているが、タンゴとジャズにみられる連続した欠番に関しては別の意味もあるかもしれない。そのほかごく少数ではあるが、整理番号の重複も確認できた。

このように整理番号には欠番や重複が見られるが、田村が設定した通し番号のみを合計すると91,848面となる。ここに［整理番号］の重複を加え、［整理番号］の欠番、後述する［在庫］の「無」と「／」を除けば、データベース上からわかる推定所蔵面数をはじき出すことができる。その結果を表２の最右列に示した。現時点での推定所蔵面数の合計は、83,120面である。全てが両面盤であるなら、この数を単純に半分にすれば所蔵枚数も把握できるのだが、データベースを見る限り、片面盤も数は多くないが含まれている。片面盤か両面盤かはレコードそのものを確認することが必要となるため、現時点での推定所蔵枚数の提示は控えておきたい。

［箱番号］

田村は SP レコードを、段ボール箱に入れて保管していた。ダンボールひと箱には平均して35～50枚くらいのレコードが入れられているようだ。箱の総数は998箱である。

箱には規則的な番号がつけられており（○○－□□ もしくは ○○（××）－□□)、その意味は図２のとおりである。○○部分は、［整理番号］のファイル名の「SP」を除いた数字部分、××は同じく［整理番号］の下位分類と連動している。××は、下位分類がないジャンルにおいては省略される。

箱はほとんどのジャンルにおいて、箱番号の最後に「(未)」と記入されているものがある。その箱の中身は雑多な内容となっており、未整理のレコードが入れられているという印象をもつ。

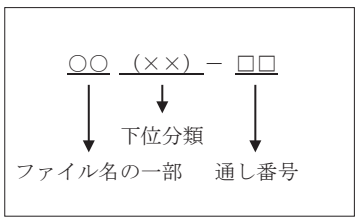


図２　箱番号の詳細

整理番号を与える作業などを終えたあとでコレクションに加えられたものが集められた箱だと考えられる。

［在庫］

［在庫］の欄には、「有」「無（無し、なし、空、む）」「／」の３種が書かれている。

田村が所有しているものは「有」となっており、３種のなかでもっとも記述頻度が高い。「無」については、整理番号のみが残っていてそのほかの演奏者や曲名の欄は空欄になっているものと、整理番号を含むすべての項目が記入されているものとがある。後者の意味として筆者は、売却もしくは譲渡したものについても、以前所有していたものとして記録に残しておこうという思いがあったのではないかと考えている。前述のとおり、整理番号が欠番になっているものについても売却もしくは譲渡したものだろうと推察したが、整理番号の欠番と在庫「無」とは、意味するものが異なるのか、それとも筆者が推察するようにどちらも以前所有していたものを指すのか、データを見るかぎり区別がつかない。

「無」が売却もしくは譲渡だとした場合、ジャンルによって偏りがあるのがわかる。たとえばSP01邦楽の09清元節では「無」が全体の0.7％なのに対し、SP04浪曲やSP08戦時歌謡などは22％となっている。手放した理由としては、重複して所有していたことや、所有していても活用しないなどが考えられる。今後、手放したレコードについても分析の対象とすることで、もし田村のなかにジャンル別のこだわりの差などがあったならば、それを紐解くためのヒントになるかもしれない。

また「／」は片面盤の無音面に与えられているようだが、前述のように片面盤には整理番号が一つのものと二つのものとがあるため、徹底されてはいない。

［評価］

Ａ～Ｄまでのアルファベットが与えられている。状態のいいものがＡで悪いものがＤである。最大に状態のいいものには「AA」が与えられているが、数はごく少数である。またＣやＤには、アルファベットによる評価のほかにカケ、ヒビ、キズなどの書き込みも見られる。そのほか、何も書かれていない場合もある。

［種別］

SP15映画音楽以外の全てのファイルに設定されている。ここには、たとえばSP04浪曲であれば「文芸浪曲」、SP11クラシックであれば「Violin & Orch.」などのように、そのジャンル内での音楽的特徴が記載されている。

（2）【作品名】

おおむね正確に記載されている。しかし、レーベル面には歌詞が記載されている場合があるのだが、田村作成のデータベースには歌詞を記入する項目が設けられておらず、ところどころ記載されている場合でも［題名］の横などにカッコを付けて書かれている。SPレコードは片面の録音時間が５分程度と短いことから、長い曲であれば数枚に分けて収録される。歌詞がある曲の場合、収録範囲をしめすために収録部分の最初と最後の歌詞、もしくは歌詞の一部をレーベルに記す場合が多い。SPレコードを活用する際、自分が欲する部分がどの面に入っているかを知るには、歌詞が重要な手がかりとなる。「歌詞」という項目を増やし、記入を徹底する必要があるだろう。

（3）【演奏家】

おおむね正確に記載されているが、旧字体と現行字体についてはあまり厳密には記されていないようだ。またいくつかのジャンルにおいて、［歌手］と［演奏家］という項目が設定されている。たとえばSP02民謡の場合、［歌手］には歌い手の名前のみ、［演奏家］には三味線や尺八の奏者名が記されている。歌手も演奏家であるだけでなく、筆者が知る限り既存のレコードデータベースでは歌手と演奏家というように分けて項目を設定したものはない。今後データベースの公開にあたっては、【演奏家】に属する５項目を集約して１項目内で工夫して記述することも検討する必要があるだろう。

（4）【レコード情報】

［レーベル名］と［レーベル番号］についてはある程度正確に記載してあるようだ。ただ［制作会社名］については、記載が途中で終っていたり、漢字表記が旧字体と現行字体とが混在していたりしており、十分注意深く見直す必要がある。

［インチ］はSP06講談とSP12クラシックにしか設定されていないが、その他のジャンルにおいて記載が必要な

場合は［種別］や［備考］に記されている。なぜ２ジャンルのみ項目が設けられたのかは不明だが、全ジャンルに記載することを検討してもいいだろう。

また［制作年月日］だが、筆者が調査した範囲においては、レーベル面に記載された年月日はすべて制作年月日と解釈して記しているようだ。しかし年代表記には、吹込み（録音）日、発売日、盤面プレス日などがあり、そのうちどれを指しているのかは調査をしてみなければわかない場合が多い。レーベル名に記された年月日の記入は重要だが、［制作年月日］という項目名そのものを見直すべきである。そして可能な範囲で、その年代が吹込み（録音）日、発売日、盤面プレス日のどれを指すものかを、当時のレコード会社が発行していた月報やカタログなどを参考にしながら追加調査し公開することによって、研究により一層役立つデータベースとなるはずである。

そのほか田村作成のデータベースにはほとんど記されていないが、盤面に刻印された「原盤番号（マトリクス番号）」については、今後データベースへの記入を検討すべき事項であろう。原盤番号によって、レコード会社やレーベルデザインが異なるものであっても、同じ音源をもちいた盤であるかどうかが判別できる場合がある。前述のとおり、田村コレクションには非常に重複が多い。今後重複した盤を把握し、音源数をもとにしたコレクション分析をおこなう際などには、必要となる項目である。

（5）【作家など】

演奏家に関する項目同様、ひとつの項目にまとめ、その中で工夫しながら記述することも可能であろう。

また田村作成のデータベースで特徴的なのが、［映画題名］が立項されていることである。田村はドキュメンタリーの映像作家でもあり、自身の映画制作に役立てるためにSPレコードの収集をはじめたとも言われている（詳細は、三島 2018参照）。映画に関する項目を設けているレコードデータベースは非常にめずらしいが、旧蔵者である田村悟史の思いを受け継ぐという目的でデータベースを公開するならば、［映画題名］の項目は活かしておくべきかもしれない。

（6）【その他】

すべてのジャンルにおいて［備考］が設けられているが、意外にもあまり活用されていない。しかしこれまで述べてきたように、設定項目の見直しなども必要であることから、今後は積極的に活用する項目になるであろう。

１－４　ジャンルについて

ここからは、表１および表２の縦列に示したジャンルに注目し、田村による整理軸やジャンル分けに関する課題などについて述べていく。

前述のとおり、田村は約４万枚のレコードを16のジャンルに分け、邦楽、落語、クラシックについては下位分類を設けて整理をしていた。SP03流行歌には「(新)」が付いているが、この意味については不明である。

１－２でも簡単に触れたとおり、整理番号はランダムに振られたわけではなく、ジャンルごとに一定の軸をもって整理されたあとに付されたようだ。各ジャンルの整理軸は、表１の網かけ部分のとおりである。すべての整理軸において50音順もしくはアルファベット順という項目が付加されており、エクセルで確実に検索できるしくみとなっている。

整理軸についてもう少し詳しくみてみよう。まず【作品名】が軸となっているのは、日本音楽においては、邦楽、民謡、童謡、戦時歌謡、映画説明、日本一般で、西洋音楽においては、シャンソン、タンゴ、映画音楽、洋楽一般である。また【演奏家】を軸に整理されているのは、日本音楽のなかでは流行歌、浪曲、落語・漫才、講談、西洋音楽ではジャズが広義においては演奏家といえる［楽団］を軸に整理されている。特異なのはクラシックで、作曲家ごとの整理となっている。

このようにジャンルごとに整理軸が異なるのは、田村自身のジャンルごとの興味のあり方を示しているようにも思われる。田村は自身が所有するSPレコードを用いて、活動拠点とした「宝珠山小劇場」において「SPレコード研究会」と称する公開レコード試聴会を開催していた。たとえば1999年２月７日には「廣澤虎造の世界――清水次郎長伝――」、2001年１月21日には「流行歌からみた戦後の世相三人娘（美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみ）」などを開催している。いずれも演奏家に着目した試聴会であり、浪曲や流行歌などは演奏家を軸に整理しておいた方が田村自身の使い勝手が良かったのだと思われる。今後「SPレコード研究会」をはじめ田村によるSPレコードの活用実態について研究をすすめるな

かで、田村が作成したデータベースとの関連性についても掘り下げていきたい。

さて田村作成のデータベースのジャンルに関することでもっとも改訂すべき点は、音楽的特徴により複数のジャンル分けが可能なものについて、属するジャンルが明確に決められていないことである。たとえば、和洋合奏（和楽器とオーケストラの合奏）の≪越後獅子≫については、原曲の長唄≪越後獅子≫が属する SP01邦楽内の01長唄に記入されている場合もあれば、SP10日本一般に入れられているものもある。このような複数の音楽的特徴をもつレコードをどのジャンルに入れるかということは、レコードデータベースの凡例などを作ってコレクションごとにきちんと管理されるべき問題である。

そのほかジャンルをめぐる問題には、一部のレコードにおいて、レーベルに書かれたジャンルをそのままデータ化しても、同じ音源が同じジャンルに振り分けられない可能性があるという問題もある。国立国会図書館の歴史的音源（通称、れきおん）でも、レコード会社や時代による「ジャンル名の揺れ（例：「民謡」と「俚謡」、「歌謡曲」と「流行歌」など）」[2]があることを指摘している。そこでれきおんでは「統制語」という項目を設け、レーベルに書いてあるジャンル名だけで不十分な場合は、れきおん独自のジャンルを付与しているようだ。

今後、ジャンルの見直しとともに「ジャンル名の揺れ」にどのように対処していくか十分に検討していくべきであろう。

2　田村コレクションの特徴

約４万枚もの SP レコードとともに、田村が作成したデータベースも同時に寄贈を受けたことにより、コレクションの全貌をいち早くつかむことができた。今後、田村コレクション内の SP レコードを包括的にも個別的にも評価していく必要があるが、その足がかりとして本節では、田村作成のデータベースを分析した範囲でわかる田村コレクションの特徴を示してみたい。

まず日本国内で確認できる個人コレクションの所蔵内容の傾向をみてみたい。たとえば東京文化財研究所が所蔵する安原仙三コレクションは、日本音楽に関するレコードのみの総レコード数は約6,000枚で、なかでも義太夫節や歌舞伎音楽などの劇音楽が主要部分を占めている（渡邊 1999）。また国際日本文化研究センターが2014年度に寄贈を受けた森川司コレクションの総数は、SP レコード13,172枚、LP レコード134枚であるが、全てが浪花節に関するレコードである（古川 2017）。そのほか、「野村胡堂・あらえびす記念館」のコレクションを形成した野村胡堂は、クラシック音楽のコレクターや評論家として有名である[3]。このように個人コレクションの多くは、何らかのジャンルを中心に形成される場合が多い。

つぎに、日本最大のレコード情報を公開している、れきおんの例をみてみよう。れきおんは、2007年時点で日本の主要なレコード会社等に現存していた SP レコードや金属原盤などをもとにして、レコード情報とともに音源も公開したものである。公開数は、48,661音源である。れきおんのレーベル情報および音源を作成したのは、HiRAC（歴史的音盤アーカイブ推進協議会）だが、HiRAC の創設メンバーのひとりである藤本草氏によれば、戦火などを経て現在確認できる SP レコードの音源数は約10万であり、そのうち約半数の５万音源は現存するレコード会社が所有し、２万５千音源は放送局、民間愛好家、全国の資料館などに所蔵され、その残りの２万５千音源については散逸・消去したとしている（藤本 2011）。つまりれきおんのレコードデータは、特定のジャンルを意図的に収集されたものではなく、レコード会社に現存する金属原盤やレコード盤をもとに形成されたものである。

このように個人コレクションとれきおんとでは、収集経緯もレコードの構成内容も異なるが、田村コレクションの場合、個人コレクションでありながら表２からもわかるように、特定のジャンルに偏りのないものだ捉えるべきである。

おわりに

田村が作成したデータベースは、データベースのしくみを分析するかぎりにおいては、田村自身が活用することを目的として作られたことが明らかとなった。今後は九州大学総合研究博物館が所蔵する資料のひとつとして田村コレクションのデータベース化をすすめ公開するために、本稿で提案した項目設定の見直しや歌詞や原盤番号を記入する項目を追加するなど、既存のレコードデー

タベースなどを参考にしながら検討を加えていく必要がある。また、著作権などクリアすべき問題も多いが、音源の公開について望む声も多い。レコードに関する情報のほとんどが記入されているレーベル面の画像についても同様である。

今後進めるべき調査の筆頭には、田村コレクション内の全レコードとデータベースとの照合が挙げられる。その結果、記入漏れなどがあった場合、所蔵面数などが変わる可能性がある。このような調査結果についても時期をみて追加報告したい。そして今後は、ご遺族や関係者からの聞き取りなどにより、データベースの作成経緯や作業の実際についても明らかにしていきたい。

注

1　寄贈の経緯やコレクションの詳細については、(三島 2018) を参照のこと。

2　http://rekion.dl.ndl.go.jp/ja/aboutRekion.html#about1_5a (2017年９月30日アクセス)。

3 「野村胡堂・あらえびす記念館」のホームページ（http://kodo-araebisu.jp/?page_id=359）を参考にした（2017年９月30日アクセス)。

参考文献

藤本草　2011「SP 盤のデジタル化 利用と保存の両立をめざして」、『国立国会図書館月報』606号：4-6、東京：国立国会図書館.

古川綾子　2017「浪曲 SP レコード・デジタルアーカイブ――2015年12月スタート、現状報告と展望――」(国際日本文化研究センター「大衆文化プロジェクト」研究会配付資料、2017年９月１日).

三島美佐子　2018「田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要」九州大学総合研究博物館研究報告15-16: 31-34.

渡邊明義　1999「序」、東京国立文化財研究所芸能部（編）『音盤目録Ⅰ・Ⅱ』：頁数なし、東京：東京国立文化財研究所.

Received September 30, 2017; accepted October 2, 2017

表1　ファイルの構成と記載項目

区分／ファイル名	【共通】					【作品名】				【演奏家】					【レコード情報】					【作家など】									【その他】
SP01邦楽※1	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	50音順	題名			歌手・演奏家・役者50音	歌手・役者名	演奏家		楽団・演奏	レーベル名	レーベル番号	制作会社名		制作年月日	作詞		作曲	編曲	作者					備考
SP02民謡	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	歌手	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲					映画題名	備考
SP03流行歌(新)	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	歌手	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作・構成・演出		役者・話し手	指揮者	映画題名	備考
SP04浪曲	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	芸人			楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作者	脚色			映画題名	備考
SP05落語・05(1)漫才※2	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	芸人			楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作者	脚色				備考
SP06講談	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音順	題名			講談者50音	講談者	演奏			レーベル名	レーベル番号	制作会社名	インチ	制作年月日	作者									備考
SP07童謡	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	歌手	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作・構成・演出		役者・話し手	指揮者		備考
SP08戦時歌謡	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	歌手	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作・構成・演出		役者・話し手	指揮者	映画題名	備考
SP09映画説明	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			役者・説明者50音	歌手	役者・説明者		楽団	レーベル名	レーベル番号	製作会社名		製作年月日	作詞・原作		作曲	編曲	構成	脚色			映画	備考
SP10日本一般	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	題50音	題名			人50音	歌手	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		製作年月日	作詞		作曲	編曲	作・構成・演出		役者・話し手	指揮者	映画題名	備考
SP11クラシック※3	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別		題名		Original Title		歌手名	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	制作会社名	インチ	制作年月日	作詞	作曲家アルファベット順	作曲家	編曲				指揮者		備考
SP12シャンソン	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	和題50音	日本語題名	題アルファベット順	題名	歌手50音	歌手名			楽団	レーベル名	レーベル番号	制作会社名		制作年月日	作詞		作曲	編曲				指揮者	映画題名	備考
SP13タンゴ	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	和題50音	日本語題名	題名アルファベット	題名		歌手名	演奏家		楽団・演奏	レーベル	レーベル番号	制作会社名		制作年月日	作詞　作曲　編曲							指揮者	映画題名	備考
SP14ジャズ	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	和題50音	日本語題名	題アルファベット順	題名	演奏家アルファベット順	歌手名	演奏家	楽団アルファベット順	楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		制作年月日	作詞・作曲・編曲							指揮者	洋画題名	備考
SP15映画音楽	整理番号	箱番号	在庫	評価		和題50音	日本語題名	題アルファベット順	題名		歌手名	演奏家		楽団	レーベル	レーベル番号	製作会社		制作年月日	作詞・作曲・編曲							指揮者	映画題名	備考
SP16洋楽一般	整理番号	箱番号	在庫	評価	種別	50音	日本語題名	題アルファベット順	題名		歌手名	演奏家・楽団			レーベル	レーベル番号	制作会社名		制作年月日	作詞・作曲・編曲								洋画題名	備考

※1　下位分類として、長唄、端唄、小唄、うた沢、浄瑠璃、義太夫節、常磐津節、新内節、清元節、俗曲、謡曲、地歌、琵琶、尺八、箏曲、詩吟、御詠歌、歌舞伎劇がある。
※2　下位分類として、落語と漫才がある。
※3　下位分類として、オーケストラ・コンチェルト・オペラ、ピアノ・声楽がある。

表２　【共通】の統計

ファイル名	下位分類	［整理番号］（単位：面）			［箱番号］		［在庫］（単位：面）		推定所蔵面数
		通し番号	欠番	重複	箱の総数	「未」と書かれた箱番号	無	／	
SP01邦楽	01長唄	5,102	1	0	58	56～58	168	5	4,928
	02端唄	2,996	18	0	34	34	53	6	2,919
	03小唄	2,774	5	0	28	26～28	47	0	2,722
	04うた沢	114	0	0	2	2	0	0	114
	05浄瑠璃	524	0	0	6	6	0	54	470
	06義太夫節	1,830	11	2	19	17～19	0	88	1,733
	07常磐津節	670	0	0	8	8	0	0	670
	08新内節	188	0	0	3	3	2	0	186
	09清元節	1,118	0	0	12	12	8	2	1,108
	10俗曲	234	0	0	3	3	4	0	230
	11謡曲	606	0	0	7	7	2	7	597
	12地歌	48	0	0	1	なし	0	1	47
	13琵琶	1,112	15	0	12	11～12	4	32	1,061
	14尺八	330	9	0	5	5	4	5	312
	15箏曲	584	0	0	6	6	4	4	576
	16詩吟	141	0	0	2	2	0	1	140
	17御詠歌	182	0	0	2	なし	0	0	182
	18歌舞伎劇	608	0	0	7	7	0	0	608
SP02民謡		4,024	17	0	41	36～41	364	0	3,643
SP03流行歌（新）		16,325	51	2	177	149～177	3617	1	12,658
SP04浪曲		10,571	23	0	110	102～110	293	2	10,253
SP05落語・05(1) 漫才	00落語	1,483	1	2	14	13～14	12	0	1,472
	01漫才	1,060	0	0	12	11～12	14	0	1,046
SP06講談		36	0	0	1	1	0	0	36
SP07童謡		3,352	0	0	32	28～32	272	0	3,080
SP08戦時歌謡		2,614	79	0	28	23～28	578	0	1,957
SP09映画説明		1,436	10	0	15	15	30	0	1,396
SP10日本一般		6,800	9	0	67	58～67	461	10	6,320
SP11クラシック	00オーケストラ・コンチェルト・オペラ	9,219	22	0	134	107の一部、108～134	432	29	8,736
	01ピアノ・声楽	3,402	37	0	36	なし	72	13	3,280
SP12シャンソン		516	0	0	6	5～6	36	0	480
SP13タンゴ		3,613	143※1	0	33	29～33	226	0	3,244
SP14ジャズ		3,438	695※2	0	30	27～30	361	0	2,382
SP15映画音楽		786	0	3	9	なし	76	0	713
SP16洋楽一般		4,012	0	0	38	34～38	191	0	3,821
合　計		91,848	1,146	9	998		7,331	260	83,120

※１　途中、連続して139欠番
※２　途中、連続して54、618欠番

SP Record Database Produced by Satoshi Tamura – Features and Challenges for Publication –

Mariko OKUBO

The Kyushu University Museum: 6-10-1 Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

The Kyushu University Museum received a donation of Mr. Satoshi Tamura's relics in 2014, among which about 40,000 SP records are included. In this paper, we analyzed the record database produced by former possessor Mr. Tamura, to clarify database structure and issues for publication, and characteristics of Tamura collection which can be understood from analysis of database.

Keywords: Satoshi Tamura, SP record, database, "Small Theater of Houshuyama"

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.45-55

赤坂小梅と筑豊炭坑文化
── 新民謡の地域性 ──

大　島　久　雄

九州大学大学院芸術工学研究院：〒815-8540 福岡市南区塩原4-9-1

要旨：炭坑で栄えた筑豊に生まれ、炭坑文化の中で育った赤坂小梅（1906-92）は、地元の芸者置屋で芸妓として歌を学び、新民謡作詞家・作曲家に見いだされて東京で民謡流行歌手に成り、昭和期民謡・新民謡の確立と普及に大きく貢献した。本論は、田村コレクションの小梅と博多・福岡関連の民謡・新民謡 SP レコードを調査し、小梅が郷土を歌った民謡・新民謡を中心に、昭和期に民謡を流行歌として販売したレコード会社のビジネス戦略とラジオ・映画・テレビ等の新メディとの関係にも注目しながら、これらの民謡・新民謡の特殊な地域性を明らかにしようとするものである。

キーワード：赤坂小梅、筑豊、炭坑文化、新民謡、地域性

ある地域において特殊な産業の繁栄によって人口が集中し、それに伴い他所から文物が流入して、地域に特異な芸能文化が発達することがある。日本の近代化の過程において盛況を極めた炭坑産業により人口と富が集中した筑豊にも川筋気質と呼ばれる豪放な生き方や独特な炭坑文化が生まれた。[1] 炭坑の閉山により二十世紀後半、地域は斜陽化し、「文化不毛の地」等とすら呼ばれることもあったが、祭りや神楽等の伝統芸能、嘉穂劇場や伊藤伝右衛門邸や近代化遺産の炭坑遺構などの往時を偲ばせる建築遺産は大切に維持され、今では地域の重要な観光資源となっている。[2] さらに山本作兵衛（1892-1984）の炭坑絵画が、平成23（2011）年に国内初のユネスコ記憶遺産となり、筑豊の炭坑文化を世界に知らしめたことは記憶に新しい。[3] 本論は、民謡歌手として活躍し、民謡普及に大きく貢献した赤坂小梅（1906-1992）を炭坑文化の中に位置づけ、九州大学総合研究博物館田村コレクション SP レコード調査によって赤坂小梅の新民謡の地域性を明らかにしようとするものである。[4]

図１　自伝『女の花道』（1981）

図２　記録映画 DVD『小梅姐さん』（2007）

赤坂小梅と筑豊炭坑文化

赤坂小梅（本名　向山こうめ）は、自伝『女の花道』によると、明治39（1906）年に福岡県田川郡川崎町に「九人兄姉の末ッ娘」として生まれた（図１・２）。[5] 父親権平は「道楽者」で、農家の地主として食べるものには困ったわけではないが、こうめを生んだ十日後に産後の肥立ちが悪く母シナが亡くなり、子供の無い長姉夫婦の家に養子に出される。長姉夫婦の家の近くには芸者の置

屋があった。炭坑で栄えた筑豊地域には、今は寂れた地域の現状からは想像できないが、各地に劇場や花街があったのである。置屋からは芸妓衆の稽古の音が漏れ聞こえ、こうめを芸の道に誘うことになった。自伝によると、学業よりも歌が好きだったこうめは、英彦山の麓の自然の中に日々飛び出して歌を歌っていた。すると仕事帰りの鉱夫達が、彼女の歌を気に入り、娯楽の少ない当時、仕事帰りに聴きに来る鉱夫の数は日毎に増え、ご祝儀すら出してくれた。歌で生きる道を選択したこうめの起点は、炭坑で栄えた筑豊の地域性と密接に関係している。

当時、芸妓などの芸能者の社会的地位は低く、家の恥になると親戚からは反対されて本家からは勘当すら受けたが、歌への思いは止み難く、こうめは、石炭と製鉄で栄えていた北九州八幡の芸者置屋「稲本席」に十六歳で入り、「梅若」を名乗った。福岡県民謡どんたく節が、彼女の初座敷での歌だったという。この時期の梅若の人気について松本清張（1909-1992）が『わが半生の記』において言及している。清張が働いていた印刷屋が紙を仕入れていた紙屋が倒産した。「主人が梅若という唄のうまい妓に身代を入れあげたという噂であった。梅若は、のちの赤坂小梅である」と清張は述べている。[6]

転機は昭和４（1929）年に訪れた。当時、お座敷遊びは通人の甲斐性と見なされていたが、小倉を訪れていた野口雨情（1882-1945）と藤井清水（1889-1944）がお座敷での梅若の歌を気に入り、レコード吹込みに誘った。

> きっかけは昭和四年、小倉の料亭「つだくろ」に始まる。浅野喜平ひきいる浅野舞踏団に、東京より中山晋平、野口雨情、そして藤井清水といった当時の日本を代表する流行歌の作詞、作曲家を招いたのである。[7]

広島出身作曲家藤井清水は、現在はあまり知られていないが、山田耕作に「私が知っている一番優れた作曲家」、「純粋に日本人の心を作曲した人」と言わしめ、流行歌・童謡作曲家として活躍しながら、民謡研究家町田佳声とともに各地を行脚して民謡採譜を行い、その成果は共著『日本民謡大観』（NHK）に結実している。[8] 自伝で小梅は藤井を「終生の恩人」と呼んでいるが、出会いの三日後には藤井から「ボクが一世一代、はじめて探しあてた歌い手だ。いちどレコード吹込みをしてみませんか」という手紙を梅若は受け取る。こうしてビクター大阪支店録音所で吹き込んだ野口雨情作詞・藤井清水作曲の新民謡「小倉節」（1929）が、彼女の初レコードとなった。[9]

昭和に入るとレコード産業も成長し、ビクター、コロンビア、ポリドール等、外資系から派生したレコード会社が日本に工場を造り、レコード価格も下ってレコード歌謡が大衆化しつつあった。[10] レコード会社には文芸部が置かれ、文芸部員の作詞家・作曲家は、流行歌制作と流行歌手発掘に余念がなかった。当時、洋楽はまだ耳新しく、民謡や新民謡、そしてそれらをお座敷で歌っていた芸妓出身歌手が流行していた。先輩格の藤本二三吉（1897-1976）を筆頭に小唄勝太郎（1904-1974）と市丸（1906-1997）が競い合うように活躍し、「勝一時代」と呼ばれたが、小梅の登場によって三人は「鶯芸者の御三家」と呼ばれることになる。[11] そして芸妓歌手に対抗して佐藤千代子（1897-1968）や藤山一郎（1911-93）などの音楽学校卒業生の活躍も始まり、「流行歌」というジャンルが確立して多数の流行歌レコードが世に出されていった。[12] このように向山コウメは、筑豊炭坑文化の中から芸妓として芸を磨き、勃興しつつあったレコード産業によって発見されて、歌手赤坂小梅となっていくのである。

その後、小梅は、二度目の吹込みとして「粟津小唄」と「金沢小唄」という新民謡を吹き込む。市丸が長野から、勝太郎が新潟から、喜代三が鹿児島から上京して歌手として活躍を始めていたように、小梅も歌の修行に上京し、赤坂若林の「抱え芸者」となり、赤坂小梅を名乗る。ちょうど「新民謡、三弦歌謡曲と称するウタが流行し」、小梅は、コンビを組んでいた太閤（三味線）とともに、これまでの清元・常盤津・俗曲の合間に新しい曲のけいこに熱中した。[13] 芸者と民謡が切っても切れない関係にあることを小梅は自伝に語っている。宴会の始まる三時間ぐらい前に小梅は宴会幹事と会い、北海道から九州まで全国各地から東京を訪れる客の出身地を尋ねて、「早速、その土地の民謡を調べ、おけいこをして間に合わせ」た。[14] 全国の民謡を覚えることは大変だったが、それが小梅民謡集を後に出せた理由だと彼女は述べている。福岡を代表する民謡となった黒田節の普及は、赤坂小梅のレコードに負うところが大きい。真珠湾攻撃の翌年、昭和17（1942）年に出た赤坂小梅の「黒田節」は、その男性的な野太い武張った節回しで大ヒットとなる。色恋を歌う軟弱な流行歌は、時局に鑑み検閲により発禁処分とな

る唄も多かったが、小梅のレコードは戦時中も流行を維持した。戦後もラジオ・テレビの電波にのって民謡歌手として活躍したが、芸妓のお座敷芸として全国各地の民謡に親しみ、民謡・新民謡流行歌手として人気を確立していく赤坂小梅は、「民謡生活一筋の芸歴」による民謡普及や民謡による福祉活動により紫綬褒章と勲四等宝章を授与された。[15] 晩年は平成４（1992）年に85歳で亡くなるまで房総の館山で暮らしたが、郷土の誇りとして今も親しまれ、川崎町キャラクター「小梅ちゃん」が地域振興に貢献している。[16]

田村コレクション SP レコード調査：赤坂小梅・「祝目出度」・「福岡行進曲」

九州大学芸術工学部での大島研究室の SP レコード研究・SP レコード公開講座に関して NHK 福岡放送局より取材を受け、九州大学総合研究博物館に寄贈されている田村コレクションの赤坂小梅と博多・福岡関連 SP レコード調査を実施した。[17] 確認された赤坂小梅の SP レコードは末尾に付けた一覧に示す通りである。小梅は、昭和８（1933）年にビクターからコロンビアに移籍し、引退まで五十年間、専属歌手を務めたが、田村コレクションにあるのは、コロンビア社デビュー曲「ほんとにそうなら」も含めて、ほとんど全てがこのコロンビア時代のレコードであり、ビクター時代のレコードは「大垣音頭」と「木曽川節」の２枚しか入っていない。

赤坂小梅が歌った歌のジャンルは、大別すると端唄・小唄・民謡・流行歌である。これらのジャンル名は通常 SP レコードのラベルに曲名とともに印刷されていた。小唄や民謡には後で詳述するようにレコード会社が流行を狙って作詞・作曲家に作らせ、新小唄・流行小唄・新民謡などのジャンル名で売り出したものもある。小梅の場合には芸妓歌手としてのお座敷唄（端唄・小唄・民謡）が多数を占めているが、「ほんとにさうなら」・「そんなお方があったなら」・「ゆるしてネ」等、流行歌も歌っている。SP レコード大衆化初期に鶯芸者レコード歌手は、「ハァ小唄」や「ネェ小唄」などのお色気小唄で人気を博し、小梅の「おばこ可愛いや」は「ハァ小唄」、「ほんとにさうなら」と「ゆるしてネ」は「ネェ小唄」の流れに属する。[18]

小梅の博多に関する曲としては、お座敷唄として広く歌われていた端唄「博多節」があり、「博多節（博多帯しめ）」と「博多節（百萬石の）」、「正調博多節」が田村コレクションに入っている。『日本民謡辞典』によると、博多帯や筑前しぼりが江戸時代から全国的に流行し、その服飾流行から生まれた江戸末期の唄が「博多節」であったが、「門付け芸人の手によって、博多地方にひろめられ、市内の花柳界のお座敷でも歌われるようになった。」当初の「博多節」は曲中の掛け声にちなみ俗に「ドッコイショ」と呼ばれる古い博多節であったが、門付け芸人の唄として花柳界通人は気に入らず、「博多帯しめ　筑前しぼり　歩む姿が　柳腰」という掛け声の入らない、より新しい「正調博多節」が作られ、「極度に技巧的で」難しい節回しとなった。[19] 小梅の「博多節」・「博多節（博多帯しめ）」・「博多節（百萬石の）」・「正調博多節」からも推測されるが、当時、出身や所属の検番・置屋の地域性を反映しながら、歌詞や歌い方に関して芸妓により多様な博多節がお座敷で歌われていたのである。

小梅が各地で民謡の採取を行い、お座敷で披露していたことはすでに述べたが、小梅の「オテモヤン」は、熊本のお座敷唄で、「ユーモラスでとぼけた熊本弁の歌詞で有名」で、小梅のレコード（1935）により全国的に流行し、「全国各地の花柳界で歌われた騒唄」となり、熊本代表民謡として定着した。[20] 戦後に出たSPレコード歌詞カードに見られるように、「オテモヤン」と「黒田節」は後に一枚の SP レコードの表裏に入れられ熊本・福岡代表民謡として広く聴かれた（図３・４）。

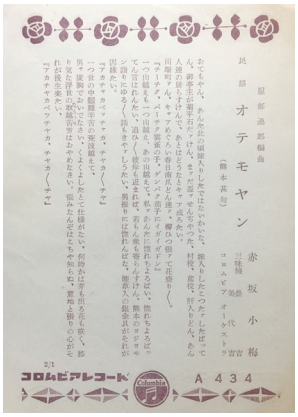


図３　「オテモヤン」歌詞カード

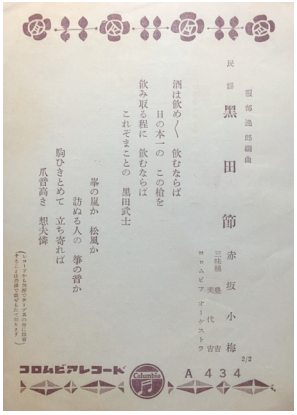


図４　「黒田節」歌詞カード

民謡というと民衆が古くから歌い継いできたものとい

うイメージがあるが、「黒田節」に関してもそのようなイメージを大きく裏切る成立・普及の経緯があり、それはラジオという新しいメディアの誕生と密接に関係している。大正14（1925）年にラジオ放送のため東京・名古屋・大阪に三つの放送局が開局したが、他の地方小都市では経営難やプログラム編成の困難等が懸念され、翌年に三局が合同して社団法人日本放送協会が設立されて、東京に本部を置き、全国に七つの支部を設けた。九州では熊本に出力10キロワットの放送局、福岡に「演奏所」というスタジオが設置された。[21] 当時、クラシック音楽はあまり普及していなくて、音楽番組の中心は邦楽であった。博多は千人を超える芸妓がいて、四つの検番から順番に芸妓が出演し、博多起源の筑前琵琶や地元民謡を全国に放送していたが、東京・京都・大阪花柳界には当然及ばず、全国的な琵琶曲・語りの衰退もあり、民謡に力を入れていく。昭和５（1930）年頃「博多節」は水茶屋検番名人お秀さんの活躍が全国的に注目を集めたが、全国放送向けプログラム制作には常に苦労していた。そこで放送係の井上清三は、黒田藩士の勤王志士加藤司書が作った「すめらみくにの…」という時局にかなう歌詞を、中国から雅楽に伝わり、様々な歌詞で各地に歌われていた「今様」の曲調にのせて、演奏所時代昭和３（1928）年に「筑前今様」として放送した。しかし伝統的に手拍子だけの今様は聴取者の反応が芳しくなかったので、三味線・尺八・琴の伴奏をつけ、「黒田武士」として放送したところ全国的に流行することとなった。[22] ラジオ放送で文字は見えないので、「武士」が「節」と勘違いされ、やがて母里太平衛に関する歌詞に代わり、小梅はこの「黒田節」を吹き込んで福岡代表民謡として定着させることに大きく貢献した。「黒田節の小梅か、小梅の黒田節か…ひとさまから言われるようになりましたのもこの黒田節のおかげです」と小梅は述べている。さらに「祝い歌黒田節」を後に「新らしく自分で節づけをして吹込み、これまた大成功」とあるように「黒田節」は小梅のライフワークであり、新たな新民謡創出にも寄与しているのである。[23]

地域性を濃厚に歌詞に取り入れた新民謡は、地名を冠したご当地ソングとして流行して全盛期となる。新民謡というジャンル名がラベルに明記された小梅レコードは多くはないが、田村コレクションには「みなとの祭」と「青すだれ」・「チャッキリ節」の二枚のレコードがある。「みなとの祭」は西條八十作詞・佐々紅華作曲で、B 面には中野忠晴の「みなと行進曲」（西條八十作詞・江口夜詩作曲）が入っていて、神戸港まつりと関連する新民謡である。新民謡とは、『日本民謡辞典』によると、「創作民謡」とも呼ばれ、作詞者・作曲者がはっきりと分かり、厳密には民衆の中から生まれた民謡とは区別される。主として温泉地や観光地が委嘱して作られ、何々小唄・何々音頭という名称の新民謡が多く残っている。[24]「青すだれ」は野村俊夫作詞・萩原二郎編曲、「チャッキリ節」は北原白秋作詞・町田嘉章作曲・宇賀神美津男編曲である。「チャッキリ節」は、昭和２（1927）年に静岡電鉄が狐ヶ崎遊園地 CM ソングとして委嘱した静岡観光・物産宣伝歌で、市丸がビクター・レコードに吹き込んで全国的に流行し、新民謡でも最も成功した歌の一つである。[25]「青すだれ」は、コロンビア専属芸妓歌手先輩藤本二三吉との共演で邦楽伴奏（三味線豊吉・小静・秀夫／鳴物望月太意之助社中）であるのに対して、「チャッキリ節」は小梅が単独でコロンビア・オーケストラ伴奏で歌い、邦楽と洋楽を混交した新民謡の多様な魅力を発揮している。

今回の田村コレクション SP レコード調査によって博多・福岡に関する興味深いご当地ソングがいくつか確認された。赤坂小梅と直接関係するものではないが、民謡・新民謡の地域性を探るための重要な参考資料として「祝目出度」と「福岡行進曲」を紹介する。「祝い目出度」は、宴席やお座敷で披露される博多の祝儀唄であり、博多山笠や宴席等で耳にする機会が多い。田村コレクションに入っているのは、溝上康人の A 面「祝目出度」（糸：鶴若／鼓：春枝）／B 面「黒田節」（タイヘイ・オーケストラ）のレコード（Taihei M-59）である。このレコードでも邦楽・洋楽伴奏の対比が活かされている。絵入りラベルと黒ラベルの二種類が存在し、絵入りラベルの方がコレクションに入っていて、ジャンルは俚謡と記されている。戦前の民謡は俚謡と記載されている SP レコードが多い。「祝目出度」のラベルでは櫛田神社の鳥居と銀杏を、「黒田節」では「酒は飲め飲め…」の母里太平衛の話にちなんだ槍と大杯をあしらっている（図５・６）。溝上康人については他のレコードが確認できないので詳細不明であるが地元の名人か民謡歌手ではないかと思われる。

図５　「祝目出度」

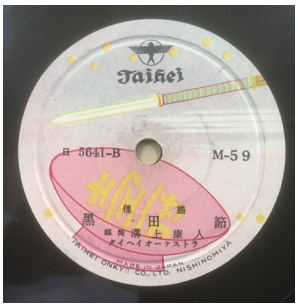


図６　「黒田節」

全国代表民謡 A 面「博多ぞめき」／B 面「福岡行進曲」のレコードは典型的なご当地ソング新民謡レコード（1933/Victor 52863）である（図７・８）。ぞめきとは、浮かれ騒ぐことや遊郭や夜店をひやかしてそぞろ歩くことを意味し、宴席などで歌われた賑やかな騒唄に属す。「博多ぞめき」は、新民謡運動を牽引していた西條八十と中山晋平の作詞・作曲で、歌手は勝太郎である（三味線：千代・いし／洋楽器入）。「福岡行進曲」は、福岡日日新聞社募集一等当選とラベルに記されていて、岩本宗二郎作詞・西條八十補筆・中山晋平作曲で、歌手は藤山一郎、伴奏を日本ビクター管弦楽団が務めている。この新民謡レコードでも邦楽・洋楽伴奏の対比が活かされている。当時、新聞社募集の作詞コンテストがよく行われていた。[26] 福岡日日新聞（現西日本新聞）に掲載されたこのレコードの新聞広告が残っていて歌詞も掲載されている（1933 年 9 月 26 日掲載）。[27] 岩本宗次郎（1892-1982）は、大牟田の歌人で、地域の学校校歌や「大牟田行進曲」（1935／東林海太郎歌／大村能章作曲）・「北九州音頭」（1963／江利チエミ歌／神津善行作曲）の作詞を行い、市内の甘木山には歌碑も設けられている。

図７　「博多ぞめき」ラベル

図８　「福岡行進曲」ラベル

「福岡行進曲」は、歌詞一番で玄海灘・日和山・長浜を歌った後、「博多節」に歌われた伝統的な物産の博多帯・筑前しぼりと博多人形に言及するが、「三日月の宵そぞろ歩く中洲」という都市の新名所も歌っている。日和山は、船乗りが天候を見て出港するかどうか見極める山のことで全国の港町に点在しているが、福岡には確認されないので下関の日和山ではないかと思われる。歌詞は三番から久留米・筑紫へと南下し、久留米がすりが紹介され、四番は大牟田三池炭鉱が取り上げられている。[28]

三池七山　地下千尺の
闇に掘る炭　砕く岩
男一貫　度胸で暮らせ
ケージまかせの　下り箱

ケージとは坑内に降りる昇降機のことで、小梅の「炭坑節」にも出て来るので作詞家は「炭坑節」を意識していたのかもしれない。「炭坑節」は後で取り上げるように女唄だが、こちらは対照的な男唄であることも興味深い。このように新民謡は都市や近代産業の点景も新たな郷土のシンボルとして取り入れ、新たな民謡の創作につなげようとしたのである。

映画人気が高まり、「道頓堀行進曲」や「浅草行進曲」等の映画主題歌という新しい流行歌が登場したのは、電気録音により SP レコードの音質が飛躍的に改善され、数々の国内レコード会社が設立されて、日本初レコード流行歌者と呼ばれる佐藤千代子（1897-1968）が登場した昭和初期のことである。[29] 倉田喜弘によると、「行進曲」とは当時の流行語で新聞・雑誌の見出しなどで「不良少年行進曲、流行行進曲、婦人洋装行進曲、シネマ行進曲」などのように使用されていた。[30] 今で言う「犯罪のデパート」や「美食のオンパレード」等に相当する表現であろうか。このような何々行進曲の流行に火をつけたのが映画『東京行進曲』（1929）である。映画主題歌「東京行進曲」（Victor 50755）は、西條八十作詞・中山晋平作曲の新民謡として作られ、伴奏は日活管弦楽団、裏面の「紅屋の娘」とともに佐藤千代子が歌い、二十五万枚の大ヒットとなった。地名を冠したご当地ソング、「丸の内音頭」（1932）・「東京音頭」（1933）等は、レコード会社があおった盆踊りブームによりさらにヒットし、何々行進曲・何々音頭が各地で多数作られた。[31]『SP レコード60,000曲総目録』によると、この種の何々行進曲（軍楽隊・ブラスバンド行進曲を除く）は、「東京行進曲」以降のビク

ター盤だけを見ても、「帝都復興行進曲」(51167)・「神戸行進曲」(51389)・「新東京行進曲」／「東京行進曲」(51406)・「京都行進曲」(51486)・「新東京行進曲」上／下(51503)・「浪花踊行進曲」(51758)・「日光行進曲」(51921)・「上海行進曲」(51962)・「大京城行進曲」(51969)・「威興行進曲」(52063)・「スキー行進曲」(52064)・「満州行進曲」(52134)・「岡山行進曲」(52299)・「ほがらか行進曲」(52420)・「大東京行進曲」(52461)・「小樽行進曲」(52599)・「大大阪地下鉄行進曲」(52722)・「大釧路行進曲」(52798)・「木浦行進曲」(53152)が記載され、何々行進曲の地方拡散と大陸進出は明白である。[32]「スキー行進曲」の場合には他の社会的流行への便乗もうかがわれる。「福岡行進曲」は、地元でしか流通しなかったのか、昭和館の『総目録』には掲載されていないが、そのレコード番号(52863)から何々行進曲ブームの終わり頃に登場したことが推測できる。

赤坂小梅と炭坑節

小梅が最初に吹き込んだ「小倉節」、二度目に吹き込んだ「粟津小唄」・「金沢小唄」、田村コレクション小梅レコード「みなとの祭」・「青すだれ」・「チャッキリ節」は、いずれも新民謡であり、小梅と新民謡は切っても切り離せない。新民謡とはラベルに書かれていないが、小梅の故郷の地域性の観点から特に興味深い田村コレクション小梅レコードは、「田川小唄」・「九州小唄」・「新九州小唄」である。「田川小唄」(Columbia PR 1351: 鶴田六郎歌共演)の裏面は「炭坑節」でいずれも赤坂小梅が歌っているが、レコード番号に“PR”が入っているので、ご当地ソングとして地域振興のため委嘱されたことがうかがわれる。「九州小唄」は表面が三島一聲、裏面が小梅、「新九州小唄」は表面が藤本二三吉、裏面が小梅で、同一曲を表裏で別の歌手が異なる編曲で歌っている。どちらも作曲は小梅の恩人藤井清水である。

「福岡行進曲」においても博多帯等の名産品に加えて三池炭鉱が歌詞に登場したように、盛時を極めた炭坑産業は、歌の中でも重要な地域のシンボルとなっていた。『日本民謡辞典』によると、「炭坑節」は、本来、採炭・選炭の際の仕事唄であり、大きく「北九州炭坑節」と「常磐炭鉱節」の二種類に分類されるが、レコードやラジオにより民謡として拡散されて、「黒田節」等と同様にお座敷・宴席や盆踊り等の地域のお祭りなどでもよく歌われるようになった。[33]

小梅は九州版「炭坑節」(図9)も「常磐炭坑節」も歌っているが、レコードに吹き込まれ全国的に流行した当初の小梅の「炭坑節」(1948)は、一般に普及しているものとは歌詞が異なっていた。現在、よく歌われる炭坑節は、「月が出た出た月が出た(ヨイヨイ)　うちのお山の上に出た　あんまり煙突が高いので　さぞやお月さんけむたかろ(サノヨイヨイ)」という歌詞である。「うちのお山」が「三池炭鉱」となっている歌もよく耳にする。これに対して『小梅姐さん』に紹介される小梅の歌は「一山二山三山越え　奥に咲いたる八重つつじ　なんぼ色よく咲いたとて　様ちゃんが通わにゃ仇の花(サノヨイヨイ)」という筑豊の炭坑節で、二番は「香春岳から見下ろせば　伊田の縦坑が真正面　十二時下がりの様ちゃんがゲージに持たれて思案顔(サノヨイヨイ)」と続く。三井炭鉱の煙突は三番の歌詞に出て来る。「一山二山三山」は香春岳のことで、今ではセメント採掘により山頂が削り取られ、本来の山容は見る影もない。[34]様ちゃんとは夫または恋人のことで女性目線の唄であり、山本作兵衛の炭坑絵や手記に見られるように、女性の労働力が炭坑にいかに欠かせないものであったかが炭坑節からもうかがわれる。[35]ケージについてはすでに説明したように「福岡行進曲」にも歌われている。小梅のCD版「九州炭坑節」では、歌詞一番に三井炭鉱の煙突が歌われているが、香春岳、伊田の縦坑、ケージという言葉は姿を消した。[36]「炭坑節」は、時代や地域の変化や歌い手により変わっていく民謡の柔軟性を示している。

図9　小梅の「炭坑節」

図10　美ち奴の「炭坑節」

民謡を表看板としながら流行歌としてレコード産業の重要な商品となった「炭坑節」は、何々行進曲や何々音

頭と同様に様々なバリエーションを加えて新たに制作され販売された。田村コレクションには小梅の「炭坑節」の他にも「新炭坑節」(Columbia A 480/新民謡／高倉敏・久保幸江歌／野村俊夫作詞・古賀政男作曲・服部逸郎編曲)・「新々炭坑節」(Columbia A 1124/新民謡／久保幸江歌／野村俊夫作詞・服部逸郎編曲)・「炭坑節」(Victor V-40461/新民謡／鈴木正夫・榎本美佐江・喜久丸歌／小野金次郎作詞・佐野鋤編曲)・「炭坑節」(Polydor 7835/流行歌／日本橋きみ栄歌／伊佐見研二作詞・飯田景慶編曲)・「新炭坑節」(Polydor 7835/ 流行歌／日本橋きみ栄歌／畑山逸雄作詞・飯田景慶編曲)・「炭坑節」(Teichiku C-3120/ 流行歌／美ち奴歌／大高ひさを作詞・長津義志編曲)・「炭坑節」(King 539/俗曲／音丸歌／松村又一作詞・山口俊郎)があり、レコード各社が「炭坑節」を民謡・新民謡・流行歌・俗曲として出している。演奏者は歌手のみを記載したが、ビクターの「炭坑節」の裏面には日本ビクター管弦楽団による軽音楽版「炭坑節」が吹き込まれている。このよう多様な「炭坑節」レコード存在の背景には、小梅の「さくら音頭」の場合と同様にレコード各社競作があり、「炭坑節」も戦後まもない昭和23(1948)年に各社レコード競作が行われた。レコード業界の巧みな販売戦略により各社「炭坑節」レコードが世を賑わし、「炭坑節」人気を不動の物にしたのであろう。[37] ちなみにこの競作で優勢であったのは、美ち奴の「炭坑節」で、彼女だけが「三池炭坑の上に出た」を歌詞に入れることを許可された(図10)。昭和26(1951)年には新東宝より志村敏夫監督・森岡良脚本・古賀政男音楽の映画『月が出た出た』が公開され、市丸と小梅がともに出演している。[38]

戦後日本復興を歌で元気づけた「炭坑節」は、正に小梅のルーツに直結している。炭坑なくして筑豊各地に芸妓の芸能文化が花咲くことはなかっただろうし、芸妓から小梅という流行歌手が誕生することもなかったはずである。小倉のお座敷で芸妓として活躍していたからこそ、野口雨情や藤井清水に見いだされるという幸運が訪れた。野口雨情・西条八十・藤井清水・中山晋平が牽引した新民謡は、伝承・伝統に頼るだけではなく、洋楽の要素を曲作りに活かし、新たな地域の特性にも注目した。時に都市の新流行や地域に根差した近代産業を歌詞に歌い込み、モダンな風を民謡に吹き込んだのである。小梅は地方に赴いての民謡採集も地道に行っているが、レコード会社の商魂たくましいビジネス戦略にも支えられ、民謡を流行歌に変身させ、レコード・ラジオ・テレビ・映画・舞台で活躍し、民謡普及に大きく貢献した。「黒田節」と「炭坑節」はその典型であるが、民謡・新民謡により小梅は郷土への思いを力強く歌い上げている。

注

1．筑豊の歴史と文化については深町純亮著『炭坑節物語　歌いつぐヤマの歴史と人情』(海鳥社，1997)，pp.3-17; NPO 嘉穂劇場企画 DVD『語り部深町純亮が伝える筑豊の歴史と文化』参照。

2．筑豊の近代化遺産については筑豊近代遺産研究会編『筑豊の近代化遺産』(弦書房，2008)，pp.16-23.

3．山本作兵衛に関しては山本作兵衛著『筑豊炭坑絵物語』(岩波書店：2013)，同著『炭坑に生きる　地の底の人生記録』(講談社：2011)，有馬学・他著『山本作兵衛と日本の近代』(弦書房，2014)，上野朱著『山本作兵衛と炭坑の記録』(平凡社：2014)，ドキュメンタリー映画 DVD『坑道の記憶～炭坑絵師・山本作兵衛～』(RKB 毎日放送：2015)参照。

4．田村コレクション(SP レコード)に関しては、『九州大学総合研究博物館ニュース』No.27(2017)，pp.3 & 5.

5．赤坂小梅著『女の花道』(けいせい出版：1981)，pp. 31-33. 以下、赤坂小梅の伝記的事実や芸能人生に関しては本書とドキュメンタリー映画 DVD『小梅姐さん』(赤坂小梅生誕100年記念映画製作上映委員会：2007)による。

6．松本清張著『半生の記』(新潮社：1966)，p. 63.

7．『女の花道』，p.101.

8．藤井清水については、関定子(ソプラノ)／塚田佳男(ピアノ)演奏 CD『藤井清水歌曲集』(恵雅堂：1995)：金大一春彦著「藤井清水の作品について」&小山晃著「解説」参照。

9．小梅の「小倉節」・「黒田節」・「炭坑節」は『小梅姐さん』に収録されている。

10．高護著『歌謡曲　時代を彩った歌たち』(岩波書店，2011)，pp.2-5.

11．『女の花道』，p.150.

12．「歌謡曲」というジャンル名が「流行歌」にとって代わり普及するのは戦後のことである。

13．『女の花道』，p.99.

14．同書，p.120.

15．同書，p.314.『小梅姐さん』解説書には赤坂小梅が歌った全国の民謡約230曲が県別に日本地図上にまとめられている。その中には「鴨緑江節」、「朝鮮音頭」、「台湾音頭」等、戦時中に慰問公演で訪れた中国・台湾・韓国等の歌も含まれている(『女の花道』，pp. 192-217)。

16．川崎町ホームページには「小梅ちゃん」キャラクターが登場し、赤坂小梅に関する紹介も掲載されている。川崎町 PR 動画「チックホー !!!!!!」にも小梅は取り上げられている。

17．取材・調査の内容は「音のタイムカプセル」(中野貴世報

告）というタイトルでNHK総合・福岡放送ニュース番組「ロクいち！福岡」（2017年３月31日放送）において紹介され、九州・沖縄放送「おはよう九州沖縄」（同年４月３日）・全国放送「おはよう日本」（同年５月６日）で再放送された。調査で見つかった博多の唄を聴く鑑賞会が同年４月９日に九州大学総合研究博物館で開催された。

18. 「ハァ小唄」は小唄勝太郎の「島の娘」（1933）、「ネェ小唄」は渡邉はま子の「忘れちゃいやヨ」（1936）が大流行し、「ハァ小唄」・「ネェ小唄」ブームに火をつけた。

19. 『日本民謡辞典』，p.266.

20. 同辞典，pp.85-6.

21. NHK福岡を語る会編『博多放送物語　秘話でつづるLKの昭和史』（海鳥社，2002），p.14.

22. 同書，「芸妓でもった邦楽番組＊「黒田節」誕生秘話」（pp.43-4）.

23. 『女の花道』，pp.226-33 & 278. 同書（p.293）では永井孝男伝として小梅はNHK紅白歌合戦第１回（1951）・第４回（1953）・第６回（1955）・第７回（1956）に出演して「黒田節」を歌ったとあるが、曲名は記憶違いのようで、実際は「炭坑節」（第１・７回）と「オテモヤン」（第４・６回）だった。

24. 『日本民謡辞典』，pp.190-1.

25. 同辞典，p.220.

26. 倉田喜弘著『日本レコード文化史』（2006）によると、「満州の歌」（1932/報知）・「肉弾三勇士の歌」（1932/朝日）・「爆弾三勇士の歌」（1932/毎日）等の時局レコードも新聞社懸賞募集で生まれた（pp.205-6）。小梅の「中京小唄」（Columbia 27600）もラベルの記載によると「新愛知新聞社懸賞当選歌」である。「みなとの祭」は他のレコード会社の盤も出ているが、タイヘイ盤「みなと音頭」（幾松歌）／「神戸みなとの祭」（巴・小はん歌）は、「神戸市民祭協会推薦・懸賞募集一等当選歌／第一回神戸『みなとの祭』主題歌」とラベルに記載されている。

27. NHK「音のタイムカプセル」.

28. 歌詞四番は上記広告に記載されていないのでレコードからの聴き写しである。

29. 倉田喜弘著『「はやり歌」の考古学　開国から戦後復興まで』（文芸春秋，2001），p.164; 塩澤実信著『昭和の流行歌物語　佐藤千代子から笠置シズ子、美空ひばりへ』（展望社，2011），pp.9-20.

30. 『日本レコード文化史』，pp.176-7.

31. 『昭和の流行歌物語』，pp.39-42. 翌年に出た小梅の「さくら音頭」（1934）もこのジャンルに属している。

32. 昭和館監修『SP盤レーベルによるSPレコード60,000曲総目録』（アテネ書房，2003），pp.308-34. 西沢爽著『雑学東京行進曲』（講談社，1984）によると、行進曲流行歌第１号「道頓堀行進曲」（1928）や「浅草行進曲」（1928）など行進曲に力を入れていたニットー・レコードは、翌年、「六大都市行進曲」として「東京行進曲」・「横浜行進曲」・「名古屋行進曲」・「大阪行進曲」・「神戸行進曲」を次々と世に出した（pp.154-63）。

33. 『日本民謡辞典』，pp.122-3. 炭坑節のルーツに関しては『炭坑節物語』，pp.18-21。

34. 『筑豊の近代化遺産』によると、「炭坑節」の元唄をめぐり歌詞の煙突が田川三井炭鉱のものか、それとも大牟田三池炭鉱のものかという論争が過去にあった。調査の結果、今は決着し、田川市石炭記念公園に「炭坑節発祥の地」記念碑がある（p.19）。田川市三井炭鉱の二本の煙突に関しては朝日新聞筑豊支局編『ふるさと筑豊　民話と史実を探る』（朝日カルチャーセンター，1993），pp.282-5. ボタ山と「白ダイヤの山」と呼ばれた香春岳については深町純亮著『筑豊の今昔』（郷土出版社，2009），pp.76-7.「炭坑節」の主要な元唄に関しては田川市石炭資料館編CD『香春岳から見下ろせば～炭坑節の源流～』（Columbia COCJ-31766, 2002）で聴くことができる。

35. 炭坑内での女性の労働については、『炭坑に生きる』，pp.94-103. 作兵衛は心にしみる「坑内歌」も同書にいくつか書き残している。

36. CD『スター★デラックス　赤坂小梅』（Columbia COCP-37375, 2012）は、「九州炭坑節」と「黒田節」も含めて、小梅の代表曲20曲を収録している。小梅は、「三池炭坑節」や「正調炭坑節」なども歌っている。

37. 南洋二監修・解説LPレコード集『オリジナル原版による戦前昭和歌謡』（Columbia CHS-30411-23, 1985）解説によると、「さくら音頭」（1934）は、ビクター・コロンビア・ポリドール・テイチクが異なる歌手・作詞家・作曲家によるレコードを競作で出し、同名の映画もP.C.L.（現東宝）・日活・松竹・新興・大都が異なる監督・俳優を起用して競作で公開している（p.54）。

38. 映画.com:『月が出た出た』［http://eiga.com/movie/73839/］（2017.11.9参照）. 民謡歌いの役で小梅が出演した映画と新派芝居「さのさ節」については『女の花道』（pp.278-9 & 291-7）・『小梅姐さん』に紹介されている。

Received November 18, 2017; accepted December 1, 2017

《田村コレクション赤坂小梅 SP レコード一覧》

＊ほぼすべて Columbia 社レコードで、会社名は表記が異なる場合のみ記載する。

＊データベース番号順に記載し、同一曲が複数入っている場合は、初出のみ記載した。

＊伴奏は邦楽演奏家を中心に記載し、コロンビア楽団・オーケストラ等は省略した場合がある。

DB 番号	種　目	曲　　名	伴奏・他	SP 番号
SP01020009	端唄	会津磐梯山（長谷川一夫振付名曲集）	三味線豊吉・佐藤／囃子望月斉八郎社中	A 1239
SP01020017	端唄	浅くとも／主さんと	三味線三代吉・喜美栄	A 683
SP01020097	端唄	秋の夜	三味線三代吉	27982
SP01020098	端唄	夕暮れ	三味線三代吉	27982
SP01020187	端唄	青柳	三味線三代吉・喜美栄	27384
SP01020312	民謡	会津磐梯山	三味線豊吉・佐藤／囃子望月彦八郎	A 1293
SP01021267	端唄	御所の御庭	三味線喜美栄・梅吉	28673
SP01021268	端唄	磯節くづし	三味線喜美栄・梅吉	28673
SP01021499	端唄	玉川	三味線喜美栄・梅吉	28958
SP01021500	端唄	一聲は	三味線喜美栄・梅吉	28958
SP01021817	端唄	春雨	三味線三代吉・喜美栄	27662
SP01021818	端唄	びんほつ	三味線三代吉・喜美栄	27662
SP01030545	舞踏小唄	峠	歌共演藤本二三吉／三味線手塚節子・善介・ひろ子	A 108
SP01030823	舞踏小唄	子守	三味線手塚節子・手塚善介	299449
SP01031294	舞踏小唄	東京三番志叟	共演藤本二三吉／三味線手塚節子・手塚ひろ子・手塚善介	S-151
SP01031369	小唄	留めても帰る／義太夫流し	三味線三代吉・喜美榮	28245
SP01031370	小唄	わしが國さ	三味線三代吉・喜美榮	28245
SP01031903	小唄	博多節（博多帯しめ）	三味線三代吉・喜美榮	26957
SP01031904	小唄	博多節（百萬石の）	三味線三代吉・喜美榮	26957
SP01032343	小唄	槍さび	三味線三代吉・喜美榮	28276
SP01032344	小唄	二上りびんほつ	三味線三代吉・喜美榮	28276
SP02000058	民謡	馬子唄	尺八菊池淡水／囃梅屋社中	ニッチク 100702
SP02000250	民謡	稗搗節	オークラロ菊池淡水	A 1222
SP02000267	民謡	五ッ木子守唄	三味線豊吉・豊藤	A 2068
SP02000268	民謡	田原坂	三味線豊吉・豊藤	A 2068
SP02000313	民謡	伊那節	三味線三代吉・喜美栄	27420
SP02000314	民謡	木曽節	三味線三代吉・喜美栄	27420
SP02000315	民謡	伊那節／木曽節	三味線豊吉・喜美栄	30325
SP02000316	民謡	ヤンレサ節・ヤレコノショ	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子佳田社中	30325
SP02000414	民謡	ぶらぶら節	尺八菊池淡水	A 2627
SP02000832	民謡	おてもやん	三味線かよ・君栄／琴田中佐智子／オークラロー菊地淡水／囃子玉藻会	A 805
SP02000833	民謡	黒田節	三味線かよ・君栄／琴田中佐智子／オークラロー菊地淡水／囃子玉藻会	A 805
SP02000835	民謡	白頭山節	三味線豊吉・かよ／尺八菊地淡水／囃子望月太意之助社中	A 633
SP02000840	民謡	オテモヤン（熊本甚句）	三味線豊吉・美代吉	A 434
SP02000866	民謡	肥後五十四万石	三味線豊吉・美代吉	A 2798
SP02000917	民謡	鹿児島小原節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100710
SP02001012	民謡	大垣音頭	三味線喜美栄・三代吉	Victor 51917
SP02001077	民謡	博多節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	A 41
SP02001083	民謡	炭坑節	三味線豊吉・美代吉	A 460
SP02001139	民謡	ヤンレサ節	三味線三代吉・君勇	27814
SP02001348	民謡	九州小唄	コロンビア・オーケストラ	26919
SP02001356	民謡	木曾川節	三味線同・三代吉・喜美栄	Victor 52222

SP02001758	民謡	豪傑節	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100709
SP02002118	民謡	浅間の煙	コロンビア・オーケストラ	A 960
SP02002120	民謡	新九州小唄	三味線小静・宮奴	27837
SP02002164	民謡	清水小唄	三味線三代吉・喜美栄	26969
SP02002299	民謡	田川小唄	歌共演鶴田六郎／三味線豊藤・梅香	PR 1351
SP02002594	民謡	二上り甚句	三味線豊吉・豊文／囃子玉藻会	A 1654
SP02002614	民謡	ノーヘ（農兵）節	三味線三代吉・喜美栄	27702
SP02002680	民謡	関の五本松	三味線豊吉・君栄／囃子梅屋社中	ニッチク 100713
SP02002682	民謡	正調博多節	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	303297
SP02002793	民謡	濱唄	三味線豊吉・喜美栄・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30326
SP02002895	民謡	福島音頭	共演筑波一郎 / 三味線小静・富奴	27711
SP02002968	民謡	梅干／鹿児島小原節	三味線豊吉・喜美栄	30323
SP02002976	民謡	新庄節	尺八菊池淡水	29463
SP02003937	民謡	のんのこ節	三味線豊藤・豊光	A 3217
SP03000215	流行歌	中京小唄	三味線三代吉・喜美栄	27600
SP03000219	流行歌	月は宵から	コロンビア・オーケストラ	27513
SP03000223	流行歌	おばこ可愛いや	コロンビア・オーケストラ	27672
SP03000225	流行歌	ほんとにさうなら	七孔尺八川本晴朗	27404
SP03000247	流行歌	そんなお方があったなら	コロンビア・オーケストラ	27746
SP03000250	流行歌	野郎やったね（炭坑節）	コロンビア・オーケストラ	A 898
SP03000252	流行歌	ゆるしてネ	コロンビア・オーケストラ	28229
SP03000256	流行歌	さくら音頭	三味線美代吉・三三五・初奴・君弥／合唱松竹少女歌劇団声楽研究科生	27757
SP03000270	流行歌	いきな水兵さん	コロンビア・オーケストラ	28383
SP03000272	民謡舞踊	そろばん踊り	三味線豊吉・梅香	A 2575
SP03000273	民謡舞踊	ふぐ踊り	三味線豊吉・梅香	A 2575
SP03000274	流行歌	佛印情緒	コロンビア・オーケストラ	100431
SP03000278	流行歌	子守	コロンビア・オーケストラ	A 351
SP03000336	新民謡	青すだれ	歌共演藤本二三吉／三味線豊吉・小静・秀夫／鳴物望月太意之助社中	A 776
SP03000337	新民謡	チャッキリ節	コロンビア・オーケストラ	A 776
SP03000606	流行歌	浪子と武男	歌共演伊藤久男／コロンビア・オーケストラ	28652
SP03008492	新民謡	みなとの祭	コロンビア・オーケストラ	27608
SP03010131	流行歌	峠	歌共演藤本二三吉／三味線手塚節子・手塚善助・手塚ひろ子／囃子住田社中	30312
SP03010180	流行歌	和楽踊り	歌共演伊藤久男／三味線小静・富奴／鳴物・はやし連中	27892
SP03010799	流行歌	晴れて逢う夜は	コロンビア・オーケストラ	28166
SP03013786	民謡	常磐炭坑節	コロムビア合唱団／三味線豊吉・豊藤	A 2949
SP03013994	民謡	豪傑節（明治・大正・昭和）	三味線豊吉・喜美榮・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30326
SP03014172	民謡	長谷川一夫振付名曲集～ 民謡　会津磐梯山	三味線豊吉・佐藤／囃子望月彦八郎社中	A 1293
SP03014184	民謡	ホツチヨセ／ボンチ可愛いや	三味線豊吉・喜美榮・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30328
SP03014185	民謡	新磯節	三味線豊吉・喜美榮・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30328
SP03014188	民謡	蒙疆節	三味線豊吉・喜美榮・手塚節子・手塚ひろ子／囃子住田社中	30324

Koume Akasaka and the Culture of the Coal Mining Area of Chikuho – the Locality of New Balladry

Hisao OSHIMA

Faculty of Design, Kyushu University: 4-9-1 Shiobaru, Minami-ku, Fukuoka, 815-8540, Japan

Koume Akasa (1902-92) was born and grew up in the once-prospered coal mining area of Chikuho; she learned singing as a *geisha* performer in a local *geisha* company, became a popular ballad and folksong singer in Tokyo, and contributed much in establishing and promoting folksongs and new balladry in the Showa period. Through the research of the gramophone records of folksongs and new balladry by Koume and about Hakata/Fukuoka in the Tamura Collection, this paper aims to examine the unique locality of the folksongs and new balladry, promoted by the business strategies of Japanese gramophone record companies as well as popularized through new media such as radio, cinema, and TV.

Key words: Koume Akasaka, Chikuho, Culture of Coal Mining Area, Locality, New Balladry

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.57-64

レコード袋の図像学
── SP 盤周辺のデザインをめぐるノート ──

京　谷　啓　徳

九州大学大学院人文科学研究院：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

要旨：九州大学総合研究博物館田村悟史コレクションには、大量のレコード袋（スリーブ）が含まれている。本稿はレコード袋の意匠を中心とした SP 盤周辺のデザインについて検討し、それらのデザインの中に、当時のレコードのあり方やレコード会社の思惑を読み取ることを目的とする。

キーワード：SP レコード、レコード袋、スリーブ、デザイン、佐々紅華

はじめに

その昔、LP レコードの時代には、よくジャケ買いをしたものである。中身のレコードはともかく、ジャケットの表に大きく印刷された写真や絵に惹かれて、つい衝動買いをしてしまうのである。1980年代、CD の時代に入ると、ジャケットは小型化されて面白味が減ったが、おかげでジャケ買いのような散財をしなくて済むようになったのは助かった。それでは LP より以前の時代、いわゆる SP レコードの時代のジャケットはどのようなものだったのだろうか。

実は SP レコードの時代、レコードのジャケットというものは、基本的には存在していなかった。当時は、レーベルごとに共通の紙袋に入れて、レコードを販売していたのである。各レコードに固有のジャケットではなく、レーベルごとの、しかしその分趣向を凝らしたレコード袋（スリーブ）というものがあったのだ。

SP レコードを収集していると、このレコード袋も自ずと集まってくる。近年九州大学総合研究博物館に寄贈された田村悟史コレクションが、田村氏の生前に旧宝珠山中学校を利用した宝珠山小劇場にあったとき、私は何度かそこを訪れたが、田村氏はレコード袋を壁に飾っておられた。私もその真似をして、レコード袋を自分の研究室の壁に貼っている（図１）。

図１．レコード袋のある研究室

壁に並んだレコード袋を日々眺めているうちに、私はそれらのデザインに様々の工夫が凝らされていること、そのデザインには意味があることに気が付くようになった。本稿ではレコード袋を中心に、SP レコード周辺のデザインについて考えてみたい。SP レコードにデザインの観点からアプローチするとき、どのようなものが検討の対象となりえるだろうか。レコード袋の他には、レコードのレーベル面のデザイン、宣伝用のチラシ・ポスターの類のデザイン、歌詞カード・文句集のデザイン、月報のデザイン等が、さしあたり考えられるだろう（あるいは蓄音機本体のデザインも）。

国内では、このような研究対象に関しての先行研究は数少ない。大西秀紀氏によるコロムビア社に関する報告書がほぼ唯一の大きな仕事である[1]。大西氏の研究では、コロムビア社のレーベル面やレコード袋のデザインが紹介されている。もとより本稿も網羅的なものではない。とりあえず筆者手持ちの各種資料と、田村氏が宝珠山小劇場に飾られていたレコード袋を中心に検討してみることにしよう。

佐々紅華とデザイン

SP レコードとデザインの関係といえば、まず名前を挙げるべきは佐々紅華（明治19年～昭和36年）である。紅華は近代芸能史上に名を残す人物である[2]。浅草オペラの仕掛人の一人であり、後年は「君恋し」「祇園小唄」など数多くの流行歌の作曲を手掛けた。多方面の才能に恵まれた佐々紅華は、作曲や音楽プロデュース業に乗り出す前、まずはレコード関連の図案家として出発した。彼は東京音楽学校に合格したのだが、父の勧めにより蔵前高等工業学校工業図案科に進学したのである。そして蔵前高等工業学校を卒業後の明治43年、設立間もない日本蓄音器商会（ニッポノホン）に入社し、その図案室で働くことになる。ニッポノホンはいずれコロムビアと合併することになる、日本で最初のレコード会社である。ここで紅華は、ニッポノホンの商標やレコード袋、ポスター、楽譜の表紙などのデザインを行った。

レコードに耳を傾ける大仏

デザイナーとしての彼の代表作は、明治44年の桜の咲く頃に世に出たことから花見ポスターと称された、ニッポノホンの色刷りポスターである[3]（図２）。そこにはニッポノホンのレパートリーの広さを宣伝するべく、邦楽の多くのジャンルが描かれている（当時の国内でのレコード録音に洋楽はきわめて少なかった）。画面手前から、落語家、講釈師、尺八奏者、鼓を持つ二人の萬歳師、勧進帳の弁慶と富樫を演じる歌舞伎役者、娘義太夫に手古舞姿の深川芸者、能役者に法界屋、義太夫奏者らが描かれていることがわかる。それぞれの芸人を的確に描写する

図２．花見ポスター

紅華の腕前は相当なものである。

このポスターで私たちにとって興味深いのは、画面左上で大仏が大きな耳で演奏を聴きつつ、奏者たちの方に視線をやっていることである。大仏がニッポノホンの SP レコードに吹き込まれた音曲に耳を傾けているのだ。大仏はニッポノホンの商標のようなもので（ニッポノホンの正式な商標はワシ印で、ワシの姿はレコードのレーベル面に描かれた）、紅華がデザインしたレコード袋や月報にも描かれている。花見ポスターでは、頭部だけの大仏が諸芸に耳を澄ましていたが、レコード袋では、全身を描かれた奈良の大仏がレコードの音を聴いている（図３～６）。蓄音機から音が出る様子は、ラッパから NIPPONOPHONE の文字の記された五線譜がのびることによって示される。レコード袋の大仏のデザインには２パターンがあり、古い方のものでは、大仏が通常の静止ポーズから体を動かしてレコードの音に惹きつけられている様子が、二重写しでコミカルに表される（図５）。大

図３．ニッポノホンのレコード袋

図４．同

図５．ニッポノホンの大仏

図６．同

仏は蓄音機から流れる音を耳にしているとともに、このレコード袋に収められた音盤に耳を傾けてもいるというわけである。身を乗り出した大仏は、通常の姿勢の頭部に描かれたしかめっ面から、笑顔に変わっている。複数のポーズを重ねることによって運動状態を表す表現は、現代のマンガでもよく見られるものだが、明治末年という早い時期の例として興味深い。静止ポーズの方は輪郭線のみ、動いている方には陰影を施すというかたちで、両者の違いを表現し分けるという工夫も凝らしている。かつて銀座の日本蓄音器本社の屋上に設置されたイルミネーション広告塔では、ネオンの点滅によってこの大仏が動く仕掛けになっていたという[4]。夜空に輝く巨大な大仏は宣伝効果抜群だったことだろう。

ところでレコード関連のデザインで、何らかの存在がSPレコードの音に耳を澄ますという趣向はよく目にするものだが、特に蓄音機が発明されて間もない初期の時代においては、機械から音が出るということ自体の珍しさに発想を得たデザインがなされたのである。有名なのはHMVの商標であるニッパーだろう（図７）。蓄音機から流れる飼い主の声を聴いている犬がニッパーである。HMVがHis Master's voice（彼の主人の声）を略したものであることはいうまでもない。ニッパーの他に目につくのは、例えば蓄音機に群がる鳥のポスターである（図８）。おそらく鳥の声を録音したレコードをかけていて、それを仲間の鳴き声と思った鳥たちが集まって来たということだろう。紅華の直接の着想源がニッパーであった可能性は高いが[5]、レコードの音を聴く存在を意表をついた奈良の大仏とし、それがさらに動き出すという突飛な趣向を考え出したのは紅華ならではといえる。

図７．HMVのニッパー

図８．蓄音機のポスター

大仏とビリケン

紅華のニッポノホンでの仕事は２年間に過ぎず、大正２年、新たに設立された東京蓄音器株式会社（東京レコード）に文芸部長として移籍した。紅華がニッポノホンのためにデザインした大仏は、東京レコードにおける紅華作のお伽歌劇にも登場する。お伽歌劇とは、宝塚少女歌劇や浅草オペラの流行を背景にこの時代に生み出された、子供向けの歌劇である。紅華は東京レコード移籍後、「目無し達磨」「毬ちゃんの絵本」「茶目子の一日」など、お伽歌劇レコードの制作を多数行うことになるのだが、「ビリケンさん」というお伽歌劇において、大仏は何とビリケンの兄貴として呼び出される[6]。女の子たちにいじめられたビリケンに助けを求められて、奈良の大仏が弟に加勢するために登場するのだ（最終的には女の子たちと仲良くなってしまう）。ビリケンと大仏を結びつけてしまう紅華のセンスには唸らされる。

このお伽歌劇の主人公ビリケンは、キューピーと並んで大正時代に日本に輸入されたアメリカの人気キャラクターである（図９）。ビリケンは現在では大阪新世界の通天閣の展望室に鎮座しているが、新世界の開業当初は、通天閣下の遊園地ルナパークのビリケン堂に祀られていた。紅華は実は、お伽歌劇「ビリケンさん」の製作よりも以前に、大仏と並ぶニッポノホンのキャラクターとしてもビリケンを採用していた。歌詞カードや月報の表紙、あるいは新聞広告に、大仏と並んでビリケンの顔を目にすることができる（図10, 11）。お伽歌劇「ビリケンさん」

図９．通天閣のビリケン像

図10．ニッポノホンの新聞広告

は、何のことはない、ニッポノホンの企業キャラクターをレコードにしたようなものだったのである。東京レコードは大正10年３月に日蓄の傘下に入るので、おそらくその時期以降の作品なのだろう。

キューピーやビリケンといった舶来キャラクターたちが、著作権意識の欠如に裏打ちされて商業デザインを席巻した時代背景もあって、紅華はそれらのキャラクターをSPレコードをめぐる意匠として採用し、またお伽歌劇の登場人物にも登用したのだった[7]。彼らを通じて、レコードに吹き込まれたお伽歌劇の内容と、レーベル袋その他のデザインが共鳴していた。紅華による複合的なメディア戦略といってよいだろう。

レコード袋のデザイン合戦

それではSP盤のレコード袋（スリーブ）について詳しくみていこう（図12）。レコード袋の紙質は様々であるが、LP盤のジャケットのような厚紙、ボール紙のようなものではなく、いわゆる紙袋である。いずれも中央部分に円形の穴があり、そこから内部のレコードのレーベル面が見えるようになっている。レコードが片面盤だった時代には片面にのみ穴があけられ、レコードの両面に溝の刻まれた両面盤の時代にいたって、レコード袋にも両面に穴があけられるようになった。

冒頭にも述べたように、各レコード会社は独自のデザインのレコード袋を使用した。佐々紅華が関係したニッポノホン（ワシ印）と東京レコード（富士山印）はいずれも東京のレコード会社だったが、当時は日本各地に多数のレコード会社が存在した。コロムビア、ビクター、ポリドールといった横文字の外資系が参入するのは昭和になってからであって、レコード会社はそもそも日本各地で活動する地場産業だった。各地で流行している曲を地元のレコード会社が録音したのである。たとえばオリエント・レコード（ラクダ印）は京都、ニットー・レコード（ツバメ印）は大阪、内外レコード（貝印）は西宮の会社である。そしてレコード袋に関しても、各社が趣向を競って制作していた様子が観察できるのだ。

レコード袋のミューズたち

引き札の時代から、宣伝媒体に女性イメージ（美人画）が用いられるのは一般的なことだったが、レコード袋にあっても事情は同じである。もっともハイカラで洒落たレコード袋を用いていたのは、京都のオリエント・レコードである（松井須磨子が「カチューシャの唄」を吹き込んだレーベルとしても有名である）。同社のレコード袋では、アール・ヌーボー風（あるいはミュシャ風）の女性像を描くシリーズが続いた（図13～16）。筆者は４パターンを確認している（それぞれのパターンの中でさらに色違いが存在している）。大きな帽子をかぶったドレス姿の女性を描く１点（図13）以外、オリエント・レコードのレコード袋に描かれた女性たちは、いずれも古代ギリシア風の衣装である（図14～16）。彼女たちは手に竪琴や

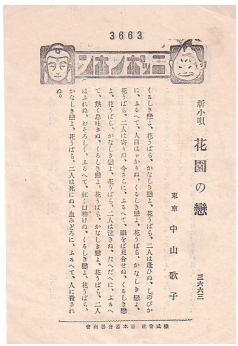


図11. ニッポノホンの歌詞カード

図12. 東京レコードのレコード袋

図13. オリエント・レコードのレコード袋

図14. 同

図15. 同

図16. 同（※）

タンバリンを持っているので、ギリシア神話の芸術の女神ミューズをイメージしたものと思われる[8]。デザイナーはミューズなどという西洋の女神をどのようにして知り得たのだろうか。欧米のレコード会社のレコード袋のデザインを真似した可能性もあると思われ、今後検証していきたい。

ちなみに音楽の象徴としての竪琴は、この時代、レコード袋のみならず様々な媒体で目にするものである。図17のニットー・レコードのレコード袋に向かい合って描かれた愛の神キューピッドが、弓を引くようなポーズで手にしているのも実は竪琴であり、秀逸なデザインであるといえる。ニットー・レコードのもう一点のレコード袋では、西洋婦人が左手を挙げているが、その指先には一羽のツバメがとまっている（図18）。ツバメはニットー・レコードの商標だった。ニットー・レコードでは月報の表紙などでも、趣向を凝らして商標のツバメを登場させている。商標をいかに自然にデザインの中に織り込むかというのもデザイナーの腕の見せ所だったのだ。

また、帝国蓄音器（テイチク）のヒコーキ・レコードという、時局性を感じさせるレーベルでは、女神が高く掲げた左手にレコードを持っている（図19）。彼女は月桂冠をかぶり、右手にオリーブの枝を持っているので、ミューズではなく勝利の女神ヴィクトリアである。雲間に3機の飛行機が見え、それらの勝利を祈念しているということだろう。

オリエント・レコードのミューズやヒコーキ・レコードの勝利の女神のような、衣を風になびかせる西洋の神的な女性像に対応する、日本における神的な存在は天女であった。東京レコードのレコード袋では、商標の富士山印にちなんで画面中央に堂々と描かれた富士山を背に、三保の松原の上空を天女が飛翔している（図20）。彼女は天の羽衣を風にたなびかせながら、散華のごとく、何枚ものレコードを宙にまき散らしている。

図19．ヒコーキ・レコードのレコード袋（※）

図20．東京レコードのレコード袋（※）

録音内容の東西を表すデザイン

ミューズと天女という、東西の女神像がSPレコード袋にあしらわれている様子を観察したが、この時代、1枚のレコード袋に洋の東西を表すモチーフが両方描かれることもままあった。商品ラインナップが東西に及ぶということを示すためである。SPレコードは、当初邦楽が中心だったが、次第に洋楽の新譜も増えてくる状況にあって、そのことを示そうとしたのである。

最先端を行っていたのは、その名がまさしく国内と国外を表している内外レコードである。内外レコードでは、レーベル名にふさわしいデザインが工夫された。たとえば図21では、上部にヴェネツィアの島影とゴンドラが描かれている。下部には宮島の厳島神社の社殿と大鳥居。東西の水都を並べてみたということだが、ヴェネツィアと宮島とは絶妙の取り合わせである。宮島を選ぶあたり、瀬戸内の西宮にあった会社ならではといえるだろう（東京のレコード会社であれば潮来、九州の会社であれば柳川が選ばれていたかもしれない）。もう一点、図22では洋装の女性と着物姿の女性が舞比べをしている。いずれ

図17．ニットー・レコードのレコード袋

図18．同

図21．内外レコードのレコード袋

図22．同

も内外レコードの楽の音に合わせて踊っているということだろうか。さらに凄いのは図23で、中央でレーベル面を取り囲み、そこから延びる帯状の区画にお面のようなものが散らされている。右方のそれに描かれた女性の顔が能面であることはすぐに分かるが、左方に描かれた髭面の男性の面は、実は古代ローマの喜劇用の仮面である(図24)。要するに東西の伝統的な仮面劇の仮面を並べているのだが、古代ローマ喜劇の仮面のような知識をデザイナーはどこから仕入れてきたのだろうか。そのマニアックぶりに驚かされる。

ポリドール・レコードでは、同じ袋の裏表にオーケストラと長唄をあしらったものがある（図25, 26)。オーケストラは指揮者も描かれ、長唄の方は、松羽目の前に長唄連中とお囃子が並んで座っている。長唄は和風オーケストラだということだろう。キング・レコードでは、玉座につく西洋の「キング」と、日本武尊のような日本の古代の武人が対峙している（図27)。ちなみにこの写真のレコード袋は、もとの所有者がレコードの曲名をレコード袋に書きこんでいることが分かる面白い資料でもある。当時このようにしてレコード袋を使用することも多かった。レーベル面の文字は小さいし、レコード棚から袋全体を取り出さないと見えないので、レコード袋の縁に大きな字で曲名を書き写しておいたのである。

専属歌手の時代へ

昭和に入ると、レコード袋のデザインは大きな変化を見せる。外資系大手レコード会社を中心に、そのレコード会社専属のレコード歌手の写真が印刷されるようになるのである。

たとえば、図28のビクターのレコード袋には歌手の藤山一郎の写真が見られる。ビクター・レコードではレコード袋１枚に１人の歌手の写真を配した。写真はその袋に入れられるレコードと必ずしも対応しているわけではない。再三述べているように、特定のレコードに固有のレコード袋ではないからである。一方、多数の写真を並べて賑やかなのは、テイチク・レコードのレコード袋である。図29を見ると、必ずしも流行歌手だけでなく、作曲家や浪曲師、落語家、漫才師等が登場していることも分かり、傍らには「日本一を誇る各芸術界第一の巨豪名人の専属陣」と記されている。この手のレコード袋は、レコード会社がどれだけ人気の歌手を抱えているかを宣伝することになるし、購入者も自分の贔屓の歌手や芸人の写真を見ることができて満足したことだろう。しかしレコード袋のデザインという意味では、レコード会社間の画一化が進み、面白みが少なくなったともいえる。

レコード史に照らして考えてみると、この変化は、昭

図23. 同

図24. 同

図25. ポリドール・レコードのレコード袋

図26. 同

図27. キング・レコードのレコード袋（※）

図28. ビクター・レコードのレコード袋

図29. テイチク・レコードのレコード袋

和に入りレコード流行歌手という存在が出現したということを示している。大正時代までは、お座敷で芸者が、劇場で女優が、街頭で演歌師（戦後の演歌歌手とは無関係で、大道でヴァイオリンを片手に歌いつつ歌本を販売した芸人）が歌っていた、巷ではやっている歌が、流行の末に録音されるにいたったのに対し、昭和以降は、はやらせることを目的に、レコード会社が専属作詞家や作曲家に流行歌を作らせ、それを専属の歌手が吹き込んだのである。大正までの「流行り歌」に対して、昭和期以降の「流行らせ歌」といわれる所以である。この、レコード流行歌手の出現という歴史的事象を、レコード袋は映し出しているのである。

おわりに

音声メディアであるSPレコードとその周辺について、デザインとの関連を検討してきた。冒頭にも述べたように、本稿は手持ちのコレクションを中心に、その見通しを示したものにすぎない。九州大学総合研究博物館の田村悟史コレクションには、ダンボール箱63箱分のレコード袋が未整理のまま残されているので（本稿で扱うことのできなかった洋物のSPレコード袋も大量に含まれている）、今後体系的な整理および調査・研究を行っていきたいと考えている[9]。

最近ではネット・オークションがSPレコード市場の中心的な位置を占めるようになってきているが、昔ながらの店主とのやり取りを含めた古物市でのレコード探しも楽しいものである。福岡市でいえば、箱崎宮の参道では現在でも定期的に古物市が行われており、SPレコードを扱っている店もちらほら見られる。そのような店を見かけたら、埃にまみれたレコード袋を手にとって眺めていただければさいわいである。思えば、私が田村悟史氏と最初に出会ったのが、この箱崎宮の古物市であった。本稿を、私にSP盤収集の手ほどきをしてくださった田村氏に捧げたい。

［付記１］

本稿は、平成29年２月４日に開催された九州大学総合研究博物館平成28年度公開講演会「SPレコード＆蓄音機の魅力 ── 田村悟史コレクション初披露目」における筆者の講演内容の一部に大幅な加筆訂正を施したものである。

［付記２］

本稿の図版キャプションのうち、（※）のついているレコード袋は九州大学総合研究博物館田村悟史コレクション、それ以外のレコード袋は著者所有のものである。

注

1　大西秀紀編『SPレコードレーベルに見る日蓄 ── 日本コロムビアの歴史』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、平成23年。

2　佐々紅華については、清島利典『日本ミュージカル事始め ── 佐々紅華と浅草オペレッタ ──』刊行社、昭和57年、および毛利眞人「浅草オペラから舞踊小唄まで ── 佐々紅華の楽歴」『浅草オペラ　舞台芸術と娯楽の近代』森話社、平成29年、225-290頁。

3　清島利典、前掲書、18頁。

4　日蓄本社ビルの大仏のイルミネーションについては、森垣二郎『レコードと五十年』河出書房新社、昭和35年、18頁、および金沢蓄音器館館長ブログ、ホット物語、その249「大仏マークからコロちゃんへ」（http://www.kanazawa-museum.jp/chikuonki/kancho/2017_09.html）を参照。

5　清島利典、前掲書、19-20頁。

6　お伽歌劇「ビリケンさん」の歌詞は、『大正SP盤レコード芸能・歌詞・ことば全記録　10』大空社、平成９年、257-263頁を参照。

7　紅華は東京レコードにおいて、お伽歌劇「キューピー」も製作している（『大正SP盤レコード　芸能・歌詞・ことば全記録　10』、271-276頁を参照）。ちなみに昭和に入ると、ミッキー・マウスやベティ・ブープが同様の役回りを演じるようになる。ただしニッポノホンにおけるビリケンのように、商標に準ずる用いられ方までされるにはいたっていない。

8　ギリシア語ではムーサ（複数形：ムーサイ）。ミューズはアポロン神に仕える９柱の女神である。それぞれに固有の職掌があり、特徴的な持ち物を手にする姿で表される。竪琴を持っているのは、合唱・舞踊を司るテルプシコレ、あるいは独唱歌を司るエラトである。レコード袋のデザイナーたちは、そこまで細かく意識はしていなかっただろうが。

9　レコード袋のデザインにおいて独自の系譜をたどることができそうなのは、子供用レコードのレコード袋である。子供用レコード専用のレコード袋を準備していたレーベルがいくつかあり、それらを見ると子供にふさわしいデザインがなされていることが多い。

Received October 2, 2017; accepted December 1, 2017

The Iconography of SP Sleeves: Notes on the Designs of SP Records

Yoshinori KYOTANI

Faculty of Humanities, Kyushu University: 6-19-1 Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka City, 812-8581, Japan

The Tamura Satoshi Collection of the Kyushu University Museum includes many SP sleeves. This article aims to examine how the designs of SP sleeves reflect the business strategy of record companies.

Key words: SP record, record sleeve, design, art deco, music

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.65-68

九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方にむけて

三　島　美佐子

九州大学総合研究博物館・開示研究系：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：本報は、この約10年にわたり当館で取り組んできた、本学の歴史的什器の救済、保存、および活用に関する取り組みについて俯瞰し、救済した什器の今後の保存活用方策の可能性について述べるものである。まず、新たな保存のあり方として、個人や事業所等に什器を貸し出し、そこで使いながら保管してもらう「在野保存」を提案し、その実装にむけて必要と思われる要素を述べる。次に、什器を展示や研究利用することに加え、重複品等については資金化に供することの可能性について述べる。いずれにおいても、大学ならびに大学博物館がこのような取り組みをすすめるには、単に実務・実利を目的とするのではなく、対象とした什器をとおして、利用者（借用者・購入者）の学びや延長された博物館体験につなげることを主眼とすべきである。

キーワード：キャンパス移転、再利用、在野保存、資金、寄付、延長された博物館体験

1．背景

九州大学では、この十数年の間に、箱崎キャンパスの移転やキャンパス内の建物建替が進行している。当館では、その過程で更新の対象となり廃棄されることとなった木製什器を救済（salvage）し、保存・活用してきた。三島・岩永（2014）[1]では、その取り組みに至る背景と2013年ごろまでの動きを報告した。救済当初、筆者をはじめとする救済に携わった教職員や協力者らの什器回収の動機は、「本学の歴史資産として価値があると思われるものが無為に廃棄されるのは“もったいない”」というのが第一であった。これはどちらかというと感傷的（emotional ないし sentimental）なものであったといえる。しかしながら、2010年からの展示への利用[2]、2012年からの大川家具の協力による木製家具リペアと再利用の取り組み（吉田 2014）[3]などをとおして、回収した木製什器の質やデザインの良さがよく理解されるようになった。

そのような経緯を経て、2015年度の理学部移転時には、回収什器の学術資料的な意義を担保するため、購入年代や型を網羅することを目的とした事前調査を行い、その上で回収を実施した。結果として、歴史的な木製家具を含む回収什器は、400点を超えることとなった。2018年度には、当館および大学文書館とその他３つの部署を省く全ての部局が箱崎から伊都に移転することとなっており、大規模な木製什器の更新が見込まれている。この最終移転時でも歴史的什器の回収を予定しており、コレクションはさらに増加する見込みである。

2015年度の理学部移転時の回収で什器コレクションが相当数になったことを受け、2016年１月、家具史を専門とする新井竜治氏に外部評価を実施いただいた[4]。その結果、このように一箇所に意図的に学校家具が集積されている例は皆無であること、資料の導入年代が幅広い（約40年）こと、品質・状態・物量が優れていることなどから、高い学術的価値をもつ歴史資料であることが明らかになった。また、九州大学大学文書館などに戦前の備品台帳が残っており、購入年や納品元等を辿れる点も、資料的価値が高いとして評価された。詳細については、今号に掲載されている新井氏による報告[5]を参照されたい。

2．保管に関する新たなあり方の提案 ── 在野保存

当館は、2000年の創設以来、博物館固有建物の確保が

不透明な状態が続いており、慢性的なスペース不足と、最終移転後の資料の保管場所の確保が重要な課題となっている。什器コレクションについても、2015年度の理学部移転の後相当数となり、その保管が課題となってきた。当館で扱っている自然史資料等に比べると、特に戦前の歴史的家具１点あたりが占める体積はより大きい[6]。

この救済什器が、従来の本学研究者が収集してきた専門的な自然史資料や歴史資料・史料と大きく異なる点は、現代の日常生活で使用する道具であり、廃棄扱いになる直前まで実際に使用されており、現在も使用可能なものであるという点である。このまま収蔵庫に資料として保管しておくよりもむしろ、日常の中で使い続けることが什器本来の機能を生かすことになり、またその使っている場で保存した方が、保管庫に占める面積を減らすことにもなる。そこで筆者は、事業者ないし個人などにこれらの什器を貸し出し、その事業所ないし自宅で使いながら保管してもらうことを着想した。

今回の救済什器が自然史・歴史の資料や史料と異なる点をもう一つ挙げるとすれば、その使用や保存において、とりわけ特別な知識や専門的技術を要しないことである。保管者には、良識と常識をもって丁寧に大切に使用してもらえさえすれば、日常の中で普通に使ってもらうことがそのまま保存につながる。このような在野での保存（以降、在野保存と呼ぶ）が可能な資料は限られるが、博物館の資料保存のあり方の一つとして戦略的に考えてみる必要がある[7]。

なお、什器の更新や廃棄のタイミングの一つは、世代交代である。今回什器更新が大量になされた本学のキャンパス移転や建物建て替えも、いわば敷地や建物の世代交代といえる。個人宅においても、親世代のものを子世代が引き継ぐとは必ずしも限らない。そこで、在野保存に出した什器については、世代交代などで不要となった場合には、返却できるようにしておく必要がある。これには、モノとその保存先の紐付けにより、追跡を可能とする仕組みが重要である。ひとつには、イギリスのアンティーク家具のように鑑定書をつけ、購買や修繕などの履歴も残るような仕掛けがあるとよいだろう。

また仮に、当館から地理的に遠く離れた土地で在野保存されていた場合には、返却時に直接当館に送るよりも、一旦近場の保管可能な場所で預かってもらい、次の利用先が決まった段階で、直接次の在野保存先に什器を移動させる方が、資料保全および経費節減上よりよいだろう。このためには、各地域で集積拠点（ノード）となるような保管庫ないし事業体があることが理想的である。

以上、保存の方策のひとつとして、在野保存を新たに提案した。これを社会に実装し、歴史的木製什器の保存と再利用を長く持続し、次世代に継承していけるようにするためには、上述してきたような仕組みや仕掛けを整備していく必要がある。

３．活用に関する新たなあり方の可能性――資金化

これまで当館では歴史的什器を、展示や催事での利用ないし館内での経常的な使用に供し、活用してきた。さらに、2016年の新井氏による外部評価で、家具史・インテリア史・建築史・近代史・教育史・大学史などの学術分野における資料価値が見出されたことを受け、その後共同研究での資料的利用がすすんでいる[8]。今号に掲載されている真保氏による報告[9]は、その共同研究の一環である。以上のような活用は、大学や大学博物館として標準的かつ妥当なものといえる。

ところで、現在博物館建物の建設や確保が不透明な最大の理由が建設経費となっている。そこで経費確保が重要である状況の中、筆者は、歴史的什器を回収しはじめたかなり早い段階で、救済什器を活かした資金化の可能性を想定していた[10]。ただし、大学の元々備品であったものを「売って利益を上げる」のは、制度的・技術的に難しいと思われ[11]、また、筆者個人として、心情的に躊躇するものがあった[12]。一方本学には基金事業が整備されているため、寄付返礼とする可能性もある[13]。ただしこの場合も、「対価としてモノを得た＝購入した」とみなされると、寄付であっても課税対象となるため、具体的なあり方については熟慮が必要である。

以上、救済什器を売却ないし寄付返礼として、資金化につなげる活用への可能性について述べた。この場合でも、什器の在野保存であるということが前提であり、流通のあり方をデザインする必要がある。

４．運用においては、利用者の学びと幸福そして拡張された博物館体験を究極目的とすべし

以上、救済什器の活用のあり方の可能性について述べてきた。今後、学内の規則や他大学での事例等を含め調査した上で、慎重に、かつ前向きに、検討する意義があると筆者は考える。

前向きに検討すべき大きな理由はふたつあり、そのひとつは、すでに地域の学校を借用した資料保管やそこでの活用が、収蔵庫問題[14]への解として試みられていることである[15]。これはいわば博物館にとって「延長された収蔵（ないし収蔵庫）（extended preservation/storage）」といえる。

もうひとつは、事業所や自宅における在野保存では、日常生活のごく身近に資料が存在する状況が生まれ、市民の博物館体験（ないし博物館資料体験）や学習機会に直結するという点である。そもそも博物館で資料を扱う専門職員は、日本では学芸員などの有資格者、ないし専門性や技能を有する専門家や研究者である。いかに「みんなでつくる博物館」を目指したとしても、専門性の高い部分や資料管理については、研究者・専門家・技能者に託すほかない。反面、日常使いが可能な家具資料は、在野保存により、一般市民にも資料保存の体験と意識を、ごく日常的な取り組みとして、頒布することが可能である。体験の発信やその共有などもうまく組み合わせれば、博物館内に留まらない「博物館資料体験」として、よりよいものになる可能性がある。

前掲した館外収蔵の事例でも、学校の教職員・生徒・地域の住人などが主体的に担うようになれば、それはすなわち在野保存であり、それは同時に、その学校教職員・生徒・地域の住人にとって、優れた学習機会・博物館体験となるだろう。これらはいわば館外における「延長された博物館体験（extended museum experience）」といえる。

一方、慎重に検討すべき点として、やはり２点挙げられる。ひとつは、在野保存や資金化等の取り組みを、単なる拡張保管庫の獲得や利潤追求とすることなく、利用者（在野保存においては借用者、資金化においては購入者ないし寄附者）の拡張された博物館体験を促し、その日常における学びや幸福につなげることを究極目的とすることへの共通認識を持つ必要がある点である。昨今自助努力での資金確保に迫られつつある大学法人や博物館で、現場レベルでその方策を検討する際、単なる実務・実利的な観点でのみ議論される場面が多々ある。これには注意を要し、常に究極目的を意識しつつ、それに即した取り組みや評価をなすことに留意すべきである。

もうひとつは、貸出や売却・返礼に用いる什器の選定には、慎重を期するという点である。一見多数存在しているようにみえる救済什器には、唯一無二のものも存在しており、また重複していても、時系列や多様性を見る資料として重要な場合がある。従って、まずは個々の什器について、計測や素材判定はじめとする詳細な基礎調査を行い、また、コレクション全体の構成や点数重複の程度、個々の什器の資料としての重要度を明らかにし、使用に供する基準や改変可能とする基準を明確にすることが肝要である。後者への言及は、本号に掲載されている新井氏・真保氏らの報告[16]も参照されたい。

おわりに

当初、“もったいない”という感傷的な思いを動機として始めた九大の廃棄木製什器の救済は、この10年で、体系的な取り組みとなった。そして現在、そのきっかけとなった移転の完了を目前に、筆者にとっての動機づけは、新たな研究や社会的試みへの発展へと変容している。来年度（2018年度）に実施される最終移転では、歴史的木製什器の無為な廃棄を最小限にするとともに、よりよい資料化に繋げることを目指したい。今後は、什器本体とコレクション全体については基礎調査を推進し、同時に、在野保存と資金化の仕組み・仕掛けについては社会実験をとおして妥当性や実行可能性を丁寧に検証する必要がある。

謝辞

本報告における着想に至るまでの歴史的什器救済とその保存・活用、およびそれに伴う研究において、岩永省三・当館副館長、吉田茂二郎・当館元館長、新井竜治・当館専門研究員はじめ、多数の方々にご協力をいただいている。深く感謝いたします。

注

1　三島美佐子・岩永省三（2014）「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用（1）経緯」九州大学総合研究博物館研究報告　12: 57-66.

2　木製什器に限らず道具類などの回収品を最初に展示に用いたのは、旧工学部本館における博物館設立10周年特別展示「光が泳ぐ場所」（2010年５月10日～21日）であった。これを皮切りに2010年度は、第一分館倉庫における５企画で、回収した木製什器を使用したサイエンスカフェや企画・展示などを実施した。その後毎年、展示や催事等で恒常的に回収什器を使用しているほか、館内の日常使いでも用いている。歴史的什器回収そのものをテーマとした展示は、特別企画『活きる木製什器展「知春草生　春草ノ生ズルヲ知ル」』（2013年３月11日～３月18日）を、第一分館倉庫と常設展示室で実施した。

3　吉田茂二郎（2014）「木質什器の修復と再利用を目指して――九州大学農学部と同総合研究博物館の取り組み――」木科学情報誌　21(1): 6-9.

4　家具類の外部評価者を探す過程で、「家具道具室内史学会」という学会があることを知り問い合わせたところ、新井竜治氏を紹介された。新井氏はちょうど前年の2014年、『戦後日本の木製家具 Postwar Japanese Wooden Furniture』という大版の約520ページに及ぶ大著を、家具新聞社から刊行したところであり、新井氏に外部評価を依頼した。

5　新井竜治・三島美佐子（2018）「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的什器コレクションの価値と課題」九州大学総合研究博物館研究報告　15-16：69-85.

6　例えば、大型の上下組の書棚は W180～200× D30～50× H180～210cm、平机は W90～180× D60～90× H70前後 cm、事務机は W100～150× D60～100× H65前後 cm で、机にはさらに袖が片方または両方についているものもある。個々の家具の正確な重量を計測できていないが、50kg ～100kg ほどはあると思われる。

7　実際には、古文書、刀剣、工芸品、美術作品、書など、当事者が積極的な「保存」意識をもっているか否かに関わらず、結果として在野保存されている文化資源や文化財は、少なくないと推察される。

8　外部評価後、評価者であった新井氏に共同研究を申し入れ、その後、物質文化史が専門の真保晶子氏にも参画を依頼し、いずれも快諾頂いた。農学部什器のリペア事業をすすめていた吉田茂二郎・元当館館長にも共同研究に加わっていただき、2016年６月ごろには、科学研究費補助金への申請にむけた研究体制を整えた。当時の申請では、什器のような日常で使用できる文化資源を「活用文化財」という言葉で表し、それを貸し出し保管してもらう「在野保存」を提起し、その実効性を測ることを目的としていたが、採択はされなかった。その後、現有する回収什器の地道な調査・分析などを進めている。

9　真保晶子（2018）「中古家具再利用の実践――イギリス西部ブリストル、ソファ・プロジェクトの事例――」九州大学総合研究博物館研究報告　15-16：87-95.

10　なぜなら、工学部移転が始まって間もない頃、インターネット上で、本学の古い備品プレートがついた小型の木製家具が販売されていたり、農学部の廃棄物置場の付近にワゴンを停め、本学の関係者とは思えない人たちが何か物色しているらしかったりするのを、見たことがあったからである。廃棄された什器が、スクラップやチップにされてしまうぐらいであれば、再利用される方がよいのではあるが、廃棄されたとはいえ本学の什器を本学以外の業者や個人が売って潤うぐらいであれば、自分達で売って博物館建設資金や本学に還元されるようにしたほうがよいと考えていた。

11　当時筆者は、本部職員から「大学が収益を上げてはいけない」と言われたことがあり、引き続きそういう状況であると思い込んでいた。

12　脚注11であると同時に、当時筆者は、基礎研究者が研究資金ではない「金を稼ぐ」ことへの漠然とした忌避感を持っていた。

13　国立大学の独立行政法人化後、基準面積以上の建物の建設は、大学の自助努力により可能とされており、本学では、博物館建物建設のための経費は寄付で賄うということが、可能性の１つとなっている。なお、回収する什器の点数は限られており、仮に単純に販売したとしても、その収益が博物館建物建設に足りるほどの額にはならないことは、容易に想像される。

14　収蔵庫問題とは、博物館において、収蔵スペースが不足してしまうことと、それに付随して生じる様々な問題をさす。

15　2004年３月発行の『東京都三多摩効率博物館協議会会報ミュージアム多摩』No.25において、収蔵庫問題が特集されている。この中で、武蔵村山市立歴史民俗資料館による「収蔵庫問題解決に向けた試み」として、学校教室を借用した収蔵室化・資料室化とその活用が報告されている。

16　前掲脚注５および９

（査読なし）

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.69-85

九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題

新井　竜治[1)]・三島美佐子[2)]

[1)] 芝浦工業大学・デザイン工学部
[2)] 九州大学総合研究博物館・開示研究系

要旨：筆者らは、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクション約350点について、2016年１月25～26日に実地調査を実施して、その学術的価値・実用的価値などを評価した。また合わせて、同コレクションの回収方法・保管方法・資料状態・付随資料についても評価した。同コレクションは、学術的にも実用的にも非常に高い価値を有しているが、その保全管理面などにおいて多くの課題を抱えていることが明らかになった。本稿は、同調査の報告書に基づき、論点を整理・統合して、加筆・修正を行ったものである。

キーワード：木製家具、学校家具、事務家具、歴史的家具、展示什器

１．はじめに

1.1. 研究目的

九州大学のキャンパス移転計画の実施に伴い、同大の六本松キャンパス、箱崎キャンパス、馬出キャンパス（病院地区）などの旧校舎で使用されていた木製什器が大量に残置・破壊・廃棄された。九州大学総合研究博物館では、古くは旧帝国大学時代から使用されてきた、これらの木製什器の文化財的価値をいち早く認識して、その廃棄什器の救出計画を立案して、回収作業を実施した[1]。その結果、2015年度末時点で、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器約350点が無事回収された[2]。しかし、これらの木製什器コレクションは、保存されているとは言い難く、大部分は一時保管（仮置き）されている状態であった。

筆者らは、これらの木製什器コレクションを実地検分して、その学術的価値・実用的価値などを評価した。また合わせて、同コレクションの回収方法・保管方法・資料状態・付随資料についても評価した。

その実地調査に基づき、本稿では、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた歴史的木製什器コレクション（約350点）の学術的価値・実用的価値などを明らかにすることを第一の目的とする。

そして、当該の歴史的木製什器コレクションの保全管理面などにおける諸般の課題を明らかにすること、それと合わせて、課題解決のために有効と考えられる提言を行うことを第二の目的とする。

1.2. 研究方法

九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部、馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクションの実地調査は、2016年１月25・26日に実施した。その木製什器が一時保管されていた場所と概要は、表１～３の通りである[3]。なお、2018年度に移転予定である箱崎キャンパスの農学部・文学部の木製什器の回収が成功すれば、九州大学総合研究博物館が救出した木製什器コレクションの最終的な総数は1,000点を超える見通しである。

表１　旧工学部本館に一時保管された木製什器類

階	室名	木製什器名
４階	会議室	旧工学部会議室（教授会室）
３階	常設展示室	展示／レスキュー家具類
	廊下	旧理学部地球惑星科学科標本棚
	列品室	旧工学部資源資料展示室移設
２階	廊下	回収家具およびリペア品
	工作室	回収家具リペア品使用例
１階	廊下	回収家具類／中山家寄贈家具（棚類）
地階	什器室大	キャンパス内からのレスキュー家具類
	什器室小	キャンパス内からのレスキュー道具類
	工学資料ピット小	工学部工場資料および具材／県庁具材

表２　旧工学部３号館に一時保管された木製什器類

階	室名	木製什器名
各階	什器仮置室	2015年度の理学部からの回収家具類
１階	岩石標本室	理学部所蔵岩石・石炭資料標本の標本棚（※）

※石炭資料部分は目視確認のみ実施。

表３　旧応用化学棟に残置された木製什器類（※）

階	室名	木製什器名
各階	各室	造作書棚
最上階	階段教室	教卓・教壇・黒板・学生用机
	図書室	金属製書架

※旧応用化学棟は、残置された木製什器類共々、2017年に解体撤去された。したがって、表３記載の木製什器類は回収されなかった。

２．歴史的木製什器コレクションの学術的価値

2.1. 研究資料的価値

九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた歴史的木製什器コレクション(約350点)の学術的価値として、まず研究資料的価値を挙げることができる。その中でも特に、家具史・インテリア史・建築史の歴史資料的価値と大学史・教育史の歴史資料的価値について、以下に述べる。

2.1.1. 家具史・インテリア史・建築史研究の歴史資料的価値

a. 家具現物と証拠資料による包括的歴史資料

九州大学箱崎キャンパス工学部・理学部・農学部・文学部、馬出キャンパス（病院地区）医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器は、明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期の学校用及び事務用の木製家具の変遷を知ることができる大変貴重な歴史資料である。特に、明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期の日本の木製家具の現物が、これほど大量に一つの場所に収蔵されているということは、全国的に見ても非常に珍しいことである。これが第一の大きな特徴である。

それと合わせて、個々の木製什器を特定することができる備品番号プレートが大部分のものに附されていること、その備品番号に対応した、購入時期・材料・寸法等を記した備品台帳（カード式帳簿）がほぼ完全に保存されていること、競争入札記録・建物設計図・家具配置図などの付随情報が九州大学大学文書館に収蔵されていて容易に調査できることなど、モノの歴史研究にとって不可欠である文字・絵図による証拠資料が十分に存在していることが、本資料の第二の大きな特徴である。

具体的事例を一つ記す。戦後日本において事務用家具の主流が木製から金属製に移り変わったことは事実として一般的に認識されている[4]。しかし、それがいつ頃起こったのかについては、全く明らかにされていない[5]。これは供給者側である木製家具メーカー・金属製家具メーカー側の資料だけでは明確に述べることが出来ない命題である。そこで必要となるのが、使用者側の資料であるが、官公庁・教育機関・一般企業という使用者側の帳簿資料が長い年月に亘り、廃棄されずに保存されていることは極めて稀である。ところが九州大学においては、その帳簿資料が完全に保存されているのである。したがって、今後研究を進めることで、戦後日本において事務用家具の主流が木製から金属製に変化した時期を特定することができ、戦後日本の家具史における新たな知見を得ることができる。

それから、上述した九州大学の備品番号プレート以外に、家具メーカー名を記したネームプレートやラベルが添付されている木製什器も散見される。現状では、戦前・戦後日本の家具メーカーのカタログを網羅的に収蔵する研究機関は日本には存在しない。したがって、ネームプレートやラベルによって家具メーカー名が特定できる家具現物は、貴重な歴史資料である。

例えば、麻布区時代の「寿商店」のネームプレートが附された木製卓子（テーブル）（図１）、「コトブキ」のロゴのラベルが貼られたプラスチック製の椅子類（４本脚／１本脚十文字脚）（図２・３）などが見られたが、これらは、いずれも近代日本の歴史的家具である。

また、特許番号（patent number）を記したプレートま

図１　株式会社壽商店ネームプレート附き木製卓子

図２　コトブキ製プラスチック製椅子

図３　「イスのコトブキ」ラベル

たはラベルが貼付されている木製什器も少々見られた（図４）。この特許番号を、特許庁の特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）の資料と照合すれば、その特許番号プレートを附された当該家具は、早くても、その特許が登録された年月以降に製造されたものであることが確定する。

図４　株式会社壽商店「新案特許複式棧附板」プレート

b. 旧工学部本館４階会議室の家具・インテリア

家具史の最近接領域であるインテリア史・建築史との関連において、歴史的に重要な家具として、その価値を認識することができるものには、以下のような特徴がある。

① 建築・室内装飾（インテリア）と一体となっているもの
② 実際に使用されてきたもの
③ 使用された後で保存状態の良いもの
④ 元来の使用された材料が良質なもの
⑤ 製作者が特定できるもの

旧工学部本館４階会議室の家具・インテリア（図５）は、上記の全項目に合致する。

特に、古典様式に準じた装飾文様が施された、会議テーブル（W1665 D755 H 745／巾5.5尺 奥行2.5尺 高2.5尺）（図６）、及びキャスター付き大型安楽椅子（ウエビングテープ＋コイルスプリング内蔵）（図７）については、「大阪三越家具製作工場製作」のプレートが附されている（図

図５　旧工学部本館4階会議室の家具インテリア

図６　旧工学部本館４階会議室の会議テーブル

図７　旧工学部本館４階会議室のキャスター付き大型安楽椅子

８・９）。ただし、大阪三越家具製作工場は20年ほど前に解散しており、大阪三越家具製作工場側の資料を追跡することは困難である[6]。しかし、当時の競争入札の記録資料、建物設計図、家具配置図、家具図などが九州大学に現存する。それによれば、応札業者は、三越、髙島屋、寿商店ほかであり、最終的に三越が落札して製作・納品した。また、競争入札の際に使用された家具図も九州大学大学文書館に遺されている（図10）。

ところで、国指定重要文化財三河家住宅（徳島市）の邸内にも、1928（昭和３）年頃の竣工当時のものと思われる大阪三越家具製作工場で製作された昭和初期の家具一式が保存されている。この三河家住宅の施主の三河義行は、1887（明治20）年、徳島県名西郡上分上山村（現・神山町）の旧家に生まれた。この義行は三河家の養子となり、1913（大正２）年に九州帝国大学医科大学を卒業し、1922～24（大正11～13）年、ドイツに留学してベルリン大学で学んだ。一方、三河家住宅を設計した木内豊

図８　会議テーブル「三越家具製作工場製作」プレート

図９　キャスター付き大型安楽椅子「三越家具製作工場製作」プレート

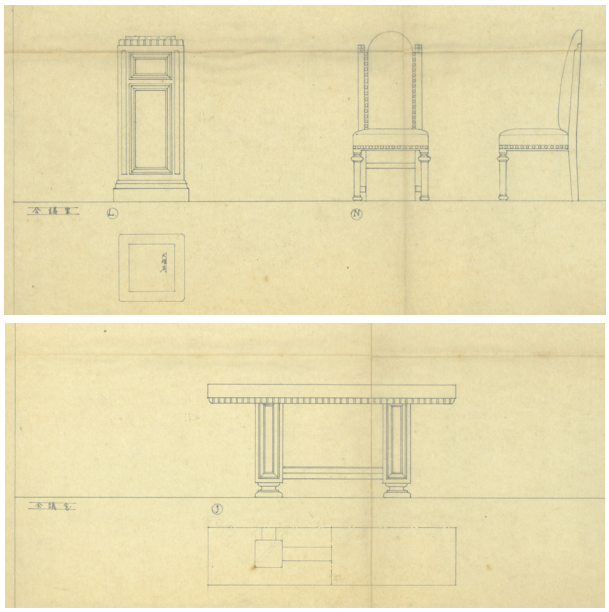


図10　旧工学部本館4階会議室の家具図（九州大学大学文書館所蔵）
上：フラワースタンドと椅子、下：卓子

次郎は、1890（明治23）年に生まれ、徳島県立工業学校

建築科を卒業して、1922～27（大正11～昭和２）年にライプチッヒ大学で学んだ。三河義行と木内豊次郎は、ドイツで知り合いとなった。そして、木内豊次郎は帰国後、三河義行の自邸を設計することになった。この九州帝国大学で学んだ三河義行の自邸（重文）の主要な家具こそが、大阪三越家具製作工場で製作されたものであった[7]。

旧工学部本館４階会議室の家具と国指定重要文化財三河家住宅の家具とを単純に比較することはできない。しかしながら、少なくとも、旧工学部本館４階会議室の家具は、国指定重要文化財三河家住宅の竣工当初の家具を製作した工場と同じ工場で製作されたものであることは、確かなこととして明記されるべきである。

c. 旧工学部本館列品室の木製展示什器

旧工学部本館の列品室に置かれている木製展示什器は、

図11　旧工学部資源資料展示室（旧工学部本館列品室保管）の木製展示什器

図12　木製展示什器の下台内部の引出

図13　木製図面保管庫

旧工学部資源資料展示室の木製展示什器であった。これらの木製展示什器は、表面材がナラ材無垢板であり、引出内部が杉材無垢板であるというように、使用された材料が良質であること、開扉の中の引出前板の塗装の劣化が殆ど見られないこと、使用されている金具の装飾が豊かであることなどを勘案すると、大変状態の良い貴重なものであると言える（図11・12）。

また、ナラ材無垢板で製作された図面保管庫なども、材料が良質で、構造的にもしっかりしたものである（図13）。

このように、旧工学部本館の列品室に置かれている木製展示什器は、木材（ナラ材無垢板の大量使用）・塗装・金具などの点で、非常に貴重なものである。

ただし、これらの木製展示什器の内部に保存されている「旧工学部資源資料」については、筆者らはその専門的知識を持ち合わせていない。そのため、これらの木製展示什器内に収蔵されている「旧工学部資源資料」については、科学史・技術史の学会員である専門家による評価をさらに実施する必要がある。

d. 旧応用物質化学機能教室の木製什器

応用物質化学機能教室（応用化学教室）の建物は映画セットにも使用された昭和戦前期の特徴を有する建物であった。この建物内に残置された造付書棚は、保存状態が良く、また使用されている材料も良質であることから、保存・活用されることが期待された（図14）。ただし、この造付書棚は大型家具であり、各室の壁面に固定されていたために、搬出するのは容易ではないと想像された。

また、最上階の階段教室は、学生用席、講壇、黒板枠などのすべてが木製でできた、趣のある大教室であった

図14　旧応用物質化学機能教室の大型木製造付書棚

図15　旧応用物質化学機能教室の階段教室

図16　旧応用物質化学機能教室の階段教室の机の跳上げ式甲板

（図15）。学生用席の木製家具は、横長のベンチの背裏に、後席の人が使用する跳上げ式の机の甲板が付いたものであった（図16）。また、木製の講壇には、メダル型や溝彫りなどの古典的な装飾文様が施されていた（図17）。

しかしながら、2017年、当該「応用物質化学機能教室」は、そこに残置された造付書棚、階段教室用木製什器などと共に、取り壊されてしまった。

e. 同等品発注方式の事例

救出された木製什器の中には、数多くの木製の標本棚がある。旧工学部本館３階廊下などに置かれている木製の標本棚の中には、その外形（全体の形状と寸法）と表面木材樹種は類似しているが、内部木材、構造、塗装色、把手形状などが微妙に異なるものが散見される（図18）。

外形と表面木材樹種が同じでも、内部材料・構造・塗装色・把手形状などの細部が異なる木製の標本棚が蓄積されてきた背景には、九州大学における木製什器の追加発注に際して、以下のような発注方法が存在していたのではないかと推定される。

「オリジナルモデル」→「同等品」の発注→「落札・納入業者の関連工場の製品」の納入→「同等品」の蓄積

図17　旧応用物質化学機能教室の階段教室の木製講壇

図18　木製標本棚（旧工学部本館3階廊下）

旧工学部本館地階にある備品台帳（カード式帳簿）には、各木製什器の「購入時期」「外形寸法」「表面木材樹種」が、主として記されている。このカード式帳簿に記載された事項が、納入業者の納品書に基づいて記されたものであったにせよ、発注者側である九州大学の発注書に基づいて記されたものであったにせよ、発注者側にとっては、外形寸法と表面木材樹種だけが問題であったことを示している。そしてそれ以外は、納入業者の自由裁量に委ねられていたと思われる。

このような状況下では、外形（全体の形状と寸法）と表面木材樹種だけは指定通りであるが、内部材料・細部構造・塗装色・把手形状などが異なるものが、学内に蓄積されることになる。つまり、同じ外形と表面木材樹種の「同等品」の群れとなるのである。

そしてこのことが、九州大学における外見上の「同等品文化」「均質文化」を生み出したと言える。しかし実際には、細部の内部材料・構造・塗装色・把手形状などは異なっており、「大同小異」の様相を呈しているという、非常に興味深い状況を生み出したのである。

2.1.2. 大学史・教育史の歴史資料的価値

a.『九州大学百年史写真集』収録写真との比較

『九州大学百年史写真集』[8]の第２章「九州帝国大学の創立と発展：1911-1926」には、工科大学、農学部、医学部、法文学部の創設期の講義室、実験室、資料列品室、図書室などの内部写真が載録されている。これらの写真からは、九州帝国大学の創設期の教育設備機器の様子を窺い知ることができる。

そして、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクションの中には、『九州大学百年史写真集』に掲載されている写真に写っているものと、とてもよく似た木製什器が含まれている。

例えば、「工科大学採鉱学科応用地質学列品室」（大正５年）[9]に写っている木製展示什器と比較的よく類似した木製展示什器が、当該歴史的木製什器コレクションの中に見られる（図19・20）。ただし、両者を見比べると、下台の扉の有無や、細部の意匠・構造などに若干の相違があることが判る。これは、前述の「同等品発注方式」によって生じた差異であると考えられる。

図19　旧工学部資源資料展示室（旧工学部本館列品室保管）の木製展示什器

図20　工科大学採鉱学科応用地質学列品室（大正5年）

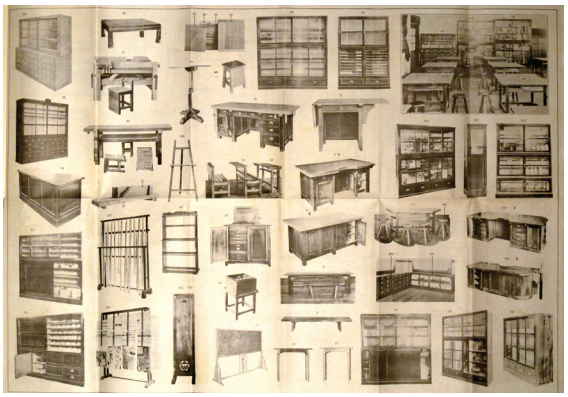
このように、当該歴史的木製什器コレクションは、九州帝国大学創設期の記録写真に写っている教育設備機器の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、『九州大学百年史写真集』所収の写真に写っている木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業は今後の課題としたい。

b. 近江屋家具工作所「型録」との比較

合資会社近江屋家具工作所（本社新潟市）の戦前期の「型録」（以下「型録」と略記）によれば、同社は和洋家具、文化台所、学校々具、運動具、店頭設備、図案設計、窓飾・敷物・壁紙、室内装飾を取り扱っていた。そして当時は、宮内省御用達、新潟県指定各学校御用達であった。

この近江屋家具工作所の「型録」に載録された木製什器と、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの木製什器とを比較すると、両者間で比較的よく類似している意匠の木製什器が見られる（図21）。



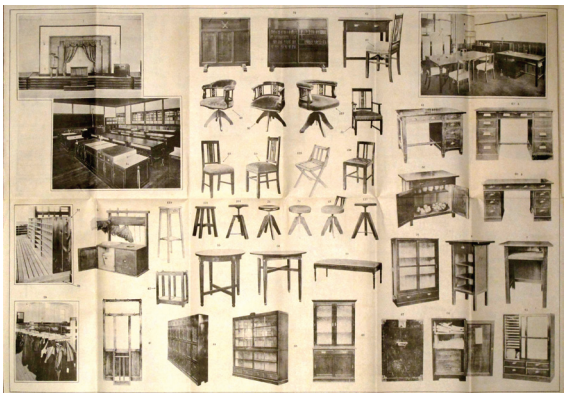


図21　近江屋家具工作所「型録」（戦前期・発行年不詳）

つまり、当該歴史的木製什器コレクションは、戦前期の木製家具製作所の「型録」に掲載された学校々具の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、「型録」掲載の木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業は今後の課題としたい。

c. 木檜恕一著『近代の事務家具』（博文館1930年）との比較

大正期・昭和戦前期の木材工芸界を理論面から強力に先導した東京高等工芸学校木材工芸科教授の木檜恕一は、1930（昭和５）年に『近代の事務家具』を博文館から著している。同著には、当時の木製の事務家具（オフィス家具）の家具図が多数収録されている。その品目は、①机と卓子、②椅子と腰掛、③棚と戸棚、④函と箪笥、⑤洋傘立外套掛と衝立である。これらの戦前期の事務家具（オフィス家具）は、大学事務室や教員研究室などにおいても使用されたものと考えられる。

この木檜恕一著『近代の事務家具』に掲載された木製の事務家具の家具図と、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの木製什器とを比較すると、両者間で比較的よく類似している意匠の木製什器が見られる（図22・23）。

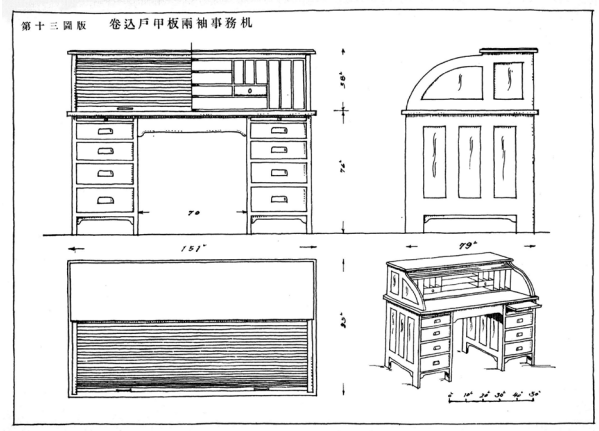


図22　巻込戸甲板両袖事務机（木檜恕一『近代の事務家具』第13図版）

図23　巻込戸附き両袖机

この場合も、当該歴史的木製什器コレクションは、戦前期の大学事務室や研究室で使用された木製事務家具の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、木檜恕一著『近代の事務家具』掲載の木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業についても今後の課題としたい。

2.2. 教育資料的価値

当該歴史的木製什器コレクションのもう一つの学術的価値として、教育資料的価値を挙げることができる。その中でも特に、高等教育的価値と生涯学習的価値について、以下に述べる。

2.2.1. 高等教育的価値

当該歴史的木製什器コレクションには、工学系・芸術系・歴史系などの学生の実習教材としての高等教育的価値がある。

当該歴史資料群「木製什器」は、モノの歴史研究の実習教材として利用することができる。また、実測図をCADで起こさせることによりCADソフトの習熟を促すという教育的効果もある。また、九州福岡地区の各大学・学部・学科と連携して、モノの歴史研究のワークショップを開催することも可能である。

具体的には、九州大学工学部建築学科、九州大学芸術工学部環境設計学科、九州大学芸術工学部工業設計学科、九州産業大学工学部住居・インテリア設計学科、九州産業大学芸術学部デザイン学科、九州産業大学美術館などとの連携が考えられる。

そして、具体的な作業としては、木製什器（木製家具）の採寸・三面図（平面図・正面図・側面図）の手描き・三面図のCAD起こし・三方向（平面・正面・側面）からの写真撮影・材料検分・塗装検分・細部構造解析・記録のデジタル化などが想定される。

その際、後段に記述するような「調査事項フォーマット」（表６）を予め作成しておくと有益であろう。

2.2.2. 生涯学習的価値

当該歴史的木製什器コレクションにはまた、一般公衆を対象とする生涯学習的価値もある。

前述のとおり、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションは、近現代日本の家具・インテリア・建築の歴史を知る上で、大変貴重な歴史資料であるので、研究者・大学関係者のみならず、一般公衆の興味を掻き立てるものでもある。したがって、この歴史的木製什器コレクションを文化財・公共財として一般公衆に展示公開、教育普及することは、このコレクションの持つ一つの重要な役割である。

３．歴史的木製什器コレクションの実用的価値

3.1. 循環型社会の資源的価値

九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの実用的価値として、まず循環型社会実現のための資源的価値を挙げることができる。

当該歴史的木製什器コレクションの中で、歴史的な画期を示す指標的価値のあるもの、保存状態の良好なもの、元来の品質の良いものなどは、純粋な歴史資料として収集保存・展示公開するべきであろう。その際、経年劣化が著しいものについては、記録をしっかり残した上で、最小限の修復を行う。

しかし、それ以外のものについては、きちんと記録を残した上で、修復もしくは修理を施して、九州大学総合研究博物館の展示什器として再利用することができる。

例えば、2016年１月に開催された九州大学総合研究博物館の企画展「九州大学歴史的備品再生プロジェクト／再生歴史的家具展示」は、かつての九州大学の研究室を再現するための大道具として、歴史的木製什器コレクションの一部の木製什器を修復・修理して活用した事例である。このような企画展の内容が、今後常設展示とされていくことが期待される。

現在、九州大学総合研究博物館は、九州大学旧工学部本館の３階に置かれているが、この旧工学部本館の全館が九州大学総合研究博物館の分館として再利用されることになれば、救出された木製什器を博物館全館の展示什器として再利用することができる。その際には、旧工学部本館の全館博物館化計画の初期段階から、これらの木製什器を組み込んでいくべきである。

また、伊都キャンパスに計画されている（新）九州大学総合研究博物館の展示什器としても、これらの木製什器を再利用することができる。その際にも、設計計画の初期段階から、これらの木製什器を組み込んでいくべきである。

このような、木製什器を博物館の展示什器として活用した先行事例として、東京大学総合研究博物館「インターメディアテク」（JPタワー／KITTE内）における、木製什器の展示什器としての再利用を挙げることができる。

3.2. 商用的価値

次に、当該歴史的木製什器コレクションの実用的価値として、その商用的価値を挙げることができる。

3.2.1. 永年貸与と寄付金獲得

当該歴史的木製什器コレクションの一部について、その記録を残して、修復・修理した後、九州大学のブラン

ドイメージを利用して、プレミアム品として、希望者に永年貸与する代わりに、九州大学に寄付金を納付してもらうという方策がある。これは、海外にも類例を見ない、先進的アイデアである。

3.2.2. 売却と利益還元

当該歴史的木製什器コレクションの中には、歴史的にも、品質的にも、必ずしも博物館で保存・公開する必要のないものも存在すると考えられる。

そのような場合には、記録を残して、修理した後、九州大学のブランドイメージを利用した中古家具として、指定販売特約店を通して、市場において販売することも視野に入れる必要が出てくるだろう。そして、その売却によって得た利益を九州大学に還元する仕組みを確立することが望まれる。

その際、後述する『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）を、その木製什器に添付すれば、その木製什器の由縁が損なわれることなく、購入者の次代にまで継承されることになる。このようにして、当該歴史的木製什器コレクションの一部が、社会において大切に保存され、有意義に活用されることになると期待される。

図24　旧工学部本館地階に一時保管された木製什器類

図25　旧工学部3号館に一時保管された木製什器類

4．歴史的木製什器コレクションの課題と提言

4.1. 回収・保管における課題と提言

4.1.1. 保管環境の課題と方策

歴史的木製什器コレクションの総点数は最終的に1,000点を超える見込みである。これらの木製什器は特に大型であるため、その保管場所の確保が最も困難な課題の一つである。

現在までに回収された歴史的木製什器は、旧工学部本館、旧工学部３号館、第３分館（旧工学部食堂）などに分散して保管されている。さらに今後、農学部・文学部からの木製什器の回収も控えているので、さらなる保管場所が必要になってくる。

残念ながら、2016年１月末時点において、これらの歴史的木製什器コレクションの保管環境は、旧工学部本館４階の会議室と３階の列品室を除いて、極めて劣悪であった。そのため、カビの発生、木材の割れ・反り、接着剤の劣化による接ぎ切れ、塗装膜の劣化による木肌の露出など、様々な経年劣化の加速が危惧された。

特に、旧工学部本館地階及び旧工学部３号館に一時保管（仮置き）された木製什器類は、ほとんど２～３段に積み重ねられていた（図24・25）。そのため、重ね積みによる打痕・引っ掻き傷の増加も危惧された。

これらの状況については、一日も早い改善が望まれる。少なくとも木製什器が１台ずつ平置きできるスペースの確保が必要である。

4.1.2. 今後の回収方法における課題と方策

一般的に、歴史資料群は、種類毎に、また時代別に分別されて保管されていると、調査・研究が捗る。本資料群「木製什器」についても、種類毎に、また時代別に分別・保管されるべきである。

今後、農学部・文学部の木製什器を回収する場合、搬出・移動・一時保管場所への搬入作業に際して、最初か

ら種類毎に、また大正期・昭和戦前期・戦後期などに大別して、時代別に分別・保管することを強く期待する。

また、すでに救出されて、現在、一時保管中の木製什器（工学部・理学部・医学部のもの）は仮置きであるので、近い将来、別の場所に移動することになっている。その際には、上記のとおり、種類毎に、また時代別に区分し直して保管することを強く期待する。

そのためには、まず木製什器に附された「備品番号プレートによって年代が一目瞭然に判別できる表」を作成しておく必要がある。そして、搬出業者に作業指示を出す貼紙を各木製什器に貼付する際、各木製什器の時代区分の確認が現場において出来るように、その貼紙を貼る人々に、この表を携行させて時代区分作業をさせる必要がある。またこの表は、その後の調査・研究においても随時携行すると有益である。

4.2. 資料状態の課題と提言

4.2.1. 意匠・材料・技術・製造業者・流通経路の特定の問題

今後、歴史的木製什器コレクションを調査研究する中で、意匠・材料・技術・製造業者・流通経路を特定する作業に直面する。残念ながら現状は、これらの作業の緒に就いたばかりである。

a. 意匠の特定

歴史的木製什器コレクションの各種木製什器の意匠上の特徴を把握するに当たり、その意匠が、果たして当時一般的に普及していたものであったのか、それとも特別注文に応じて製作されたものであったのかを明確にする必要がある。

前述の旧工学部本館４階の会議室の家具一式のように、競争入札に伴う設計図・見積書などの資料が遺されている故に、特別注文されたものであることが確定できるというものは少ない。

そこで、製造当時の木製家具メーカーの製品カタログと歴史的木製什器コレクションの各種木製什器とを比較検討する必要がある。ただし、戦前期の木製の事務用家具・学校用家具などを製造していた木製家具メーカーのカタログは僅少である。今後、これらのカタログを網羅的に収集することが求められる。

また、前述の「同等品発注方式」で追加購入された場合であっても、元々何を雛型としたのかを明らかにすることが求められる。

b. 材料の特定

木製什器の主な材料は、木材・塗料・金具である。

使用された木材の種類を特定するためには、林学・木材科学の研究者及び実務家の協力が必要である。また、当該コレクションの一部に、プラスチックを使用した椅子（コトブキ製）などがある。その場合も、専門の研究者及び実務家の協力を要する。

塗料・塗装方法を特定するためにも、木材の塗料・塗装の研究者及び実務家の協力が必要である。

使用された金具の意匠・材料・機構などの特定についても、専門の研究者及び実務家の協力が不可欠である。

c. 技術の特定

歴史的木製什器コレクションの各種木製什器の製作技術については、技術別に分類した上で、時代別・地域別の特徴を把握する必要がある。

具体的には、からくり錠の構造、無垢板の巾接ぎ方法、縦方向の継ぎ方、積層合板の積層枚数・積層方向など、詳細に調査する必要がある。

また、特許（パテント）登録された技術が使用されていることが、特許番号プレートによって明らかである場合は、その内容の詳細についても、特許庁の特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）において確認して付記する必要がある（図４）。

d. 製造業者・流通経路の特定

前述の旧工学部本館４階の会議室の家具一式のように、競争入札が実施された木製什器については、応札業者・落札業者・落札価格・製造業者などの情報が明らかである。

また、木製什器自体に家具メーカー名を記したプレートやラベルが附されているものが若干見られる。その場合は、少なくともそれらの木製什器を製作した製造業者を特定することができる。

しかし、それ以外の歴史的木製什器コレクションの大部分については、その製造業者・流通経路を明らかにする作業は未着手の状態である。

そこで、まず備品台帳（カード式帳簿）から納入業者

が特定できるものがあれば、それらの納入業者を一覧表に整理することから始めるべきである。その納入業者を追跡調査することによって、残りの歴史的木製什器コレクションの製造業者・流通経路を明らかにすることができるものと期待される。

4.2.2. 資料的価値のバラツキ問題と解決方法（案）

長い年月の間、使い続けられた木製什器は、製造時に使用された材料（木材・塗料・金具）の品質、使用者による扱い方、保守点検・修繕の有無などによって、その資料的価値にバラツキが生じる。当該の歴史的木製什器コレクションにおいても、同様の理由によって、資料的価値にバラツキがある。

これは私案であるが、歴史的木製什器コレクション（最終総点数1,000点超）について、表４に示す３段階に区分して、その区分ごとに適した活用方法を見出しては如何であろうか。

表４　歴史的木製什器コレクションの状態と活用方法（案）

ランク	状態	活用方法
A	良品	修復して保存・展示
B	普通品	修復もしくは修理して、再利用または永年貸与
C	劣悪品	修理もしくは未修理のまま売却、または修復部材として活用

第２章で述べた、歴史的な画期を示す指標的価値のあるもの、保存状態の良好なもの、元来の品質の良いものなどが、A ランクに当たる。これらは、純粋な歴史資料として収集保存・展示公開するべきであろう。修復が必要であれば、記録を残した上で、最小限の修復を行う。

B ランクはボリュームゾーンであり、最も点数が多いと想定される。品質的には中級（普通品）である。これらは、記録をしっかり残した上で、修復・修理を施して、九州大学総合研究博物館の展示什器として、また九州大学各学部の什器として再利用する。または、寄付金の代わりに希望者に永年貸与する。

C ランクのものは、歴史的にも、品質的にも、必ずしも博物館で保存・公開する必要のないものである。C ランクのものの内、比較的良品のものについては、九州大学のブランドを利用した中古家具として、指定販売特約店を通して、市場で販売して、その利益を九州大学の運営費に算入する。そして、C ランクのものの中で、いくら修理しても、木製什器としての体を成さないものについては、A ランク品・B ランク品の修復のための取替え部材として保管して、必要に応じて活用することが可能である。

4.2.3. 修復（Restoration）・修理（Repair）における注意点

当該歴史的木製什器コレクションは、現時点では修復・修理が全く施されていないものが殆どである。繰り返しになるが、歴史研究の視点から言えば、まず修復・修理前の状態をきちんと記録する必要がある。その上で、個別に事案を検討して、修復するか、修理するか、修復のための取替え部材として保存するか等を決定する必要がある。

さて、今回調査した木製什器の中で、奇妙な棚を見つけた。外見はナラ材無垢を使用しており、形状・塗装などから判断して、古いものであると認識した。しかし内部には、ラワンベニヤを表面に貼った積層合板が使用さ

図26　部分修理された天板の内部（ラワンベニヤ板で部分修理）

図27　収納棚の内部の底板（元来は杉材無垢板の巾接ぎ）

れていた（図26）。備品番号からも古いものであると確認できるが、昭和戦前期にラワンベニヤが流通していたのであろうかと疑問に思った。調査を進める中で、別室に保管されているものの中に類似した棚を見つけた。その棚の内部には、杉材の無垢板が使用されていた。無垢板は木理方向と直角方向に大きく伸び縮みするので、経年のため、木理方向に沿って割れていた（図27）。伝統的な日本の家具修理の方法は、この無垢材のヒビ割れた部分に、同材の薄板を掻き込んで修理するというものである。ところが、上述の棚は、この割れた杉材の無垢板を全部取り除いて、その部分を、ラワンベニヤなどを表面に貼った積層合板に取り替えるという修理を施したようである。つまりこれらの棚のオリジナル品は、表面材がナラ材無垢板、底板・背板・天板が杉材無垢板で製作されていた。しかし、約100年の間に、杉材無垢板が割れたために、その部分だけ積層合板に置き換えるという、オリジナルの良さを損なう部分修理をしていたのではないかと考えられる。

九州大学総合研究博物館として収集保存・展示公開するものは、オリジナルの姿（原形）を留めているものであり、なおかつ保存状態の良いものとするべきである。したがって、上記のオリジナルの姿を残しているものについては、杉材無垢板のヒビ割れ部分に杉材の薄板を掻き込んで、カンナで削って平滑にするという技法によって、オリジナルの姿を残すような修復を施し、最重要の保存品とするべきであろう。

そして、代替材によって部分修理を施してあるものについては、杉材無垢板を使ってオリジナルの通りに修復するべきか、それともそのまま簡単な追加修理を施して、再利用または永年貸与するべきか、事案ごとに判断するべきである。一般的には、類似するものが沢山ある場合は、修復せずに修理品とすべきであろう。そして同じものが他に見当たらない場合に限り、オリジナルの通りに修復・復元するべきである。

なお、今回の調査の過程で、楢（しな）ベニヤ、ラワンベニヤ、ブナベニヤなどを識別した。また、これらのベニヤ板（突板）を表面に貼った、三層の積層合板が引出の底板に使用されていることが多いことも判った。

1923（大正12）年７月、新田ベニヤ製造所発行『ベニヤ板定価表』を見ると、新田ベニヤ製造所では、楢（なら）、栁（たも）、嚶（あさだ）、樺（かば）、栓（せん）、楢（しな）、黄檗（きはだ）、楓（もみじ）のベニヤ板（突板）を製造していたことが判る[10]。また、杉、神代杉、茶神代杉、屋久杉、檜のベニヤ板（突板）も注文に応じて製作していた。同社の所在地は以下のとおりである。

工　場：北海道十勝国止若
本　店：大阪市南区難波久保吉町
出張所：大　阪：大阪市南区難波久保吉町
　　東　京：東京市京橋区加賀町
　　小　樽：小樽市稲穂町
　　福　岡：福岡市博多上土居町
　　名古屋：名古屋中区笹島町

これらのことによって、大正期末には、楢ベニヤは流通していたことが判る。しかし、ラワンベニヤ、ブナベニヤは昭和期に使用され始めたものではないかと考えられる。

最後に、修復・修理における仕上げ方法についてであるが、九州大学総合研究博物館の企画展「九州大学歴史的備品再生プロジェクト／再生歴史的家具展示」において再現した、教授室に置かれた修理済みの両袖机を見て、少々違和感を抱いた。この違和感は、修理された両袖机には傷が一切なかったこと、塗装色が明るかったこと、艶消し仕上げであったことなどに由来していた。

通常、アンティーク家具のビジネスにおいては、塗装色は濃いアンティークブラウン色にすることが多い。そして、長年使うと擦れて艶が出ることから、艶消しではなく、艶ありで仕上げる。また、傷はそのまま残す。または、故意に傷を増やす場合もある。前述の東京大学総合研究博物館「インターメディアテク」（JP タワー／KITTE 内）において、展示什器として再利用された木製什器は、傷がそのまま残された、艶ありの濃いアンティークブラウン色で仕上げられている。

今後、これらの歴史的木製什器コレクションの修復・修理に従事する職人の方々には、本格的なアンティーク家具仕上げの技法を修得していただく必要があると強く思う。

文化庁が管轄する重要文化財などの修理工事を請負うことができる修理工事業者は、予め研修を受けて認定された業者だけである。これらの業者は、修理工事の際のガイドラインを熟知しており、修理工事報告書の作成に

も精通している。当該歴史的木製什器コレクションの修復・修理においても、同様の修復・修理業者の認定制度が設けられることが望ましいと考える。

それから、これらの修復・修理を九州地域の木製家具産業界と連携を図って実施すれば、研究教育機関と産業界との連携を強化することに繋がるものと大いに期待される。

4.3. 付随資料の課題と方策

4.3.1. 九州大学総合研究博物館作成・発行『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』(初版：2015年10月)

『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』(初版：2015年10月）は、九州大学のキャンパス移転に伴って残置・廃棄される直前、九州大学総合研究博物館によって救出された、価値ある木製什器を分類整理して記録を付けた貴重な資料集である。これまでの一連の作業を精力的に進めて来られた志と実際の努力に敬意を表したい。

その上で、『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』の完成版である、『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作に向けて、以下のような、「記載項目」に関する提案[11]（表５）及び「調査方法」についての提案[12]（表６）をする。

そして、この『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）は、出版・頒布されて、研究者のみならず、広く日本国民が享受できるようになることが望まれる。

4.3.2.『九州大学歴史的木製什器再生プロジェクト』（仮題）の制作・出版

全世界の装飾芸術品とプロダクトデザインの博物館・美術館に絶大なる影響力を有する、ロンドンの The Victoria and Albert Museum の British Galleries を大改装する計画と実施の全貌を記した報告書が、『Creating the British Galleries at the V&A: A Study in Museology』として発行されている[13]。同書は、現代の世界中の博物館・美術館スタッフの必読の書である。

表５　『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）記載項目（案）

項　　目	内　　容
品名	用途に基づき品名を決める。カタログ掲載品である場合はカタログに準拠する。
品番	プレート／シールなどに記された品番・カタログ記載の品番などが判れば記録する。
製作者［所］	製作者・製作所（メーカー）が判別できる場合には記載する。
寸法（サイズ）	幅・奥行・高・座高・肘高・下台高さ・下台奥行・上置高さ・上置奥行・甲板厚・天板厚などを記す。外形最大寸法値を記す。部位ごとの最大寸法があれば、それも記す。詳細な寸法は三面図に記入する。
木部形状	三面図において表現する。モールディングは断面詳細図で表現する。
材料	部位ごとに材料が違う場合は、部位ごとに記述する。修理前／修理後の相違も記す。 例）部位の名称：扉、引出前板、甲板、天板、背板、側板、笠木、貫……など。 例）修理前：甲板ナラ無垢５枚巾接ぎ。接ぎ切れ・１枚欠損のため、新規にナラ無垢材を使用……など。
構造・機能	部位ごとの構造・機能を記す。修理前／修理後の相違も記す。 例）無垢材巾接、積層合板、フラッシュ構造、ランバーコア構造……など。
塗装・仕上げ	部位ごとに違う場合は、その旨を記す。修理前／修理後の相違も記す。
椅子張地	材質・図柄・絵柄などを記す。修理前／修理後の相違も記す。
内部詰物	材質を記す。修理前／修理後の相違も記す。
家具金物	材質・形状・機能・メーカー名（判明すれば）などを記す。修理前／修理後の相違も記す。
特記事項	大きな欠損箇所・大きな修復・大きな修理箇所を記す。 例）どこが、どのように欠損していて、どのような修復・修理を施したのか。
修理担当者	家具メーカー名、修復・修理作業実施者名などを記す。
修理費用	金額、競争入札／随意契約の別、競争入札／随意契約の書類の整理記号などを記載しておく。
歴史	購入時の情報・使用状況の変遷の記録を記す。また記録の出典を明記しておく。
実測図	三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図。 修理前／修理後の二種類を作成する。
調査員氏名	家具調査記録を付けた者の氏名・デジタル化担当者名・作図担当者名などを記す。

表６　調査方法（案）

手　順	内　　容
（１）	まずフォーマット枠だけを印刷した白紙の記録用紙を準備して、調査担当者が手書きで記録をつけながら調査する。フォーマットを決めると調査項目に漏れがなくなる。
（２）	（１）と同時に、修復・修理前の状況を詳細に写真で記録する。可能であれば三面図（平面図・正面図・側面図）の方向及び透視図の方向から撮影する（＊）。
（３）	修復・修理前の家具の三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図のラフスケッチを描く【野帳】。
（４）	外形最大寸法・詳細寸法を採り、記録する【野帳】。
（５）	品番・寸法（サイズ）・材料・構造・機能・張地・詰物・金具などを調べ、記録する【野帳】。
	上記（４）・（５）は、修理前の三面図ラフスケッチ【野帳】の中にメモとして記録しておくと後々便利となる。
（６）	修復・修理を担当する家具業者が見ないと判らない事項もある。その場合は、家具業者が記録をつける。例えば、塗装は実際の修理時に溶剤を使って、目立たない裏側の隅で試してみないと判らないものもある。
（７）	修復・修理方針を決定する。競争入札・随意契約の仕様を決定する。
（８）	修復・修理を担当する家具業者を決定する（競争入札・随意契約）。
（９）	修復・修理作業内容を記した完了報告書を提出させる。この報告書に修理後の上記事項をすべて書かせて提出させる（表５参照）。
(10)	修復・修理後の家具の写真撮影。可能であれば、三面図（平面図・正面図・側面図）の方向及び透視図の方向から撮影する（＊）。
(11)	三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図の修理前・修理後の清書図の作成（デジタル／手描き）（工学部・芸術工学部の学生アルバイト使用）。
(12)	手書きメモのデジタル化。調査した者が行うことが好ましい。
（＊）	撮影には、照明器具・背景の白スクリーン・高解像度カメラを体育館のような場所に常設する仮スタジオを設けると良い。そして救出家具を流れ作業で撮影する。

翻って、九州大学総合研究博物館における、歴史的木製什器コレクションに関する、今回の一連の救出プロジェクトの過程を克明に記録した『九州大学歴史的木製什器再生プロジェクト』（仮題）についても、出版・頒布されることが強く期待される。この取り組みは、同じような問題を抱えている日本及び世界の官公庁・教育機関・一般企業における木製什器の再利用計画の重要な指針となるだろう。

また、これらの著作物の売上を博物館運営経費に還流したり、救出された木製什器の修復・修理の費用に充てたりすることができるだろう。

4.3.3. 備品帳簿・競争入札記録・建物図面・家具配置図

旧工学部本館地階に保存されている備品台帳（カード式帳簿）はすべてデジタルデータ化する必要がある。もちろんオリジナルの紙媒体のカード式帳簿も貴重な歴史資料であるので、燻蒸除菌の上で保存するべきである。

また、木製什器などの競争入札記録があるものについては、前述のデジタルデータ化された備品帳簿の備考欄に、競争入札記録の保管場所を追記しておくと研究資料としての価値が増すであろう。

さらに、木製什器などが納入された建物・室内の図面が存在するものについても、前述のデジタルデータ化された備品帳簿の備考欄にその情報を追記しておくことが望ましい。

4.3.4. インターネット上でのデータの公開

紙媒体の『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作と並行して、その簡易バージョンを、インターネットを通して公開することも視野に入れるべきであろう。

インターネット上で、すべてのデータを公開してしまうと、紙媒体の書籍を発行する出版社が難色を示すのではないかと危惧される。また、インターネット上のデータは、大規模災害等が発生すると消失してしまう危険性がある。やはり紙媒体に印刷したものを「主」として、仮想空間上のものを「従」とするべきであろう。

したがって、まず紙媒体の『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作を優先して進め、その内容をインターネット上でどこまで公開するべきかを検討した上で、インターネット版の簡易バージョンの公開作業を進めるべきである。

5．おわりに

今回調査した九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部、馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器は、その年代範囲（明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期）・品質・量（総数1,000点超）を勘案すると、第一級の歴史資料であると言える。今後、その保存及び活用が大いに期待される。

特に、家具史・インテリア史・建築史における歴史資料としての非常に高い学術的価値が認められる。また近代日本を牽引した旧帝国大学の研究教育環境を窺い知ることができるため、大学史・教育史における歴史資料としても非常に高い学術的価値が認められる。

また、モノの歴史研究の調査実習に利用することができたり、実測図をCADで起こすことによりCADソフトに習熟させたりするという教育的価値も認められる。さらに、九州大学総合研究博物館の展示什器として再利用できるという実用的価値、プレミアムを付けて永年貸与する代わりに寄付金を納入していただくという実用的価値などが認められる。

しかしながら、これらの木製什器は、長い年月の間、実際に使用されてきたため、資料の状態が比較的良好なものから、比較的劣悪なものまで、バラツキがある。また、比較的大型の家具が多数を占め、なおかつ、その数量が膨大である。したがって、個々の木製什器の歴史的価値を評価・選別して、修復して保存・展示するもの、修復もしくは修理して再利用または永年貸与するもの、修理もしくは未修理のまま売却するもの、または単に修復部材として活用するものなどに区分することが必要である。

まずは、これまでに救出・収集した木製什器群の基礎資料化が必要であり、今後救出・収集する予定の木製什器群についても、随時その基礎資料集に追加していく作業が続くものと見込まれる。

注

1　三島美佐子・岩永省三「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用（1）経緯」『九州大学総合研究博物館研究報告』第12号、pp.57-66、2014.

2　六本松キャンパスの残置木製什器の回収は失敗した（前掲1）。

3　当該実地調査においては、第3分館（旧工学部食堂）に置かれた標本棚と展示ケース、及び、2018年度に移転予定である箱崎キャンパスの農学部・文学部の木製什器については割愛した。

4　新井竜治『戦後日本の木製家具』家具新聞社、pp.44-45、2014.

5　北田聖子「戦後の事務用家具標準化の出発」『デザイン理論』第55号、pp.21-35、2009. において引用されている、桧山邦祐『つくえ物語』イトーキ、pp.178-183、1979. によれば、1959-60年の金属製デスクの価格は約13,000円／台にまで低下して、木製デスクの価格は約10,000円／台にまで上昇したという。そして、そのことをもって事務用机の主流が木製から金属製へと変化した時期が1960年頃であることが示唆されている。しかし同著では、それを裏付ける出荷数量データなどは示されていない。

6　元三越製作所工場長、中林幸夫氏に確認。

7　徳島市「第6回三河家住宅保存活用検討委員会」資料「第2章　三河家住宅の概要（追加分、家具）」PDF、p.4、2014.10、https://www.city.tokushima.tokushima.jp/kankou/bunkazai_art/mikawaya_hozon.files/shakai_kyoiku45_02.pdf

8　九州大学大学文書館編『九州大学百年史写真集』九州大学百周年記念事業委員会、2011.

9　同上8『九州大学百年史写真集』、p.27、図2-045.

10　新田ベニヤ製造所『新田式ベニヤ板定価表』1923.7.

11　「家具用語」については、以下の文献に準拠した用語を使用することが望ましい。日本家具工業連合会家具用語事典編纂委員会『家具用語事典』全国家具工業連合会、第2版、2008. 剣持仁『家具の事典』朝倉書店、1986. 豊口克平『インテリアデザイン事典』理工学社、第2版、1989.

12　「家具図は三面図で記録すること」については、以下の文献を参照されたい。織田憲嗣『デンマークの椅子』初版、光琳社、1996. 再版、ワールドフォトプレス、2002. 島崎信・西川栄明・山永耕平『ウィンザーチェア大全』誠文堂新光社、2013.

13　Wilk, C. & Humphrey, N.: Creating the British Galleries at the V&A: A Study in Museology, London: V&A Publications, 2004.

Received September 1, 2017; accepted November 14, 2017

Value and Challenges of Historical Wooden Furniture Collections of the Kyushu University Museum

Ryuji ARAI[1)] and Misako MISHIMA[2)]

[1)] School of Engineering and Design, Shibaura Institute of Technology
[2)] Laboratory of Information and Multimedia Sciences, The Kyushu University Museum

Summary: By the end of the year 2015, Kyushu University Museum rescued approximately three hundred fifty historical furniture pieces that had been used in Engineering Department and Science Department at Hakozaki Campus of Kyushu University and in Medical Department at Maidashi Campus, which is known as Hospital Area of Kyushu University. The authors examined those historical furniture pieces on January 25th and 26th, 2016 to assess their academic and practical value. At the same time, the authors also evaluated rescue method, store method, condition of historical furniture pieces, and documents of the Kyushu University Historical Wooden Furniture Collections. Based on the examination on the spot, it became obvious that the collections had extremely high value for both academic and practical purposes. On the contrary, it also became clear that the collections had a lot of problems in terms of maintenance and management. This paper is a revised version of the initial report on value and problems of the Kyushu University Historical Wooden Furniture Collections.

Keywords: Wooden Furniture, School Furniture, Office Furniture, Historical Furniture, Display Furniture

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.87-95

中古家具再利用の実践
――イギリス西部ブリストル、ソファ・プロジェクトの事例――

真　保　晶　子

芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科

要旨：本稿では、九州大学総合研究博物館所蔵の明治末期から昭和中期の学校家具コレクションを民間に貸し出し、市民とともに保存する「活用文化財の在野保存」プロジェクト（以下「九大博物館プロジェクト」と略）の準備段階として、海外での家具再利用の先行事例、イギリス西部ブリストル市の団体、「ソファ・プロジェクト(The SOFA Project)」を概観し、その市民向け再利用の仕組みを検討する。不要となった家具を社会で有効に再活用するという理念において共通する点があるこのソファ・プロジェクトの活動内容を検討し、この例をもとに、九大博物館プロジェクトに参考となる点を指摘する。

キーワード：家具再利用、ソファ・プロジェクト、地域活性、環境意識、地域への誇り

はじめに

本稿では、九州大学総合研究博物館所蔵の明治末期から昭和中期の学校家具コレクションを民間に貸し出し、市民とともに保存する「活用文化財の在野保存」プロジェクト（以下「九大博物館プロジェクト」と略）の準備段階として、海外での家具再利用の先行事例を紹介する。ここで焦点を当てるのは、イギリス西部ブリストル市の団体、「ソファ・プロジェクト（The SOFA Project）（SOFAは ‘Shift Old Furniture Around’ の略）」である。この団体は博物館が関与していないという点では九大博物館プロジェクトとは大きく異なる。そして学内で廃棄された家具を収蔵品として確保し、その民間における有効利用を模索する九大博物館プロジェクトに対し、この団体が常時市民や会社から不要な家具を集め、必要な市民に循環させるという、いわゆるリサイクル団体であるという点でも大きな相違がある。しかし、後述するとおり、九大博物館プロジェクトとこの団体とは組織の形態や手法、目的は異なるとしても、不要となった家具を社会で有効に再活用するという理念において共通する点がある。博物館や文化施設での先行例を調査する前に、「家具」を中心に据えた市民向け再利用の試みを組織的に行っているこの団体の事例から、九大博物館プロジェクトにも有効な何がしかの知見を得られるものと考えられる。本稿ではまずソファ・プロジェクトの活動内容を検討し、この例をもとに、九大博物館プロジェクトに参考となる点を指摘する。

1．ソファ・プロジェクト

1-1. ソファ・プロジェクトの事業内容と目的――地域支援・都市再生・環境

1-1-1. 組織

冒頭でふれたとおり、ソファ・プロジェクト（The SOFA Project）は ‘Shift Old Furniture Around’ の略である[1]。この名のとおり、古い家具を循環させようという目的で、質のよい家具と電気製品を地元の家庭や会社から回収し、修理が必要なものは修理してから、直営の店舗でできる限り低価格で消費者に販売するというリサイクル団体である。

「ソファ・プロジェクト報告書ならびに監査財務報告書

（2016年３月31日）（The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016）」には１名の理事長と７名の理事（その年の退職者を除く）、１名のCEOの氏名が連ねられている[2]。理事会は２か月ごとに開催されるが、その間も直接やＥメールで連絡を取り合うよう努めている。理事になりたい者がいれば理事長とCEOの面接を経て理事会の投票を持って決定される。実際の日々の運営にはCEOと運営マネジャー各１名、そしてフルタイム、パートタイムの職員が当たる、保証有限責任会社（a company limited by guarantee）である[3]。

1-1-2. 目的

ソファ・プロジェクトの目的はどのようなものか。「ソファ・プロジェクト報告書ならびに監査財務報告書（2016年３月31日）」には以下の３点が明記されている[4]。

（a）欠乏、困窮、貧苦の状態にある人々に家具、家庭用品、電気製品を修理提供することにより貧困を救済すること。
（b）人々が社会的に排除されることを防ぎ、社会的に排除されてしまう立場の人々の欠乏を軽減し、これらの人々を社会に融和できるよう支援すること（訓練、教育、社会復帰、そして雇用とヴォランティアの機会を含めるが、それらに限定するわけではない）。
（c）工業製品と家財道具を再資源化し再利用することによって環境を保護し保存すること。

ここに掲げられた目的を見る限り、団体としての第一の目的は貧困層への救済手段としての中古家具・家電の提供であることは明白である。相川（2002）では、都市におけるコミュニティ・ビジネスの海外事例視察報告として他の２団体とともにこのソファ・プロジェクトについて１ページ半に渡り、組織運営の概要が綴られている[5]。それによれば、この団体は1980年に市の中心部の別の場所に開業したが、2000年11月に同じ地区の大通り沿いに移転し、他の市民活動団体とともに入居するビルを新設したという。現在も店舗はブリストル市中心部オールドマーケットという場所にある[6]。相川によれば、この地域がある市中心部は低所得層が多く住み、購入者もこれらの層が中心であるという[7]。そのため相川はソファ・プロジェクトを「ブリストル市内で移民が多く住むインナーシティに限定したチャリティー目的のコミュニティ・ビジネス」と定義する。そして「寄付者（比較的裕福な層）と対象者（インナーシティに住む低所得層）とがはっきり分かれ、かつその関係を明言している点」が「ソファ・プロジェクトの特徴」と明言する。相川はこの団体への補助金が多種・多額に渡る理由として「衰退地域の都市再生や環境保全、失業者の就業支援や生活援助など、さまざまな功績」にふれてはいるが、ソファ・プロジェクトの一次的な目的を「チャリティー」に帰している。

しかし、現在は必ずしも古典的なチャリティーの形式だけにとどまらない。前掲の「ソファ・プロジェクト報告書」（2016年）ではむしろ第２番目の目的（b）、社会的に排除されてしまう立場の人々の労働の機会への支援が強調されている。16～20か月間ソファ・プロジェクトの仕事を請け負い、社会復帰の準備をした地元の刑務所の受刑者たちもいた。また長期間失業をしている地元の人々へ６か月の試用期間の後、フルタイムで働ける機会も提供した[8]。さらに、18～24歳の学習障害の若者たちにも支援団体と協力し、ソファ・プロジェクトで働き、雇用労働へ就く機会を高める訓練を提供した。

報告書はブリストル市内の貧富の差を問題として提起する市長の言葉を引用した後、次のように述べる[9]。

> SOFAはこの問題に取り組む上で30年以上もの経験を持っている。我々は清潔できちんとした家具を市内の低所得の人々に届けている。生存するのに必要なこの必需品なしにはいられない家族に（婚姻の破綻後が多い）通常のところ低価格であるのを無料にして新生活開始パックとして寄付する。我々はこれをチャリティーでなく、自分たちより不運に見舞われた人々を支援する意志を持った人間の一集団としてこれを行っているのだ。

このように、報告書からは、単純な「チャリティー」でなく、困ったときの近隣の助け合いという意味合いに近く、それと同時に家具を生活に不可欠のものととらえるソファ・プロジェクトの理念が見える。

また、ソファ・プロジェクトの中古家具の循環は、都市において住民の定着とともに受け入れにおいても力を

発揮している。報告書では、ブリストル市役所からの依頼によりシリアからブリストル市への初の難民の受け入れに際し、ソファ・プロジェクトが家庭用品を提供したことが記され、次のように結ばれている[10]。「我々はブリストルの団体であり、そのことを誇りに思う。」

さらに、「報告書」第３番目の目的（c）にあるとおり、中古家具という対象から当然考えられるように、「環境」への配慮がこの団体の活動の基盤にある。また、彼らのウェブサイトの事業内容、言葉、ビジュアル面を詳細に見ていくと、ロゴマークにリサイクルを示す循環のマークが使われていたり、ウェブサイトの店舗の項目の下には、「ファニチャー・リユース・ネットワーク」（ブリストルに本部があるリユース団体のイギリス全国組織）や「ブリストル・リユースネットワーク」などのロゴマークがあり、「私たちは一員です」との表示が示されている。その下には「捨てないで！寄付して！」とあり、「あなたのコミュニティを支えよう」という呼びかけと同時に「ごみを減らそう」とある[11]。

これ以外にも「オフィス家具事業　（The office furniture operation）」という取り組みがあり、オフィスの閉鎖や改装のため不要となったオフィス家具が大量に出た場合、それらを引き受ける[12]。その撤去にソファ・プロジェクトのスタッフと車を提供することも可能である。このようにして大量に回収したオフィス家具は小規模な事業所やチャリティー団体、在宅での事業者へ低価格で販売される。再利用や再製品化するのが不可能な物は完全に再資源化される。

以上のように詳しく見てみると、2017年の現時点では当該団体の目的は、相川（2002）がかつて示した「寄付者（比較的裕福な層）と対象者（インナーシティに住む低所得層）とがはっきり分かれ、かつその関係を明言している」チャリティーという役割にとどまらないことがわかる。それよりも、当該団体もそこに寄付する者も、市民の一員として、近隣住民を通した地域支援、それがもたらす都市再生、より広い環境への配慮という大きな理想を日常レベルでめざしていると考えられる。そして、家電なども多く扱い、さらに中古衣料も近年始めたが、根幹にあるのは生活の基盤にあるのが家具であるという強い理念が読み取れる。

1-1-3. 財源

2016年「報告書」をもとに、ソファ・プロジェクトの財源についても簡単にここでふれておきたい。表１は2016年３月31日までの会計年度のソファ・プロジェクトの収入と前年比較である。ここから、「寄付・遺贈」が前年よりかなり減っていることがわかる。

「寄付・遺贈」の詳細は表２のとおりである。ここから、各種財団からの補助金や一般からの多額・少額の寄付金があることが明らかである。最大の補助金はイギリスの大手銀行ロイズの関連財団（Lloyds TSB Foundation）であり、その下に匿名者による多額寄付金、企業創立者の財団（Charles Hayward Trust）[13]、早世した若者を記念した財団（The E D Charitable Trust）[14]など様々な種類の団体からの補助金が続く。2015年で終わった７団体の代わりに2016年では新たな５団体の補助金を得ている。

表１　ソファ・プロジェクトの収入　2016年と前年比較

	2016年総額（ポンド）	2015年総額（ポンド）
収入		
寄付・遺贈	128,444	203,890
チャリティー活動	859,013	871,064
投資	39,894	32,387
収入合計	1,027,351	1,107,241

資料：‘The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016’, p. 10.

表３「チャリティー活動からの収入内訳」（2016年と前年比較）を見ると、全体として家庭用電気製品の販売の収入額の方が大きいが、2016年に関する限り、個々のカテゴリーの中では、「寄付された家具の販売」は「新品の家庭用電気製品の販売」の次の収入額を占める。表４は支出の内訳である。「報告書」の説明によれば、従業員の平均的な人数は、2015年には27人、2016年には30人であり、両年とも年間６万ポンドを超える給料を得た従業員はなく、理事は無報酬である[15]。

表２　ソファ・プロジェクト「寄付・遺贈」内訳　2016年と前年比較

	2016年総額（ポンド）	2015年総額（ポンド）
5,000ポンド以上の寄付・遺贈		
Lloyds TSB Foundation	25,000	25,000
Anonymous	15,000	20,000
Charles Hayward Trust	15,000	15,000
The E D Charitable Trust	15,000	—
Kestrel Man Trust	8,000	—
CHK Charities	5,000	5,000
Beatrice Laing	5,000	—
29th May 1961 Charitable Trust	5,000	—
Pagan Osbourne	5,000	—
Garfield Weston Trust	—	30,000
Tudor Trust	—	25,000
Esmee Fairbarin	—	11,700
Van Neste Foundation	—	7,000
1970 Trust	—	5,000
Drapers Charitable Trust	—	5,000
Singer Foundation	—	5,000
5,000ポンド以下の寄付・遺贈	30,444	50,190
寄付・遺贈の合計	128,444	203,890

資料：‘The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016’, p.17.

表３　ソファ・プロジェクト「チャリティー活動からの収入」内訳　2016年と前年比較

チャリティー活動からの収入内訳	2016年総額（ポンド）	2015年総額（ポンド）
寄付された家具の販売	191,491	148,577
新品の家具の販売	58,935	88,332
中古の家庭用電気製品の販売	79,591	156,676
新品の家庭用電気製品の販売	309,754	194,661
少々難ありの家庭用電気製品の販売	144,539	209,783
輸送と物流からの収入	74,703	73,035
チャリティー活動からの収入合計	859,013	871,064

資料：‘The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016’, p.17.

1-2. ソファ・プロジェクトの家具の取り扱い

次に、ソファ・プロジェクトのリユース家具の取り扱いの中から、九大博物館プロジェクトにとって参考となり得る点を取り上げる。

a. 不要家具の回収対象と方法

市民がソファ・プロジェクトに不要家具を提供する際の回収基準についてもウェブサイトに説明がされている[16]。ソファ・プロジェクトが市民から不要家具を直接回収に対応する基準を表５にまとめた。家具以外の電気製品・ガス器具・衣料などはここでは除外する。

この情報からは、基準や条件がない家具の種類はどのような物でも回収可能と受け取れ、上記リストの中でも、注記の無い物は需要が高いからであろうと推測できる。一方、上記リストには含まれない種類の物も、市民がソファ・プロジェクトの店舗に持ち込めば受け入れ可能な物はある。表６にまとめた。

表４　ソファ・プロジェクト支出内訳　2016年と前年比較

支出内訳	2016年総額（ポンド）	2015年総額（ポンド）
人件費	334,066	378,516
商品販売費	360,491	338,358
生産費	71,791	57,605
輸送費	35,692	41,409
施設費	139,189	146,383
事務所費用	37,535	40,995
法的・専門費用	41,236	10,429
監査費	5,100	3,686
減価償却	5,610	11,962
不良貸し付け	613	-
銀行手数料	3,494	5,786
その他	15,757	10,240
総支出	1,050,574	1,045,369

資料：‘The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016’, p.18.

表５　ソファ・プロジェクトが市民から不要家具を直接回収する際の基準

不要家具の回収可能な物	基準や条件
ソファ	防火ラベルがあり良い状態の物
テーブルと椅子	
標準の両扉の衣装箪笥	6フィート以下
引出付きチェスト	
ベッドベース	木製あるいはボックススプリングで良い状態の物。マットレスは不要。木製ベッドベースの場合、回収の前に解体しておく必要
ベッドサイドテーブル	
書棚	
レトロ・ヴィンテージ家具	（写真があるとよいが、なくても構わない）
陳列用・保管用収納家具	
長椅子	
寝室用家具（子供用含む）	
オフィス家具	

資料：‘Donate Furniture’, http://sofaproject.org.uk/ donate-for- sofa-project/（2017年８月21日アクセス）

表６　市民がソファ・プロジェクトの店舗に持ち込めば受け入れ可能な不要家具

店舗に持ち込めば受け入れ可能な不要家具の種類
家庭用あるいはオフィス家具はどのような物でも検討（一人掛けのアームチェア含む）
ダイニングテーブル用だが別々のベンチや椅子（テーブルと椅子がセットの場合はソファ・プロジェクト側が回収に行く）、庭用ベンチ
足置き
標準サイズでないベッド（子供用ベッド、ただし二段ベッドでないもの）

資料：‘Donate Furniture’, http://sofaproject.org.uk/donate-for- sofa-project/（2017年８月21日アクセス）

ただ、製品の状態、清潔、防火の安全性についてはさらに細かな注意事項が説明されている[17]。要点を以下にまとめた。

・ソファ、ソファベッド、布団類、あるいはいかなる種類でも詰め物のある椅子は、口紅やシミやいかなる構造上の損傷がない、清潔で良い状態になっている必要がある。
・防火ラベルには「不注意が火事の原因となる」という文言がついていなければならない。
・ベッド用の防火ラベルは異なる　－　マッチか炎のマークがついている、小さな青いラベルである。
・私たちのヴァンはスペースが限られているため、高さ６フィート、幅４フィートを超える品は回収に行くことができない。
・マットレスの回収はしていない。
・回収に伺う運転手が回収当日全体の状態を見て決めるため、提供されたすべての品物を受け入れるとは保証できない。

以上から、品目ごとの基準や条件に加え、製品の保存状態、清潔、防火の安全性によって受け入れ可能かどうか決まり、回収の場合は車内のスペースと当日の状況によっても判断されるということがわかる。

市民が不要家具を提供する際の回収代金はソファ・プロジェクトの上記回収基準に合致すれば無料である[18]。一方でソファ・プロジェクトは、一日に多くの予約があり、かつ広い地域を回り、交通状況もあるので、回収や配達時間を指定できないとしている。また、誰かが在宅している場合に限り回収できると明記している。これらの記述から、ソファ・プロジェクトでは効率よく回収を進めるため、最低限必要以外のサービスを省略していることも明らかである。

b. 購入者への配達および支払方法

このようにしてソファ・プロジェクトに集められた不要家具を購入する際の配達についてもウェブサイトの「よくある質問」に記載されている[19]。多くの購入者が必要としている情報なのであろう、地域ごとに配達代金が明示されている。４つの地域に分け、近い順に15ポンドから30ポンドまでとなっている[20]。注意書きにはまた、配達日として双方で同意した日に不在の場合は追加料金がかかる場合があると促している。ここにも回収の際と同様の徹底した同プロジェクトの方針が表れている。

支払方法についてはデビットカード、クレジットカード、現金のいずれかであり、小切手は受け付けないが、他のチャリティーから発行されたクーポン券も使用できる、と書かれている[21]。このクーポン券は実際どのようなものかわからないが、チャリティー団体間で共通に使用できるよう発行されているのであろうと推測できる。同プロジェクトのチャリティー団体としての特徴を示す一文である。

c. 苦情への対応

不要家具の質と、扱える量の限界を厳格にした上で、受け入れを決め、回収・配達に際しては最低限必要以外のサービスを省略しているソファ・プロジェクトは、苦情への対応についてはきめ細やかに手続きを定めている[22]。ウェブサイトの「苦情手続き」の項を見ると、利用者が苦情と思わないような小さな勘違いやうまく行かなかったことも、同プロジェクトでは改善に向けての必要な情報であるため積極的に提起してほしい旨呼びかけている。そして、すぐに解決するよう努めるだけでなく、それらが起きたプロセスから学ぶ必要があるためでもあると言っている。

具体的な苦情手続きについては以下の手順で行われる。

(1) 利用者からの提起：利用者が手紙かＥメールで正式に満足がいかなかった問題を伝える。そしてどのようにその問題を解決する必要があるのかも説明する。

(2) 登録と担当者への送付：その苦情は手続き登録するためにサポートマネジャーに送られる。サポートマネ

ジャーは利用者にお礼とともに苦情登録番号を伝える返信をする。サポートマネジャーは、第１審査に携わる関連ラインのマネジャーにその苦情を伝える。もし苦情の中で個人名が特定されていたら、チーフエグゼクティブあるいは同プロジェクトの理事会メンバーに伝える。

(3) 第１審査：第１審査に当たった者は苦情の詳細を検討し、当該利用者に文書で改善案を28日以内に送る。当該利用者にはこの第１審査に満足しない場合は第２審査も要請できると伝える。

(4) 第２審査：当該利用者から第２審査が要請された場合は、同プロジェクト内のより上の地位にいる者に伝えられる。これは理事長の場合や理事会メンバーかチーフエグゼクティブのうち適切な者が当たる。当該利用者はさらなる改善案の文書を受け取る。たいていの場合はこれが最終となる。これ以上の審査は苦情の性質によるが、場合によっては他の外部機関への調査などの選択肢も示される。

(5) 苦情の結果精査：理事会は少なくとも１年に１回苦情数と問題の全体的性格についての報告書と提起された改善案のリストを受け取る。ソファ・プロジェクトは苦情処理手続きに関する利用者からのフィードバックがあれば、それを将来の手続き改善に役立てる。

以上からソファ・プロジェクトは苦情手続きを明確に定め、対応に臨んでいることがわかる。チャリティー団体として寄付された物を安く売るということから考えれば、かなり徹底して苦情に向き合っている。上述したように、回収・配達時間に関してはサービスは極力省略されている。しかし、それ以外では改善のために労力を惜しまない姿勢が伝わる。

２．九大博物館プロジェクトへの参考点

2-1. 質と量 ── 品物の状態と全体のキャパシティを見極めた展開

ソファ・プロジェクトが受け入れる側として家具が良い状態であることを重視しているのはすでに述べたとおりであるが、このことは提供者に向けた（当然ながら購入者も目にするであろう）「よくある質問」にも繰り返されている。「……　私たちの基準に合うという前提で回収の予約に応じているが、そのことは私たちがすべてを実際に受け入れるという保証ではない。いつもお伝えしていることだが、私たちの運転手が私たちの「目」であり、この運転手が到着すると品物の状態がわかる。もしもこの運転手が、品物が受け入れ不可能な状態にあると感じれば、回収の際にそう説明される[23]」。ここにはすでに述べたような当日全体の回収状況という「量」の限界も考えながら、品物の「質」を重視して選択するソファ・プロジェクトの意思が読み取れる。

状況は異なるが、このことは九大博物館プロジェクトが対象とする家具コレクションにも参考となり得る。つまり、取捨選択が必要という点である。新井竜治による同館コレクションの資料評価結果報告でも指摘されていたが、「状態のよい歴史的価値の高いもの」は博物館が収蔵し、展示し、それ以外のものは修理後、学外へ永年貸与したり、学内で備品として使うなど考えねばならない[24]。さらに、博物館で収蔵するものとして選択した場合、その中でもさらに取捨選択が必要であろう。ヴァリエーションを探る上ではいくつかのパターンを確保することは有用ではあるが、同一のものについては、キャパシティを超えて、複数収蔵する必要があるかどうか見極める必要がある。

2-2. 一般への貸与の際のサービスの簡略化、清潔と安全への配慮

そして、学外へ永年貸与する際に、ソファ・プロジェクトのシステムから参考になる点がある。第一にサービスの簡略化である。特にソファ・プロジェクト以上に、九大博物館プロジェクトは営利を目的としない。永年貸与とする上で、貸出先に博物館の活動をサポートしていただくため、寄付金をいただくことも考えられるが、公的機関としてサービスを必要最低限に留める方針は参考にできる。

一方、営利を目的としないとしても、日常に使う家具を永年貸与する上で、九大博物館が貸し出しの際に、ソファ・プロジェクトのように清潔と安全への配慮に関して何らかの策を講じたり、基準を示さなければならない。ソファ・プロジェクトが、市民から提供された中古家具の販売前にどのような修理を行うかについては今回ふれられなかった。しかし、九大博物館プロジェクトにおいては、永年貸与する家具を事前に修理する上でも、吉田

茂二郎他が指摘するように、地元の産業と連携し、進めることが必要である[25]。そこには安全と清潔も含めた一貫したメンテナンスが求められるであろう。

2-3. 家具がつなぐ、地域を基盤とした活用文化財

中古家具を提供する市民にとって、不用品回収の機会は多くあるであろう。一方、中古家具を購入する市民にも、新品・中古を問わず安い家具はどこででも手に入れられる。それにもかかわらず、ソファ・プロジェクトに提供し、購入する市民がいるのはなぜか。提供する市民にとっては特に、コミュニティの一員としての意識が働いているのではないだろうか。捨てるのではなく、寄付をする、寄付をするのであれば、地元の共感できる団体へ、という流れを作り出すソファ・プロジェクトは、その名のとおり、中古家具を通し、コミュニティへ循環をもたらしているといえる。

九大博物館プロジェクトが対象とする家具コレクションの場合、ソファ・プロジェクトとは仕組みは異なるが、活用文化財としての歴史的家具を考える際に、地元への還元、地域での支持を考慮するべきである。九大博物館プロジェクトのキー概念となる「在野保存」に 'Open preservation' という英訳を当てたのも、この文脈にある。収蔵庫に大事に取って置き、時折公開するというよりも、常に社会の中に誰でもアクセスできるよう置き、社会の中で人々が使用しながら保存していく、というイメージである。市民が直接九大博物館の家具コレクションの中からいくつかを永年借用し、自宅で使用する、さらにはそれを一般に公開し、興味を持った市民の間にさらに九大博物館の家具が広がる、ということが実現すれば画期的である。もちろん、対応に当たる人員不足のため、これを実現するのは難しい。学生や市民のボランティアに頼ることになっても、中枢となる組織が必要である。だが、市民への直接永年貸与でなくても、例えば、九大博物館の家具コレクションを利用できる公共施設や店舗などで市民が自由に家具にふれ、使用することで、市民の間に古い家具への愛着と同時に、九大という地元の大学への親しみが増し、「市民の九大家具コレクション」という意識が生まれるかもしれない。ソファ・プロジェクトの例から応用し得るのは、地元の物を通した地域への愛着と誇りが、社会の中で使い続けられる「活用文化財」を支える基盤ともなり得ることである。

おわりに

ソファ・プロジェクトも九大博物館プロジェクトも目的はひとつではない。家具を使い続けること、環境への貢献に加え、都市を活性化する役割も担うことができる。ソファ・プロジェクトは、不要家具を市民が提供し、市民が受け継ぐ「地域」の家具の循環を作り出した。九大博物館プロジェクトも対象と仕組みは異なるが、活用文化財を実現する上で、地域を基盤とした家具の利用の仕組みを考えることが不可欠である。

今回はふれられなかったが、今後、イギリスをはじめヨーロッパ諸国の博物館や美術館収蔵物の市民や施設への短期・長期貸し出しに関わる事例をも調査し、九大博物館プロジェクトへの新たな視点を探し出したい。

注

1　'About the SOFA Project', http://sofaproject.org.uk/about-us/（2017年８月21日アクセス）以下、次の一文の記述も同じ出典に基づく。

2　'The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016', p. 1. 次の二文の記述も同じ出典。

3　Ibid., p. 2. a company limited by guarantee「保証有限責任会社」については、イギリス会社法研究会「イギリス2006年会社法(1)」、『比較法学』第41巻２号（2008年）、365ページ。「英国の青少年育成施策の推進体制等に関する調査報告書」（平成21年３月　内閣府政策統括官（共生社会政策担当））は「多くの社会的企業、チャリティ団体がこの企業形態をとっている」と説明する。ソファ・プロジェクトウェブサイトにも「ソファ・プロジェクトはチャリティーで、社会的企業（social enterprise）で保証有限責任会社（a company limited by guarantee）である」と定義されている。'Frequently Asked Questions', http://sofaproject.org.uk/faq/（2017年８月21日アクセス）

4　'The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016', pp. 2-3.

5　相川康子「イギリスと日本をつなぐ環境政策」、『環境技術』第31号（2002年）、247ページ。 次の一文の記述も同じ出典に基づく。

6　'Sofa Project, Old Market', http://sofaproject.org.uk/#shops（2017年８月21日アクセス）。

7　相川「イギリスと日本をつなぐ環境政策」、247ページ。続く三文も同じ出典。

8　'The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016', pp. 3-4. 次の一文も同じ出典。

9　Ibid., p. 4.

10　Ibid., p. 5.

11　'The SOFA Project', http://sofaproject.org.uk トップページ

（2017年８月21日アクセス）

12　‘About the SOFA Project’, http://sofaproject.org.uk/about-us/（2017年８月21日アクセス）この段落は同じ出典。

13　Charles Hayward Trust については、以下参照：http://www.charleshaywardfoundation.org.uk/（2017年９月22日アクセス）

14　The E D Charitable Trust については、以下参照：http://eddenunziotrust.com/（2017年９月22日アクセス）

15　‘The Sofa Project Report and Audited Financial Statements 31 March 2016’, p.19.

16　‘Donate Furniture’, http://sofaproject.org.uk/ donate-for- sofa-project /（2017年８月21日アクセス）

17　Ibid.

18　当然ながら冷蔵庫など家電は例外で料金がかかる。‘Frequently Asked Questions’, http://sofaproject.org.uk/faq/（2017年６月７日アクセス）続く２文の典拠も同じ。

19　Ibid.

20　Ibid. 次の一文の記述も同じ出典。

21　Ibid.

22　‘Complaints Procedure’, http://sofaproject.org.uk/complaints-procedure /（2017年６月７日アクセス）続く２文および次段落にまとめた手続き(1)～(5)も同じ典拠に基づく。

23　‘Frequently Asked Questions’, http://sofaproject.org.uk/faq/（2017年６月７日アクセス）.

24　新井竜治「平成26年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）特別枠　細目 III：人文社会科学及び文理融合研究奨励【研究課題名】教育研究資料の再評価法の構築とそれらに基づく新学術領域研究（九州大学総合研究博物館）」、5，12-13ページ。

25　吉田茂二郎「九州大学歴史的備品再生プロジェクトについて ── 九大の歴史を語る什器たちを追いかけて ──」、『九州大学総合研究博物館ニュース』、27号（2017年）、6ページ；三島美佐子・岩永省三「九州大学総合研究博物館・第一文館の刷新的利活用（1）経緯」、『九州大学総合研究博物館研究報告』、12号（2014年）、63ページ；新井「教育研究資料の再評価法の構築とそれらに基づく新学術領域研究（九州大学総合研究博物館）」、13ページ。

Received September 28, 2017; accepted November 15, 2017

The Reuse of Second-Hand Furniture: A Case Study of the SOFA Project in Bristol, UK

Akiko SHIMBO

Department of Planning, Architecture and Environmental Systems, College of Systems Engineering and Science,
Shibaura Institute of Technology

The Kyushu University Museum has a collection of furniture of the period from later Meiji to mid-Showa, which was used at the university. The Museum plans a project 'Open Preservation of Cultural Heritage in Use', which means that citizens themselves participate in preservation by *using* it (hereafter 'The Kyushu University Museum's project'). As part of the early stage of the project, this essay introduces an example of 'The SOFA Project', an organisation of Bristol in West England. In the first part of the essay, an overview of the organisation is given and then its reuse systems are examined. There is a similarity between the SOFA Project and the Kyushu University Museum's project in the idea of making the best reuse of unused furniture in society. By analysing its operation, the essay concludes with an examination of what can be learnt from the example of the SOFA Project.

Key words: Reuse of furniture, The SOFA Project, regional development, environmental awareness, civic pride

〈表紙写真の説明〉
旧工学部本館の４階会議室には、この建物が竣工した昭和５年（1930年）当時に購入・配置された会議机、椅子、花台などの歴史的木製家具が現存しており、今でも使われている。この部屋に置くことにした「田村悟史コレクション」の蓄音機３台は、外箱が木製で、建物や家具と同じ時代に製造されているせいか、完全に調和している。

九州大学総合研究博物館研究報告第15-16号
平成30年３月発行

発行者
編集者
九州大学総合研究博物館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
Phone 092-642-4252 / Fax 092-642-4299
URL http://www.museum.kyushu-u.ac.jp

印　刷
城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6
Phone 092-531-7102 / Fax 092-524-4411

九州大学総合研究博物館研究報告

第15-16号
2018年3月

目　次

日比野 友亮／望岡 典隆 ―― 1
九州大学水産学標本室および農学部３号館より発見された江崎悌三博士による南洋諸島の魚類コレクション

川原 恵子／城戸 克弥／丸山 宗利 ―― 17
福岡県玄界灘海岸で採集されたハネカクシ科甲虫

三島 美佐子 ―― 31
田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要

大久保 真利子 ―― 35
田村悟史作成のSPレコードデータベース
―その特徴と公開に向けての課題―

大島 久雄 ―― 45
赤坂小梅と筑豊炭坑文化
―新民謡の地域性―

京谷 啓徳 ―― 57
レコード袋の図像学
―SP盤周辺のデザインをめぐるノート―

三島 美佐子 ―― 65
九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方にむけて

新井 竜治／三島 美佐子 ―― 69
九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題

真保 晶子 ―― 87
中古家具再利用の実践
―イギリス西部ブリストル、ソファ・プロジェクトの事例―

九州大学総合研究博物館
The Kyushu University Museum
九州大学総合研究博物館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/